

昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報

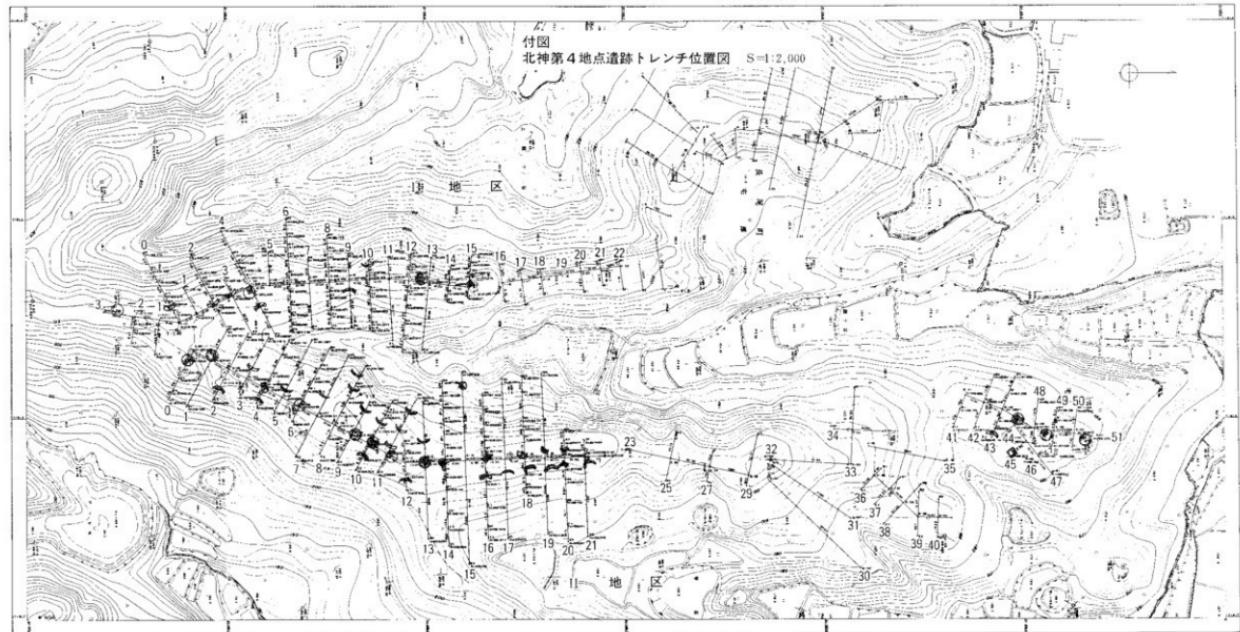


1986

神戸市教育委員会

昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報
正 誤 表

頁	行	誤	正
5	下から10行目	鎌木義晶	鎌木義昌
29	fig.29	第3主体(東から)	第3主体(北から)
70	上から5行目	3号住宅址	3号住居址
87	上から14行目	大分県腰高産	大分県姫島産
99 101 103	天見出し	13. 郡家遺跡(城の前地区)	13. 郡家遺跡(地蔵元地区)
114	下から3行目	白磁碗	白磁碗
128	上から6行目	大鍛冶	大鍛冶
130	fig.192	大前地区SB02	大前地区SB01, SB02
139	下から7行目	小鍛冶	小鍛冶



序

神戸市では、760か所の地点が埋蔵文化財包蔵地として登録され、そこに含まれる遺跡数は1000を超すものと予測されています。

昨年度あたりから、市街地の再開発に伴って遺跡の緊急発掘調査件数が増大し、今年度はこれに対処するため調査体制の整備がせまられた年がありました。そのため昭和58年7月に、3名の学芸員を増員して、教育委員会と神戸市健康教育公社が調査を担当するという体制で文化財保護行政に取り組んでまいりました。このような状況の下で実施した昭和58年度の調査記録を、埋蔵文化財年報として刊行できますことを喜ばしく思います。

最後に、遺跡調査や史跡整備の指導でお世話になりました関係各位に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

昭和61年3月

神戸市教育長 山本治郎

例　　言

1. 本書は、神戸市教育委員会が昭和58年度に実施した埋蔵文化財事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、神戸市文化財専門委員の指導を得て下記の調査組織によって行った。

調査関係者組織表

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会委員）

野地脩左　　神戸大学名誉教授

小林行雄　　京都大学名誉教授

柏上重光　　神戸新聞社監査員　神戸市立博物館副館長

神戸市教育委員会事務局

教育長	山本治郎
社会教育部長	太田修治
文化財課長	八尾 明
埋蔵文化財係長	奥田哲通
事務担当	福田信安
学芸員	宮本郁雄
調査担当	渡辺伸行 〃　菅本宏明 〃　口野博史 〃　森田 稔 〃　丹治康明 〃　池野素子

神戸市健康教育公社

理事長	山本 治郎
専務理事	米田 耕
常務理事	西光泰一郎
企画課長	津川 亨
総務係長	錦織 潤
事務職員	高井さつき
〃	柴山 智子
調査担当	学芸員 丸山 潔
〃	西岡 巧次
〃	千種 浩
〃	黒田 恭正
〃	西岡 誠司

2. 本書に掲載した位置図は、神戸市立中学校教育研究会社会科研究部編集の5万分の1神戸市全国を使用した。
3. 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当者が執筆して作成した。
4. 本書の編集は山田郁子の協力を得て渡辺伸行が担当した。

目 次

序

例 言

I.	昭和58年度事業概要	1
	昭和58年度埋蔵文化財発掘調査一覧表	4
	昭和58年度神戸市埋蔵文化財調査位置図	6
II.	昭和58年度の発掘調査	13
1.	西神ニュータウン内遺跡	13
	西神第59地点遺跡	13
	西神第62B地点遺跡	17
	西神第65-1地点遺跡、第65地点遺跡	23
2.	七曲り6号墳	26
3.	芝崎遺跡	30
4.	西神中央線長谷遺跡	32
5.	神出古窯址群	45
6.	居住遺跡	52
7.	頑高山遺跡	54
8.	池上北遺跡	62
9.	神楽遺跡	69
10.	湊川遺跡	75
11.	宇治川南遺跡	78
12.	郡家遺跡（城の前地区）	88
13.	郡家遺跡（地蔵元地区）	98
14.	天神川遺跡	105
15.	田中元清水遺跡	109
16.	山田小学校内遺跡	112
17.	北神ニュータウン内遺跡	117
	北神第47地点遺跡	117
	北神第4地点遺跡	124
18.	下宅原遺跡	126
19.	塩田遺跡	133

挿 図 目 次

fig. 1	史跡処女塚古墳環境整備実施図	1
fig. 2	調査地全景（北から）	13
fig. 3	調査区全体図	14
fig. 4	ST01 実測図	15
fig. 5	ST03 実測図	15
fig. 6	ST03 出土土器実測図	15
fig. 7	調査地全景（南から）	16
fig. 8	ST01（東から）	16
fig. 9	ST03（北から）	16
fig. 10	ST03遺物出土状況	16
fig. 11	調査区周辺図	18
fig. 12	第62B地点主要遺構図	19
fig. 13	SB08（南から）	20
fig. 14	SB10 土師器出土状況	20
fig. 15	SD01(手前)とSB07(南から)	21
fig. 16	SB07（南から）	21
fig. 17	SB10（西から）	21
fig. 18	出土遺物実測図	22
fig. 19	トレンチ設定図、住居址検出 位置図	24
fig. 20	A地区、B地区遠景	24
fig. 21	B地区第10トレンチ住居址	24
fig. 22	B地区出土弥生土器実測図	25
fig. 23	位置図	26
fig. 24	七曲り6号埴埴丘測量図	27
fig. 25	鉄刀実測図	27
fig. 26	出土遺物実測図	28
fig. 27	七曲り6号埴全景（北から）	29
fig. 28	第1主体鉄刀出土状況（東から）	29
fig. 29	第3主体（東から）	29
fig. 30	芝崎遺跡遺構平面図	30
fig. 31	芝崎遺跡全景（西から）	31
fig. 32	調査地位置図	32
fig. 33	調査区全景	34
fig. 34	調査地全体図	35
fig. 35	掘立柱建物	36
fig. 36	SB01（東から）	36
fig. 37	土壤実測図	38
fig. 38	SD01とSK03・04（北から）	39
fig. 39	SK03、SK07（北から）	39
fig. 40	SK20とSD14の関係（南から）	39
fig. 41	SK04 検出状況（北から）	40
fig. 42	SK04 炭化物出土状況（北から）	40
fig. 43	SK04 完掘状況（北から）	40
fig. 44	SK09 遺物出土状況（北から）	40
fig. 45	出土遺物実測図	41
fig. 46	SD08 遺物出土状況	42
fig. 47	P104 遺物出土状況	42
fig. 48	SK24 遺物出土状況	43
fig. 49	SK03 炭化物出土状況	43
fig. 50	調査地位置図	45
fig. 51	遺構全体図	46
fig. 52	老人口1号窓、2号窓全景 (南から)	47
fig. 53	老人口1号窓（南から）	47
fig. 54	老人口2号窓（南から）	47
fig. 55	老人口1号窓実測図	48
fig. 56	老人口2号窓実測図	48
fig. 57	片口鉢実測図	49
fig. 58	片口鉢実測図	50
fig. 59	須恵器壺、皿実測図及び拓影	51
fig. 60	居住遺跡遺構図	52
fig. 61	出土遺物実測図	53
fig. 62	頭高山遺跡調査地位置図	54
fig. 63	頭高山遺跡調査区全図	56
fig. 64	頭高山遺跡東斜面全景（北から）	57
fig. 65	頭高山遺跡東斜面全景（南から）	57
fig. 66	SB15、SX05（西から）	57
fig. 67	SB15、SX05平面図	58
fig. 68	SK11 遺物出土状況図	58
fig. 69	ST01、02 検出状況	59
fig. 70	ST01、02 拓影	59
fig. 71	SK11 遺物出土状況	59
fig. 72	ST01、02 土器館出土状況 実測図	60
fig. 73	SX02、SB11（東から）	61
fig. 74	SX06(手前)とSB16(南から)	61
fig. 75	調査地位置図	62
fig. 76	調査区平面図	63
fig. 77	調査区全景（西から）	64
fig. 78	調査区全景（東から）	64
fig. 79	SD02 遺物出土状況	64

fig. 80	SB01 平面図	65
fig. 81	SB01 出土遺物実測図	65
fig. 82	SB02 平面図	65
fig. 83	SB02 出土遺物実測図	66
fig. 84	SD02 土師器出土状況図	66
fig. 85	SD02 出土遺物実測図	66
fig. 86	ST01 平面図	67
fig. 87	ST01 断面図	67
fig. 88	ST01 検出状況	67
fig. 89	ST01 埋置状況	67
fig. 90	ST01 蓋取り上げ後	67
fig. 91	ST01 出土遺物実測図	68
fig. 92	ST01 壺棺復元状況	68
fig. 93	調査地位置図	69
fig. 94	遺構全体図	70
fig. 95	調査地全景（西から）	71
fig. 96	調査地全景（南から）	71
fig. 97	SB03（南から）	71
fig. 98	調査地西半平面図	72
fig. 99	SB05 平面図	72
fig. 100	SB04（南から）	73
fig. 101	SK02 土器出土状況	73
fig. 102	出土遺物実測図	74
fig. 103	調査地遠景	75
fig. 104	第2面SX01	75
fig. 105	第2面実測図	76
fig. 106	第3面実測図	76
fig. 107	出土遺物実測図	77
fig. 108	位置図	78
fig. 109	トレンチ設定図	78
fig. 110	平地式住居址（南から）	79
fig. 111	木棺墓（南から）	79
fig. 112	古墳時代溝内土器出土状況 実測図	80
fig. 113	溝内土器出土状況	80
fig. 114	旧河道内弥生土器出土状況	81
fig. 115	3トレンチ南壁断面	81
fig. 116	縄文土器実測図	82
fig. 117	弥生土器実測図	83
fig. 118	縄文土器拓影	84
fig. 119	縄文土器拓影	85
fig. 120	出土遺物実測図	86
fig. 121	近世石組溝（南から）	86
fig. 122	近代瓦積み井戸	86
fig. 123	3トレンチ近世溝	87
fig. 124	都家遺跡内調査地位置図	89
fig. 125	遺構全体図	90
fig. 126	SB03 平面図	91
fig. 127	SB04 平面図	91
fig. 128	SX01 平面図	91
fig. 129	SE01 実測図	92
fig. 130	SE01	92
fig. 131	調査地全景（南から）	93
fig. 132	SB01	93
fig. 133	ST01、02（東から）	93
fig. 134	ST03	94
fig. 135	SB03	94
fig. 136	SX01	94
fig. 137	ST01、ST02、ST03 平面図	95
fig. 138	ST01 遺物出土状況	95
fig. 139	SX01 遺物出土状況	95
fig. 140	滑石製紡錘車実測図	96
fig. 141	須恵器実測図	96
fig. 142	出土遺物実測図	97
fig. 143	調査地位置図	98
fig. 144	第1次調査遺構平面図	99
fig. 145	土壤1 土器出土状況	99
fig. 146	第1次調査地蔵元地区全景 (東から)	100
fig. 147	第1次調査土壤1（東から）	100
fig. 148	第2次調査城の前地区全景 (南から)	100
fig. 149	土壤1 出土遺物	101
fig. 150	淡茶色砂質土層出土遺物	101
fig. 151	暗褐色粘性砂質土層出土遺物	102
fig. 152	河川状遺構出土遺物	102
fig. 153	第2次調査遺構平面図	103
fig. 154	天神川遺跡位置図	105
fig. 155	天神川遺跡調査区平面図	106
fig. 156	木棺墓検出状況(東から)	107
fig. 157	土器群(手前)と木棺墓1(東から)	107
fig. 158	木棺墓2(南から)	107
fig. 159	土壤1	108
fig. 160	調査区平面図	109
fig. 161	自然流路2（北から）	110
fig. 162	出土石器	110

fig.163	第II様式壺形土器	111	fig.187	下宅原遺跡遺構図	127
fig.164	調査地全景（西から）	112	fig.188	辻垣内地区全景（東から）	128
fig.165	遺構全体図	113	fig.189	SB 01（北から）	129
fig.166	SB 02 平面図	114	fig.190	SB 02（南から）	129
fig.167	SB 01 平面図	114	fig.191	SB 03、04（南から）	129
fig.168	焼土壙実測図	115	fig.192	大前地区 SB 02	130
fig.169	SB 01（西から）	116	fig.193	SX 01、02	131
fig.170	SB 02（北から）	116	fig.194	出土遺物実測図	132
fig.171	焼土壙（西から）	116	fig.195	調査区位置図	133
fig.172	北神第47地点58年度調査上層 遺構図	118	fig.196	北地区平面図	134
fig.173	下層遺構図	119	fig.197	北地区全景（北から）	135
fig.174	北神第47地点遺跡全景	120	fig.198	北地区、手前は SD02（南から）	135
fig.175	火葬墓実測図	121	fig.199	ピット52縁施陶器出土状況	136
fig.176	出土土器実測図	121	fig.200	南地区平面図	136
fig.177	ST 61、ST 62	122	fig.201	南地区全景（北から）	137
fig.178	ST 66～ST 68	122	fig.202	井戸（SE 01）	137
fig.179	ST 64	122	fig.203	SD 06 木柵検出状況	137
fig.180	ST 65	122	fig.204	SB 01 土器出土状況	138
fig.181	ST 66	122	fig.205	SB 01 出土遺物	138
fig.182	ST 68	122	fig.206	北地区出土遺物	138
fig.183	ST 75、ST 78	122	fig.207	SB 01 全景（西から）	139
fig.184	ST 77	122	fig.208	住居址内遺物出土状況	139
fig.185	北神第4地点遺跡全景（西から）	125	fig.209	平田地区試掘場設定図	140
fig.186	位置図	126	fig.210	T、P 4 土壌	140

I. 昭和58年度事業概要

1. 文化財 史跡処女塚古墳復元整備

保護事業

史跡処女塚古墳の復元整備事業は、国の補助金をえて昭和54年度から開始し、今年で5年目を迎える。昭和57年度までの発掘調査によって、処女塚古墳は全長約70m、前方部二段、後方部三段築成の前方後方墳であることが判明している。昨年度までの整備は、周辺の石垣と防護柵の設置を行ってきた。

今年度は、史跡処女塚古墳復元整備委員会を設置し、その指導の下に、墳丘整備と西側擁壁工事と防護柵の設置、東側玉石階段の復旧工事を行った。墳丘整備は、前方部、後方部とも真砂土で盛土したあと法面を整形し、芝張りを施した。また、墳頂部には、それぞれ排水施設を設け、集水樹をとりつけた。整備費用は1060万円である。

史跡処女塚古墳復元整備委員会委員

工楽善通 奈良国立文化財研究所

田中哲雄 "

野地脩左 神戸市文化財専門委員

小林行雄 "

柏上重光 "

fig. 1 史跡処女塚古墳
環境整備実施図



2. 普及啓発 **史跡五色塚古墳の公開と大歳山遺跡復元住居の公開事業**

垂水区五色山2丁目に所在する史跡五色塚古墳は、年間を通じ無料公開しております、全国各地からの見学者が訪れている。昭和58年は、団体21632名、個人26583名、合計48215名の見学者が訪れた。一方、垂水区西舞子4丁目に所在する大歳山遺跡公園では、例年11月の文化財保護強調月間に弥生時代の復元住居の公開を行っているが、今年度も11月1日から11月7日まで復元住居を公開し、同時に見学者への説明も行った。期間中にのべ850名の見学者が訪れた。

現地説明会の開催

昭和58年度は、下記の5遺跡で現地説明会を開催し、発掘調査の成果を広く市民に公表した。

番号	遺跡名	説明年月日
1	居住、小山遺跡(A地区)	昭和58年4月24日
2	頭高山遺跡	昭和58年7月24日
3	神楽遺跡	昭和58年10月9日
4	郡家遺跡	昭和59年2月11日
5	下宅原遺跡	昭和59年2月19日

刊行物

昭和58年度の埋蔵文化財関係の刊行物は、下記の3点である。

1. 昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報	価額 1200円
2. 新方遺跡発掘調査概要・居住遺跡発掘調査概要	価額 500円
3. 昭和57年度神戸市文化財年報	価額 700円

3. 緊急発掘調査

神戸市では、500m²以上の開発行為についての事前審査で、埋蔵文化財の保護に十分配慮するよう指導している。それに伴い、昭和58年度は埋蔵文化財分布調査依頼書の提出が247件あり、昨年度より43件も増加した。分布調査の結果に基き、試掘調査を必要としたものは98件であった。この他、公営住宅や公立学校の建て替え等に伴って実施した試掘調査が5件ある。試掘調査の件数は合計103件にもなり、昨年度を大幅に上回っている。これを地域別にみると、圧倒的に市街地での試掘調査が多い。特に東灘区、灘区での調査件数が激増しているのが注目される。

昭和58年度埋蔵文化財試掘調査件数

地区	件 数	備 考
市街地東部	51	東灘区、灘区、中央区（印生田区）
市街地西部	23	中央区（印生田区）、兵庫区、長田区、須磨区、垂水区
西 区	21	
北 区	3	
計	98	

一方、昭和58年度の緊急発掘調査は、西区14件、市街地13件、北区8件の合計35件を数える。調査原因を事業別にみると公共事業23件、民間事業12件と圧倒的に公共事業に伴う発掘調査が多い。公共事業はニュータウン建設やそれに伴う道路建設、土地区画整理事業、圃場整備、公立学校、公営住宅等の建設事業などが主なものである。それに対し、民間事業は市街地でのマンション建設や宅地造成が多い。

このように昭和58年度に入り、試掘調査、発掘調査の件数が増大したため、昭和58年7月から、東灘区郡家遺跡、西区西神ニュータウン内遺跡、北区北神ニュータウン内遺跡の3遺跡の発掘調査業務を神戸市健康教育公社が行うことになった。それに伴って、文化財課から5名の職員が出向し、上記の3遺跡の発掘調査に携わった。

4. その他

新修神戸市史編集への協力

新修神戸市史編集室から文化財課が「新修神戸市史 原始・古代編」の資料収集を委託され、昭和58年度から旧石器・縄文・弥生・古墳の三班に分かれ、資料収集を行うことにした。今年度、弥生班は土器の図化を行い、古墳班は、北区内の古墳の分布調査と墳丘測量をあわせて行った。

文化財専門委員の指導

今年度、下記の4遺跡の発掘調査には、文化財専門委員の指導を仰いだ。

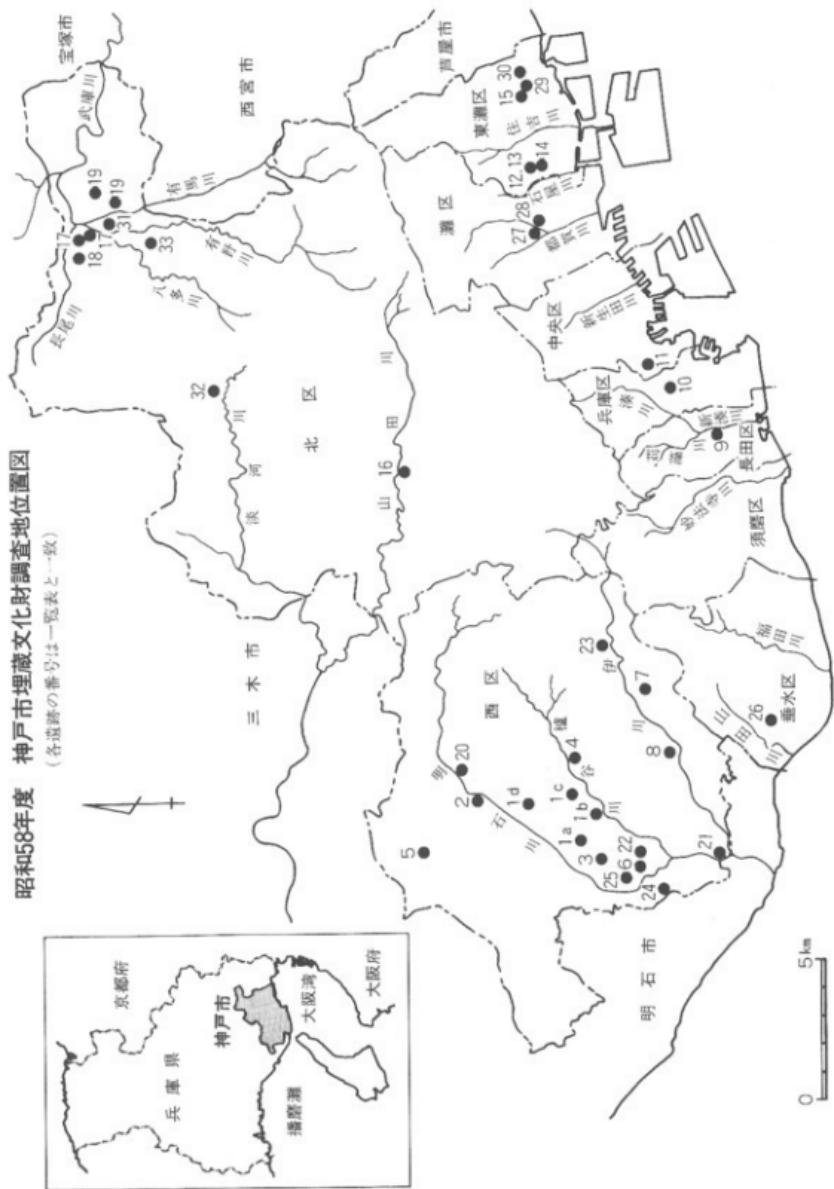
視察場所	日 時	野地委員	小林委員	柏上委員
頭高山遺跡	昭和58年7月			
篠原遺跡、神楽遺跡	昭和58年10月	"	"	"
天神川遺跡	昭和59年2月	藤田和夫委員（地質）		

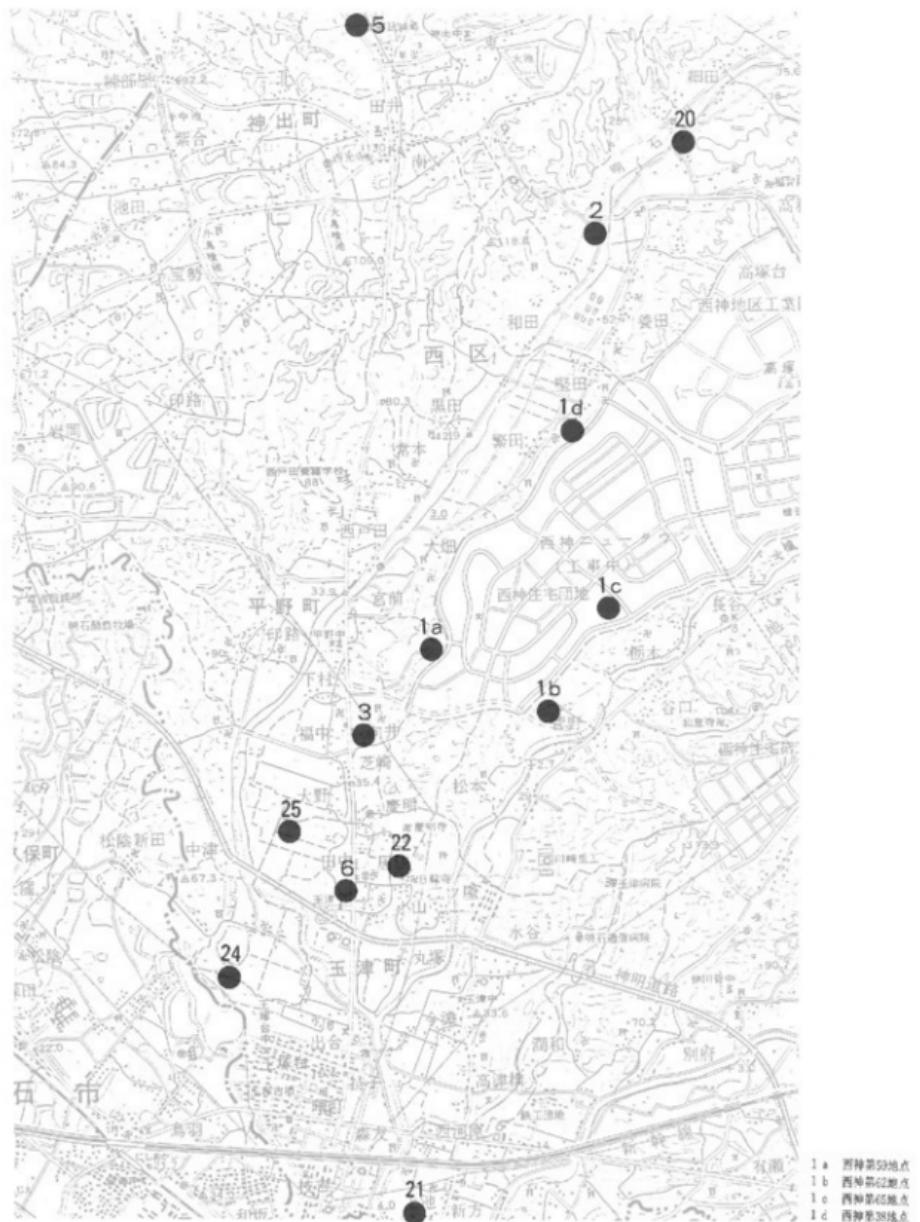
昭和58年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表

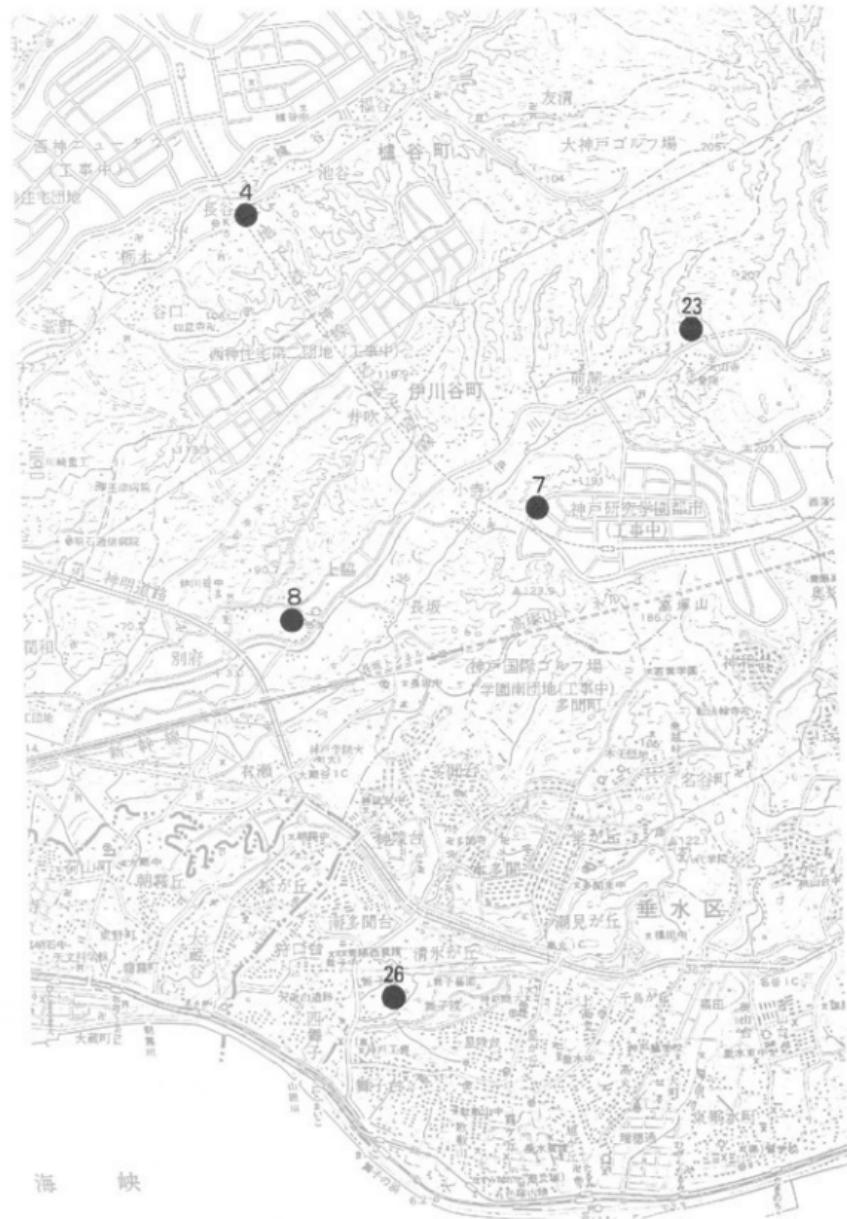
番号	遺跡名	所在地	調査原因	調査者	調査面積
1	西神ニュータウン内遺跡	西区平野町鶴川、名前 西区樺谷町菅野、杨木	西神ニュータウン建設及び関連事業	神戸市健康教育公社	3,900m ²
2	七山り6号墳	西区押部谷町	畠造成	神戸市教育委員会	150m ²
3	芝崎遺跡	西区平野町芝崎	個人住宅建設事業	"	100m ²
4	西神中央線長谷遺跡	西区樺谷町長谷	西神中央線建設事業	"	4,500m ²
5	神出古窯址群	西区神出町	圃場整備	"	500m ²
6	居住遺跡	西区玉津町居住	倉庫建設事業	"	450m ²
7	頃高山西遺跡	西区伊川谷町小寺	神戸研究学園都市建設事業	"	4,000m ²
8	池上北遺跡	西区伊川谷町上船	上地区画整理事業	"	400m ²
9	神楽遺跡	長田区神楽町	保育所延替え事業	"	400m ²
10	湊川遺跡	兵庫区下沢通	マンション建設事業	"	700m ²
11	宇治川南遺跡	中央区祇町1丁目	市営住宅建設事業	"	1,920m ²
12	都家遺跡(城の前地区)	東灘区御影町	マンション建設事業	"	780m ²
13	都家遺跡(地蔵元地区)	"	都市計画道路	神戸市健康教育公社	1,110m ²
14	天神川遺跡	東灘区御影町の前	"	"	430m ²
15	田中元清水遺跡	東灘区田中町1丁目	マンション建設事業	遠藤順昭	275m ²
16	山田小学校内遺跡	北区山田町中	小学校改築事業	神戸市教育委員会	800m ²
17	北神ニュータウン内遺跡	北区長尾町、道場町	北神ニュータウン建設	神戸市健康教育公社	5,000m ²
18	下宅原遺跡	北区長尾町下宅原	道路建設事業	"	2,300m ²
19	塩用遺跡	北区道場町塩田	圃場整備	神戸市教育委員会	900m ²
20	元住吉山遺跡	西区押部谷町	道路建設事業	"	100m ²
21	上池	西区玉津町上池	市営住宅建設事業	"	100m ²
22	居住・小山遺跡	西区玉津町居住、小山	住宅街区整備事業	"	150m ²
23	太山寺坊跡	西区伊川谷町前開	阪神高速道路工事用道路	平安博物館	600m ²
24	出合遺跡	西区玉津町	土地区画整理事業	瀬戸内考古学研究所	
25	玉津田中遺跡	西区玉津町田中	"	兵庫県教育委員会	
26	舞子占墳群東市ヶ坂3号墳	垂水区舞子坂2丁目	配水池整備事業 宅地造成	神戸市教育委員会	320m ²
27	森原A遺跡	灘区森原中町5丁目	宅地造成	平安博物館	700m ²
28	森原B遺跡	灘区森原中町2丁目	杜員研修所建設	多潤敏樹	737m ²
29	本山遺跡	東灘区本山町4丁目	マンション建設	平安博物館	360m ²
30	本庄町遺跡	東灘区本庄町1丁目	"	"	700m ²
31	日下部遺跡	北区道場町日下部	圃場整備	神戸市教育委員会	600m ²
32	神田遺跡	北区淡河町	"	"	150m ²
33	星和八多	北区有野町二郎	宅地造成	"	500m ²

調査期間	調査担当者	調査内容	備考
58.6.1~59.3.31	千種 浩	第38地点毎少時代中期台壇、第59地点弥生時代中期聚落群、第62地点6C前半柱立柱遺物2種、第63地点弥生時代中期穴式住居址16棟	
59.3.26~59.3.31	"	円墳 直径11m 木棺直葬3	殆ど破壊される
58.10.4~10.11	"	中世掘立柱建物	
58.4.1~7.31	渡辺 伸行 白野 博史	縄文時代 焼土塙、溝跡	
58.6.1~59.3.31	森田 稔	平安~鎌倉時代 須恵器窯址、工房址、集落址	
58.4.1~5.31	丸山 薫	中世掘立柱建物	
58.4.1~7.31	菅本 宏明 森田 宏明	弥生時代中期高地性集落址 堅穴式住居址、土壙、段状遺構、ピット、土器棺墓	昭和57年度から 継続調査
58.10.11~10.31	菅本 宏明	弥生時代堅穴式住居址、壺棺、古墳時代溝跡	
58.8.10~10.15	菅本 宏明	弥生時代河港、古墳時代堅穴式住居址、中世柱穴、溝跡	
58.12.1~12.28	菅本 宏明 森田 宏明	中世 河道	
58.4.1~7.31	丹治 康明 池野 素子	縄文土器(早期~晚期)、古墳時代溝跡	昭和57年度から 継続調査
59.1.9~3.31	森田 稔	弥生時代円形周溝墓、古墳時代堅穴式住居址、掘立柱建物 縄文時代井戸、平安時代掘立柱建物	
58.6.1~59.3.31	西岡 巧次 西岡 勝司	弥生時代~中世 河道、建物址、木棺墓	
58.10.17~11.24	西岡 巧次	万形周溝墓	
58.7.20~8.31	遠藤 順昭	弥生時代中期 河道	
58.7.20~59.10.6	丹治 康明 池野 素子	中世掘立柱建物	
58.6.1~59.3.31	丸山 黒田	弥生時代堅穴式住居址、シスト、中・近世火葬墓	
58.10.17~59.3.31	丸山 黒田 西岡 巧次	古墳時代堅穴式住居址、掘立柱建物、縄文時代掘立柱建物	
58.6.20~59.3.31	菅本 口野 丹治	弥生時代堅穴式住居址、中世集落址	
58.7.12~7.14	宮本 郁雄	縄文時代後期	
58.9.5~9.15	森田 稔	試掘調査 遺構、遺物なし	昭和57年度から 継続調査
58.4.1~4.30	千種 浩	弥生時代堅穴式住居址、古墳	指導・兵庫県教育委員会
59.1.31~3.31	植山 茂	室町時代~江戸時代 非戸状遺構、溝状遺構	昭和58年度兵庫県 選定文化財予報参考書
	鍛木 義昌		"
58.9.12~9.30 58.10.11~10.31	森田 稔	墳丘裾及び石室掘形確認	
58.5.25~9.10	定森 秀夫	縄文時代中期・後期土塙、住居址、弥生時代後期溝跡	
58.7.11~58.10.31	多瀬 敏樹	縄文時代晚期埋甕、弥生時代後期住居址	
58.10.6~12.14	雨 博史	弥生時代 河道	
59.2.1~3.31	片岡 肇	弥生時代?鞋印、中世動物足跡	
58.5.1~59.5.31	千種 浩	中世 土壙、溝跡	
58.10.20~58.11.30	丹治 康明	中世 集落址	
58.8.1~8.15	西岡 巧次 渡辺 伸行	焼土塙(時期不明)	

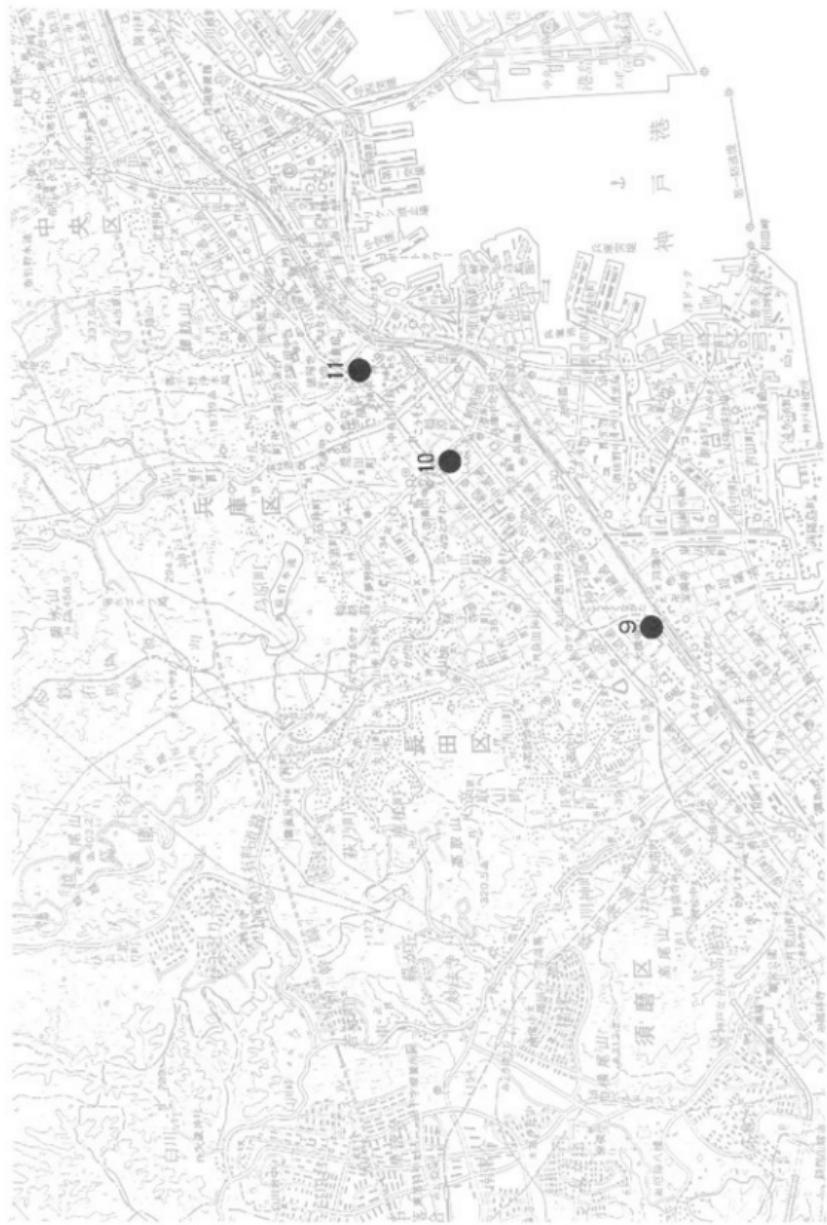
神戸市埋蔵文化財調査地位置図
(各遺跡の番号は一覧表と一致)
昭和58年度





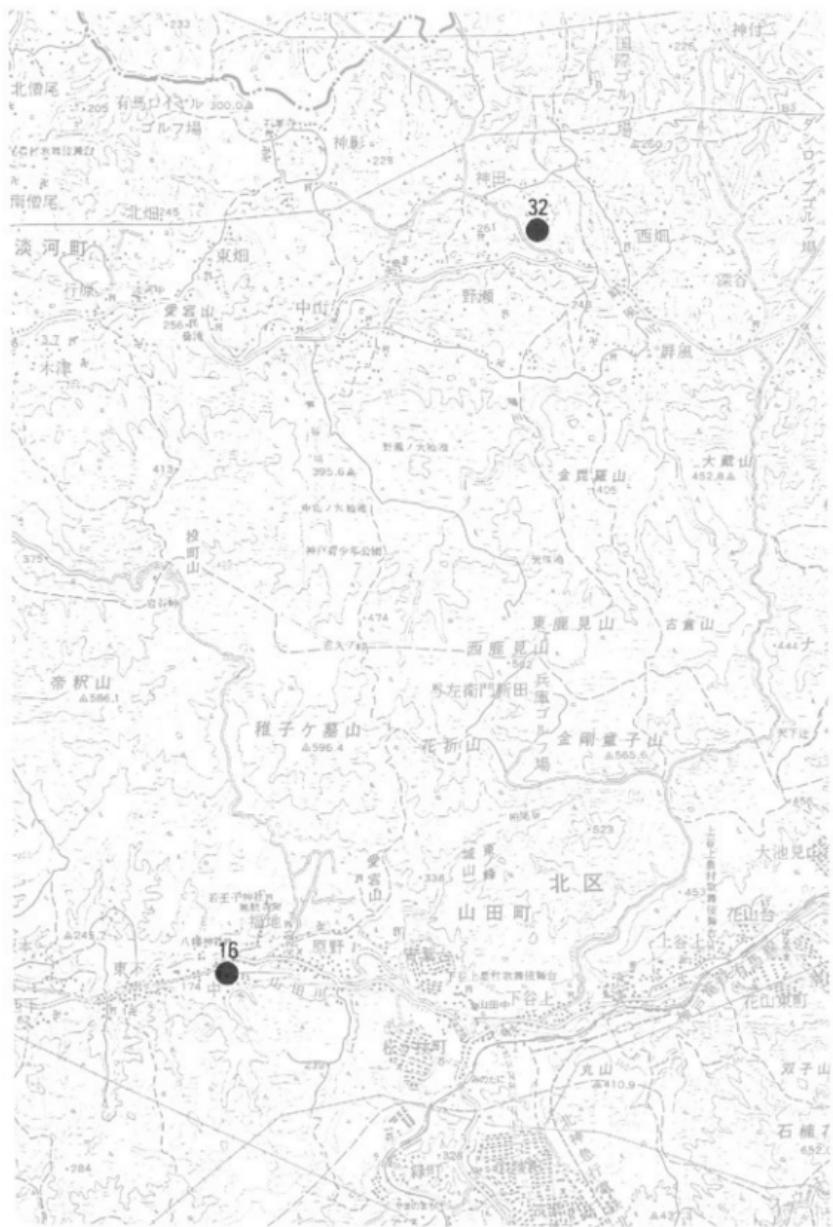


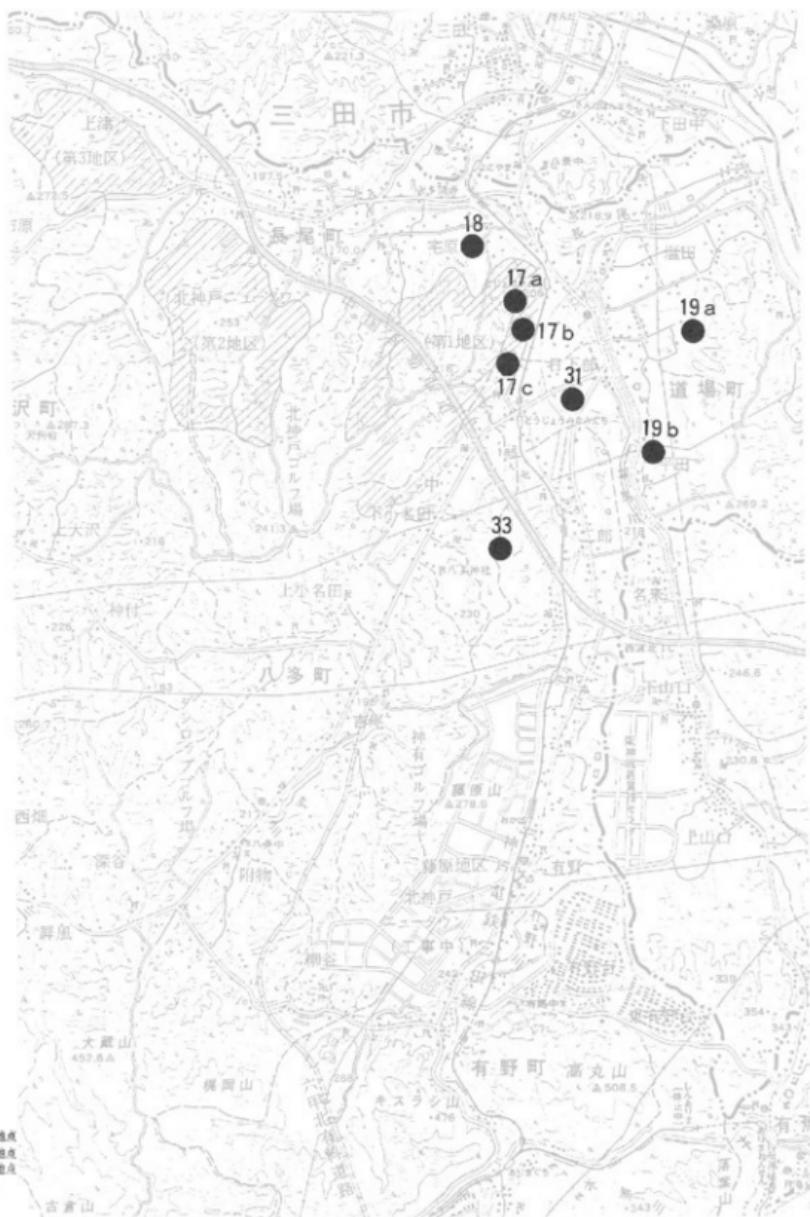
地図の遺跡番号は一覧表と一致





地図の遺跡番号は一覧表と一致





地図の遺跡番号は一覧表と一致

II. 昭和58年度の発掘調査

1. 西神ニュータウン内遺跡

昭和58年度、西神ニュータウン建設及び関連事業区域内の発掘調査は、7か所実施した。そのうち、第59、第62B、第65の各地点では遺構が検出され、第38地点では弥生時代中期（第IV様式）の遺物包含層が検出された。しかし、第58、第60、第36の各地点では遺構は検出されなかった。

西神第59地点遺跡

- 1. 調査経過** 昭和45年の分布調査によって、古墳状隆起が認められたことから、古墳として台帳登録された。

当該地にトレンチを設定し確認調査を実施したところ、土壙墓と思われる遺構が3基確認された。これらの広がりを確認するため、新たにトレンチを追加設定し、最終的には頂部附近 900 m²に全面調査を実施した。

- 2. 調査概要** 箱式木棺墓2基、土壙墓5基、不定形土壙15基を検出した。

S T03は長さ4.97m、幅1.0m、深さ0.15mの断面U字形で、その形状から割竹形木棺墓の掘形と考えられる。大部分はすでに流失している。把手付き壺と、ロート状口縁に擬凹線をもつ壺が供献されていた。壺の体部上半、底部は穿孔されている。時期は弥生時代第IV様式に属すると推定される。

S T05とS T08の埋土には若干の炭化物が含まれていた。SK13からは、弥生時代第IV様式に属する壺が出土している。

fig. 2 調査地全景
(北から)



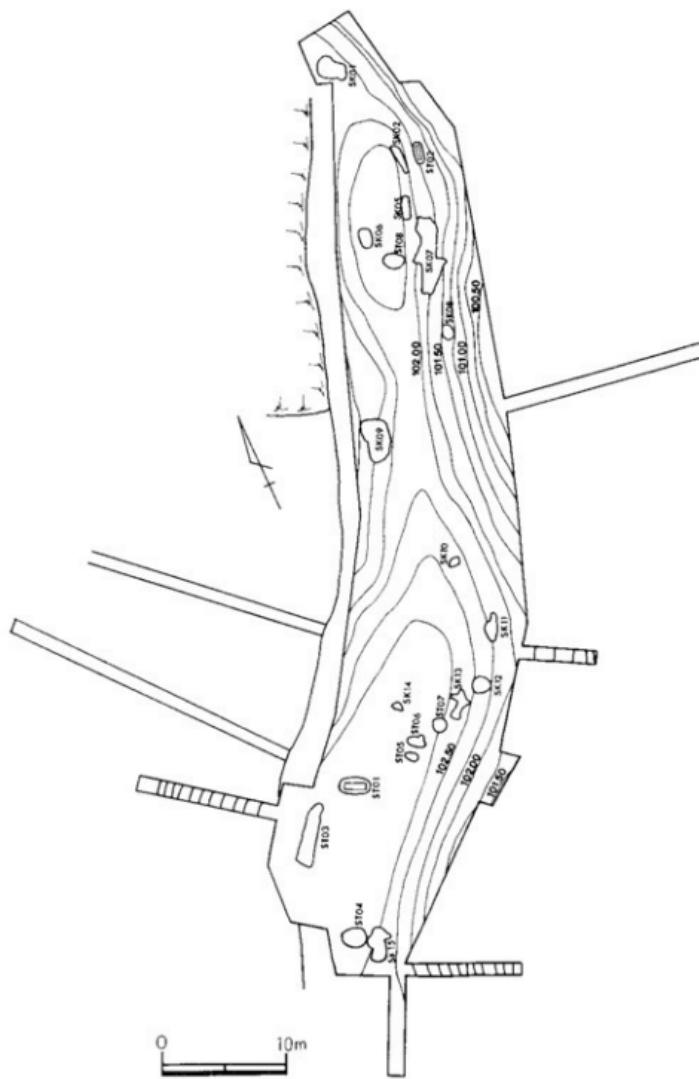


fig. 3 调查区全图



fig. 5 ST03実測図

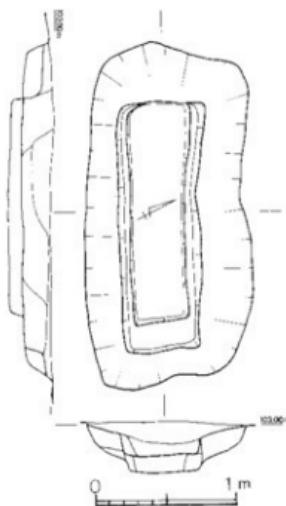


fig. 4 ST01実測図

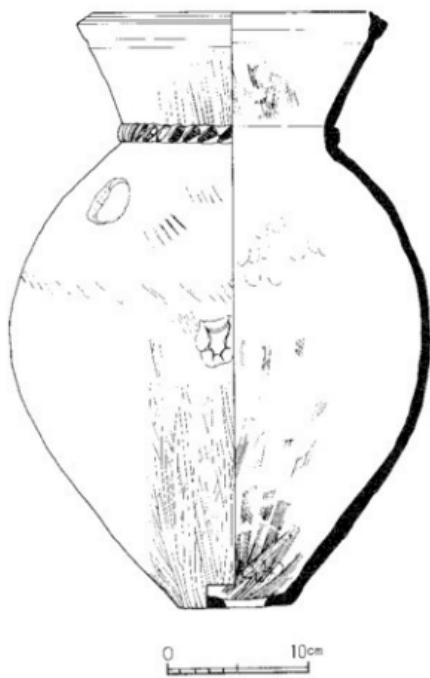


fig. 6 ST03出土小器実測図

fig. 7 調査地全景
(南から)

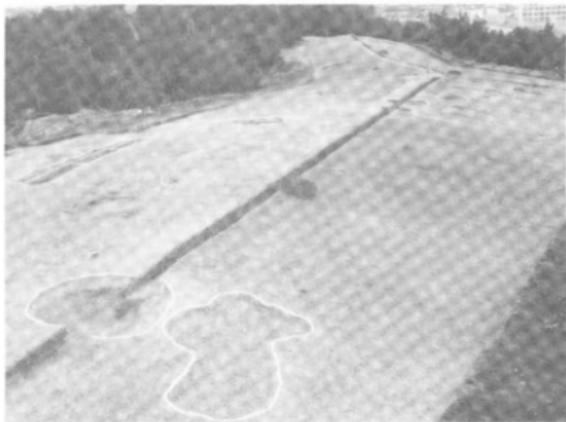


fig. 8 ST 01 (東から)



fig. 9 ST 03 (北から)

3. まとめ 今回の調査によって当地点は、弥生時代中期後半の小規模な墓址群であることが確認された。

現在のところ、この墓址群に対応する集落址は見当らない。可能性としては、北方約1.5kmの丘陵上に存在する高地性集落(第50~52地点)、若しくは西方の明石川流域の大畠遺跡が対応する集落として考えられる。



fig. 10 ST 03遺物出土状況

西神第62B地点遺跡

1. 調査経過 皆野谷川の河川改修に伴い、昭和57年度発掘調査を実施したB地区の東側側道部分約350m²を対象として発掘調査を実施した。

2. 調査概要 6世紀前半の竪穴式住居址1棟（SB10）、掘立柱建物2棟（SB07・SB08）、溝（SD01）と、11世紀～12世紀の掘立柱建物（SB09）、焼土壙（SX01）、ピット群を検出した。

SB07 東西1間×南北3間の掘立柱建物である。柱間距離は、東西1.6m、南北1.9mで、柱掘形は、1辺約0.5mの不整形方形である。柱底は、直径約0.2mであった。南辺の柱間隔から考えて、東側にもう1間伸びる可能性はない。

SB08 前回の調査で、西辺の柱列が確認されており、東西2間×南北3間の掘立柱建物であることがわかった。柱間距離は、東西1.6m、南北1.8～2.0mで南側の1間については短くなっている。柱掘形は、1辺約0.5mの不整形方形で、柱底は直徑約0.2mであった。

SB09 東西2間、南北2間の掘立柱建物で、柱間距離は双方ともに2.1mを測る。柱穴は径約0.2mの不整円形を呈する。東西両側に伸びる可能性がある。柱穴の出土遺物から建物は12世紀ごろのものと思われる。

SB10 6世紀前半に属する竪穴式住居址である。調査区域内では、約1/2弱を検出しあが、その大半が調査区域外に広がっており、全体の規模を知ることはできなかった。

調査区域内の状況から推測すると、1辺約6.0mの方形で、深さ0.4mの住居址であったと考えられる。南辺に入口と推定されるスロープがとりついている。床面から上師器甕2個体と炭化木（直徑約0.1m、長さ0.4m）、焼土面が検出された。埋土上層から6世紀前半の須恵器1個体を検出した。

SD01 前回の調査で確認された溝の続きである。埋土から6世紀中ごろの須恵器环身の完形品1点が出土している。幅約1.4m、深さ0.4mを測る。

ピット群 SB07の南側でピット群が検出された。いずれも浅く、遺物も殆んど含まれていない。SB08からSB10の間にも多数のピットが検出された。いずれも浅く、遺物も殆んど含まれていない。

埋土から出土する遺物から推定すると、その大半が11世紀～13世紀に属している。

SX01 その一部が調査地区外に広がっており、全体の規模は不明である。幅0.9m、長さ1.9m以上、深さ0.35mを測る。埋土から多量の石材と須恵器（塊・皿）、土師器（皿）が出土している。石材の中には、整形面をもつ凝灰岩の板状製品が含まれており、他には30cm大以下の河原石が多量に含まれていた。

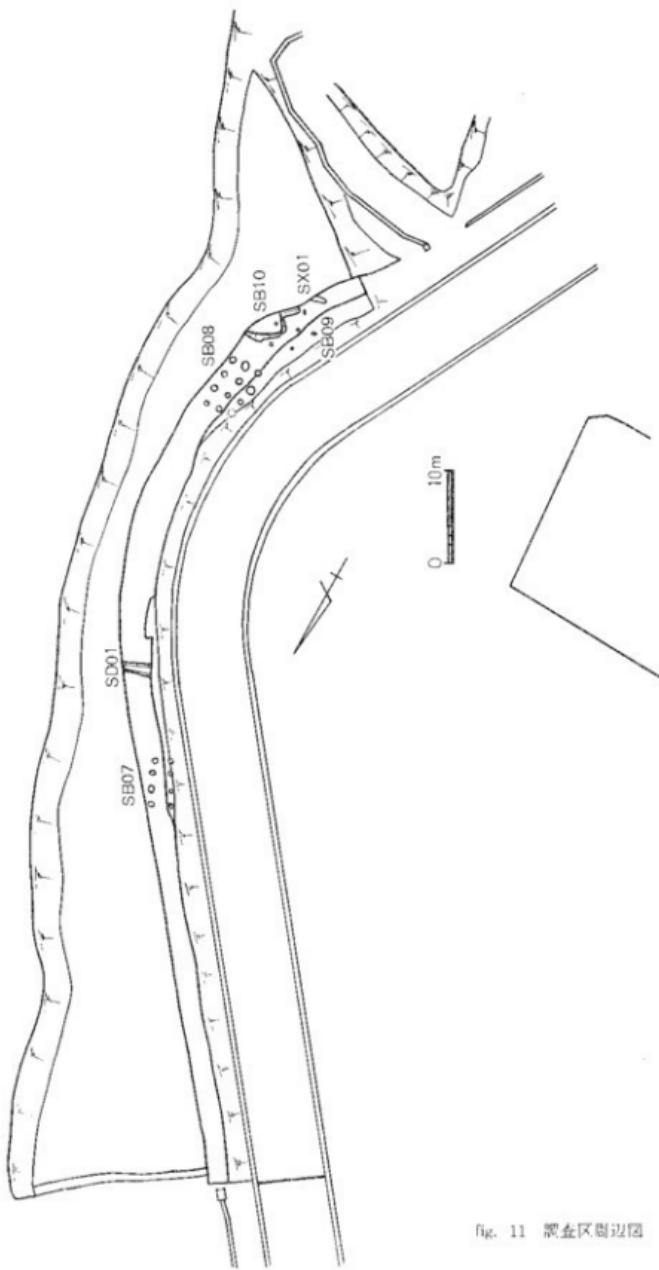


fig. 11 調査区周辺図

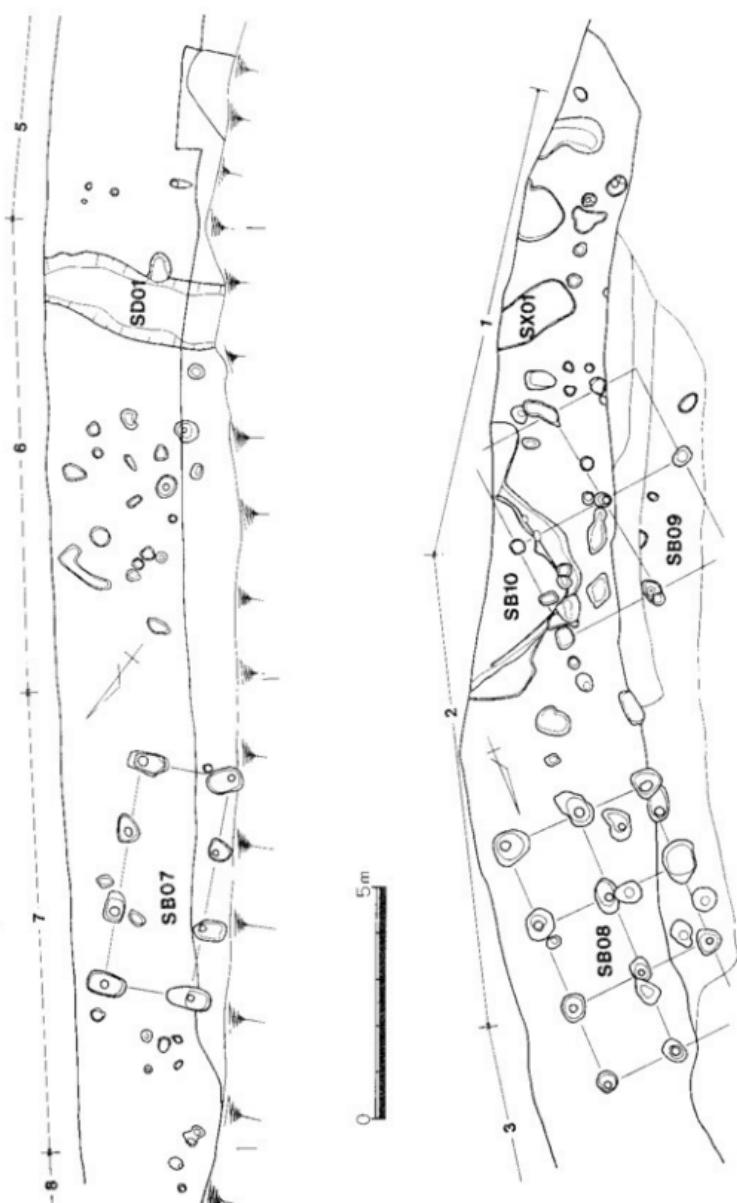
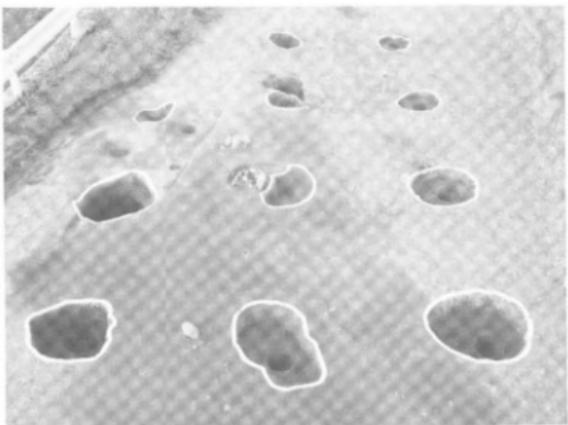


fig. 12 第62B 地点主要遺構図

fig. 13 S B08 (南から)



埋土上層には、焼土層が広がっており、壁面の一部も焼けている。石材にも焼けているものがあり、この遺構において火をたいたことは明確であるが、その目的については不明である。出土遺物から時期は12世紀に属する。

3. 出土遺物 古墳時代に属する遺物の中では、S B10壇土上層出土の須恵器环身が6世紀前半（第1四半期）に属し、S D01出土須恵器环身が6世紀中ごろ（第3四半期）に属する。集落の存続期間はこの間であろう。

S B10床面出土の土師器小型甕等は、市内では同時期の土師器出土例は少ないので、良好な一括資料である。

中世に属する須恵器では、包含層及びピット内から出土したものの中に糸切り高台を突出させ、体部に沈線1条をめぐらす塊があり、11世紀（平安時代後期）に属すると推定される。現在、知り得る神出古窯址群出土例の最古型式よりも、さらに古い様相を呈している。全体に神出窯産のものよりもシャープな感がある。現在生産地の同定は困難である。

壇としては、上記の型式の他に12世紀後半に属するものも出土している。須恵器では他に、小皿、甕、片口鉢が出土している。いずれも神出窯産と思われる。

土師器では、小皿、鍋、羽釜が出土しているが、須恵器に比べてその量は少ない。少量であるが、瓦器も出土している。

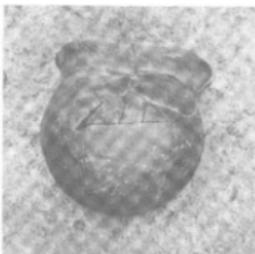


fig. 14 S B10土師器出土状況

fig. 15 S D01 (手前) と
S B07 (奥から)

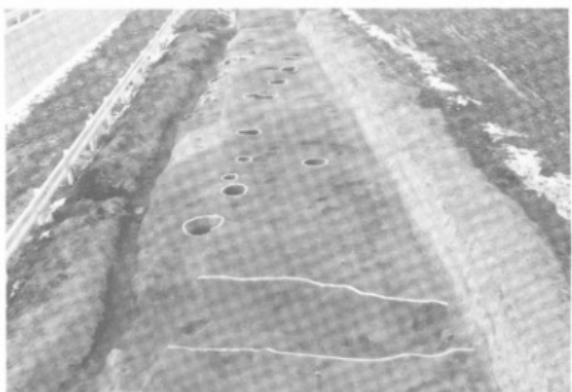
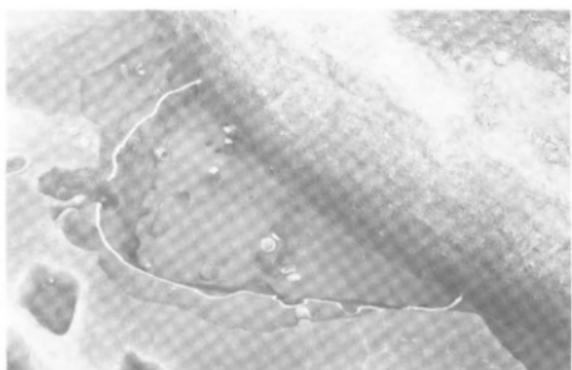


fig. 16 S B07 (南から)



fig. 17 S B10 (西から)



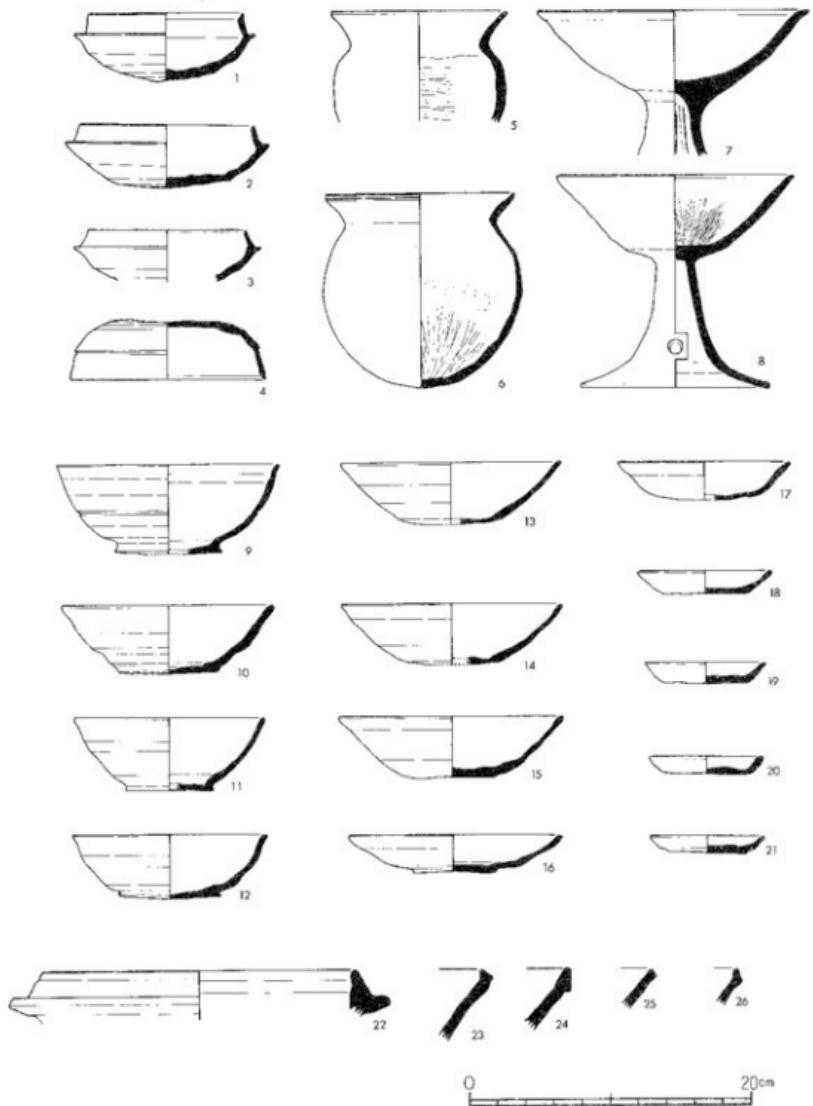


fig. 18 出土遺物実測図 (1. SB10塊土 2. SD01 5, 7. SK15 6, 8. SB10床面
9~12. 2区ピット07 13, 15. 1区ピット10 14, 20, 21, 26. SX01
17. 1区土器群 3, 4, 16, 18, 19, 22~25. 包含層)

西神第65地点遺跡

1. 調査経過 第65地点は、昭和46年度にトレンチ調査を実施している。その際に竪穴式住居址1棟及び焼土数か所が検出され、弥生時代の集落址として確認された。調査主体であった西神ニュータウン発掘調査団及び教育委員会は保存を要望し、開発局は緑地として保存することを決定した。しかし、計画上いくつかの尾根は削平せざるを得ない結果となり、未調査であった尾根に対して試掘調査を実施して集落の範囲を確定することになった。

一方57年度末には、第65地点に続く北東部の尾根(第65-1地点)の土取りの伐採が行われ、古墳状隆起と焼土が確認された。開発局の強い要望により、急遽試掘調査を実施したが、古墳は認められず、焼土の時期、意味も不明であり、焼土についての再調査を実施することにした。

2. 立地 第65地点が所在する丘陵からは、南には櫛谷川流域及び明石平野を経て明石海峡と淡路島が一望できる。西側には、雄岡山、雌岡山と丹生山系が続き、東側遠くには鉢伏山、高取山などの六甲山系を望むことができる。丘陵頂部の標高は106mを測る。

丘陵の表層附近は、黄色粘土層で覆われ、下部は第4紀の礫層で形成されている。この間に大阪層群が含まれている。

3. 調査概要 第65-1地点

調査前すでに集木作業により一部削平を受けていた。この削平部に焼土が露出する地点があり、この部分を中心に調査を実施した。焼土1及び2は遺物は出土せず、その時期を明確にしえなかった。しかし、他のトレンチにおいて極くわずかに出土する弥生土器から、第65地点に集落を営む集団の生活圏に含まれていたことが推定され、焼土については、これらの人間が何らかの目的で火をたいた痕跡と考えられる。

第65地点

A地区 遺物の出土は少なく、住居址等の直接的な生活址の検出もまばらであった。西側斜面の中腹に大きく火をうけた部分が認められたが灰層は存在せず、一次的な被火によるものと思われる。

B地区 尾根筋の中腹附近で炭化物を含む長方形のプランを検出した。埋葬施設の可能性がある。同じくやや下った所で隅円方形と思われるプランが検出され、その上面から上器片と石鎚を含む多数のサヌカイト片が出土した(10トレンチ)。

南側斜面では、少なくとも2棟の住居址が検出された。このS B05より出土する上器は、他地区から出土する土器よりも古相を呈し、弥生時代第Ⅳ様式にさかのばる可能性がある。

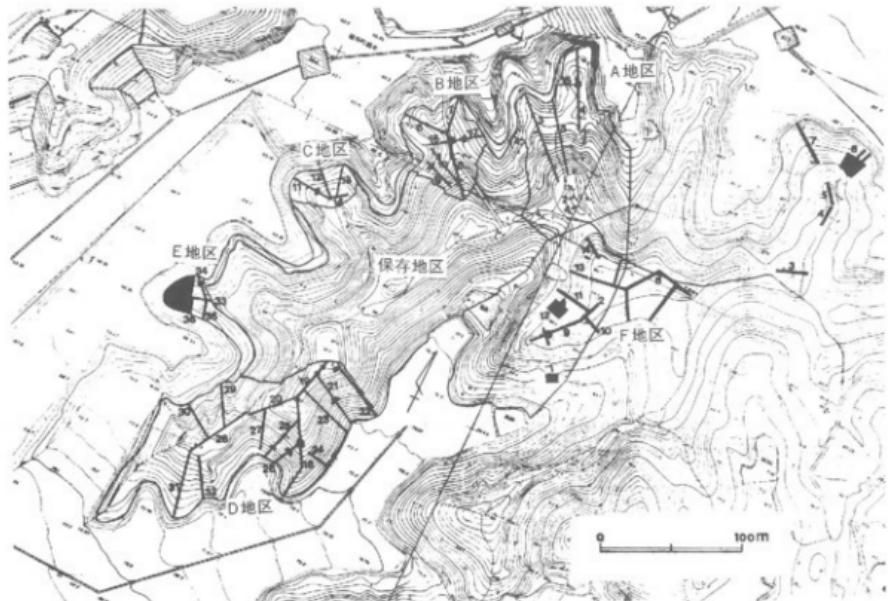
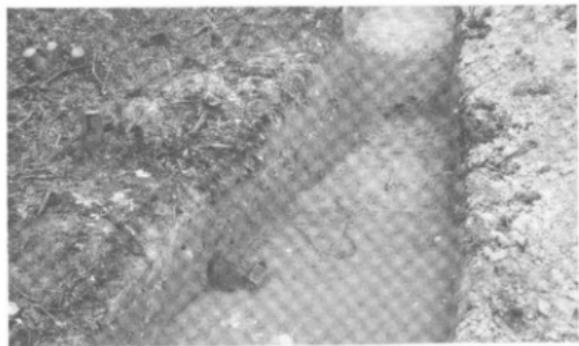


fig. 19 トレンチ設定図 住居址検出位置図

fig. 20 A地区、B地区遠景



fig. 21 B地区第10トレンチ
住居址



- C地区 尾根頂部に炭化物を含む浅い焼土壙が検出され、両斜面からも土器が出土している。尾根筋で住居址1棟のプランを検出した。
- D地区 尾根頂部に2棟、東斜面に2棟の住居址を検出した。A～F地区の中でもっとも遺物の出土量が多かった。そのほとんどは弥生時代第IV様式に属するものである。眺望もよく、斜面全体に遺物が出土しており、かなりの棟数の住居址の存在が予想できる。
- E地区 尾根の先端部は余り遺物も出土せず、遺構も存在しなかった。すでに先端部は面的調査を終了し、工事により削平されている。尾根基部北側斜面で住居址1棟を検出している。時期は弥生時代第IV様式に属する。
- F地区 最も標高の高い地区である。頂部では、遺物、遺構は検出されなかった。西側斜面では焼土壙を検出した。これにも焼土、灰層は伴わない。南へ伸びる尾根筋に直径約3mの小竪穴式住居址1棟を検出した。上器の出土はみられないが、サヌカイト片多数が出土している。

4. まとめ 今回の範囲確認調査によって、合計16棟の竪穴式住居址を検出した。集落としては、広範囲に散在していたようであり、各尾根において、住居址が検出されている。すでに消滅した尾根にも住居址が存在していた可能性がある。その大半が、斜面に築かれていたため、埋没に際して徐々に床面の盛土が流失しており、現在確認できるのは、構築当時の床面積の3/4～3/5程度である。時期は、弥生時代中期（第III様式～第IV様式）に属している。

当遺跡は、弥生時代中期から後期にかけて、西日本一帯で発生する高地性集落の1つとして位置付けられる。西神ニュータウンにおいては、同様の性格をもつ地点として、第50～52地点及び第89地点等があげられる。この両地点は、明石川流域に面して展開しており、第65地点は唯・櫛谷川流域に面している高地性集落である。しかし、櫛谷川流域では、現段階では、第65地点に前後する集落址は、まだ知られておらず、果して第65地点で生活を営んだ人々がどこから来て、どこへ移動していくのか。また、生産基盤は何であったのかが、今後の課題であろう。



fig. 22 B地区出土弥生土器実測図

2. 七曲り6号墳

1. 調査経過 七曲り古墳群は6基以上の古墳群として周知されていた。昭和59年3月、6号墳の土地所有者が畠地に開墾するため造成を行ない、須恵器、鉄刀などが出土した。そのため工事を中止し、応急の発掘調査を実施した。

2. 立地・環境 七曲り古墳群は、明石川中流域の右岸に位置し、これまでに6基以上の古墳が確認されていたが、すでにその大半が記録されることなく消滅している。なお当古墳群の北東に接して6世紀中頃の七曲り古窯址がある。

3. 調査概要 すでに墳丘の東半は削平されており、墳丘規模の確定はできないが、残存部 墳丘 から推定して直径約10m、高さ1.5m以上の円墳と考えられる。墳丘の南側と北側の一部で葺石状の円礫群がみられる。西側の一部は自然崩壊している。

埋葬施設 埋葬施設3基を検出した。いずれも木棺直葬である。第1主体部は掘形残存長0.9m、幅1.35mで、木棺部は長さ0.6m、幅0.8m残存しているにすぎない。棺底から鉄刀1、刀子1が出土している。第2主体部は、掘形残存長1m、幅1.4mで木棺部は長さ0.3m、幅0.5mのみを確認した。棺底から鉄刀1が出土している。

第3主体部は、掘形全長1.9m、幅1.3m、木棺部は長さ1.3m、幅0.47mを測る。棺内からの遺物の出土はない。

各主体部の時間的前後関係については、第2主体部と第3主体部の切り合い関係から第2主体部が先行することが確認された。

遺物 出土遺物は、棺内から出土した鉄器の他、工事によって原位置を保たず発見されたものに須恵器の環身1、若干の須恵器片、及び鉄刀（3口以上）、鐵鎌、

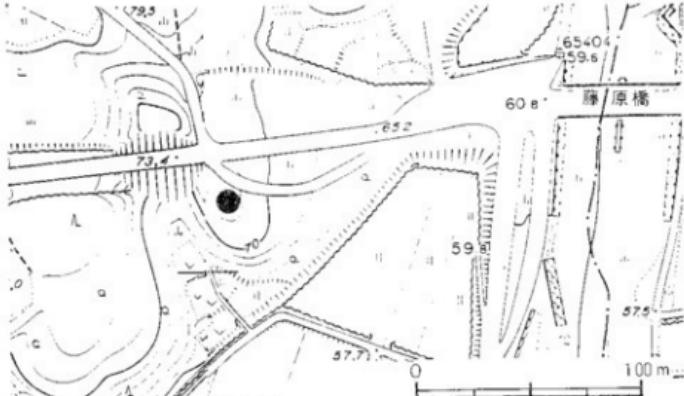


fig. 23 位図

施がある。

4. 小 緒 当古墳の築造時期は、採集された須恵器からほぼ6世紀前半と考えられる。墳丘の大半が削り取られるという不幸な事態後の調査であったため、複数埋葬を確認したもの、本米何体埋葬されていたかはもはや明らかにしえない。しかし少なくとも今回の調査によって、同古墳群が対岸の西神ニュータウン内の多くの古墳とほぼ同時期に築造されていたことが判明した。明石川流域の古墳文化を考える上で貴重な資料が加わったと言える。

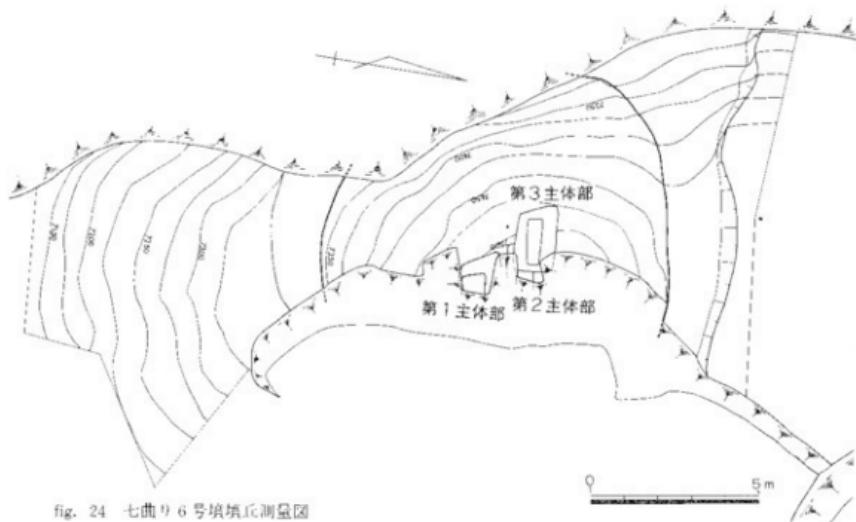


fig. 24 七曲り6号墳填丘測量図

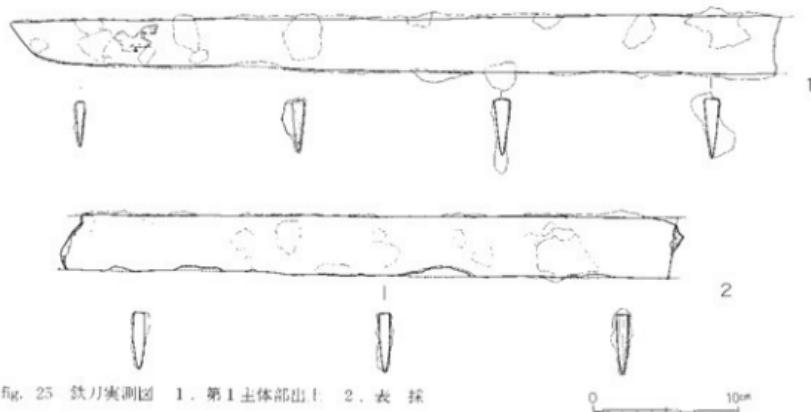


fig. 25 鉄刀実測図 1. 第1主体部出土 2. 表 採

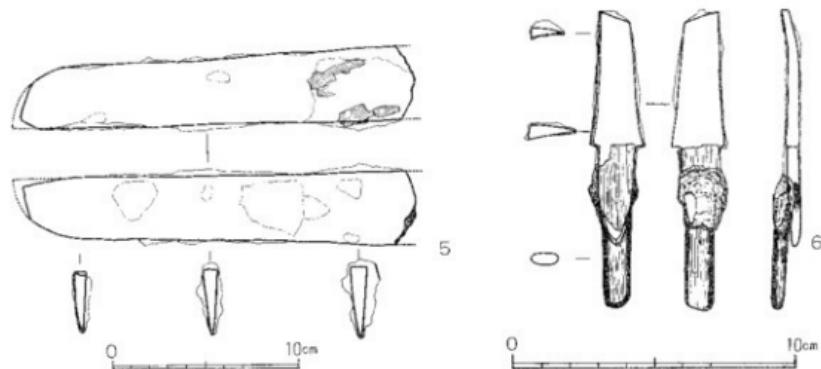
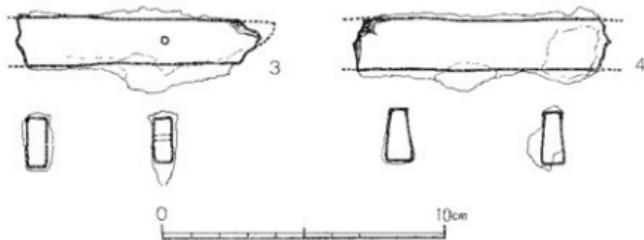


fig. 26 出土遺物実測図 (3~5. 鉄刀、6. 刀子、7. 錐、8~36. 鉄鎌、他 6. 第1主体部出土
4. 第2主体部出土、他は採集) 縮尺 5. 3% 他は 1%

fig. 27 七曲り 6号墳全景
(北から)



fig. 28 第1主体鉄刀出土
状況 (東から)



fig. 29 第3主体 (東から)



3. 芝崎遺跡

1. 調査契機 本調査は、国道175号線の拡幅により生じた個人住宅の建替に伴う発掘調査である。開発事前協議の申請に対して重機による試掘調査を実施したところ、鎌倉時代の遺物と柱穴が若干検出されたので、全面調査を実施した。

2. 調査概要

層序 現耕土直下の灰色砂質系の旧耕土が部分的に残存し、この旧耕土のみられない部分では、暗灰褐色泥砂の古墳時代後期（6世紀前半）から鎌倉時代までの各時期の遺物を含む包含層（厚さ最大0.05m）が確認された。この直下が遺構面となる黄色粘質土で各時期の遺構検出面である。これより下層には遺構は存在しない。黄色粘質土は厚さ0.05~0.2mで西へいくほど厚くなる。その下層には

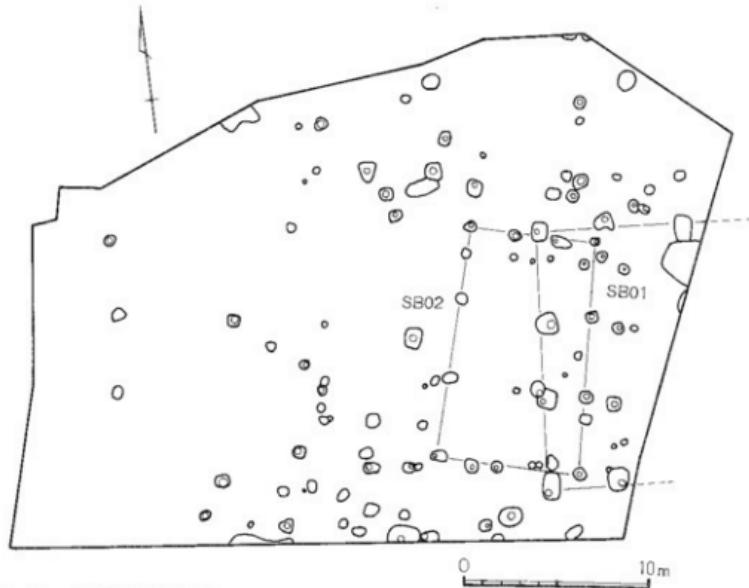
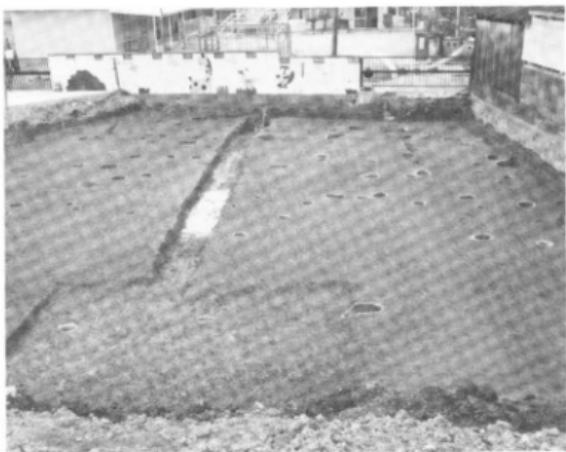


fig. 30 芝崎遺跡遺構平面図

fig. 31 芝崎遺跡全景
(西から)



黄色混疊層（段丘疊層）がみられる。

検出遺構 ピット約80個が検出された。その大半は柱痕が確認されているので柱穴とみられる。柱穴は埋土から出土する遺物からみて6世紀前半のものと、10~13世紀頃のものに分けられる。他には浅い土壙が2か所検出された。

掘立柱建物 掘立柱建物は、2棟検出された。S B01は調査区域外に伸びており、南北3間6.9m、柱間2.0~2.5m、東西規模は不明で、6世紀前半に属するとと思われる。S B02は南北3間（柱間1.3~2.1m）、東西2間（柱間1.8~2.2m）の規模で、平安~鎌倉時代に属する。

S B01、02以外の柱穴にも、石による根固めを施したものがあり、なんらかの構造物が想定できる。

3. 出土遺物 包含層の残存が悪いため出土遺物の量は少ない。

須恵器 6世紀の第2四半紀に属する一群が旧耕土、包含層、ピット埋土から出土している。いずれも坏蓋・身の小片である。

この他、平安時代に属する輪高台の付く坏や鎌倉時代前半に属すると推定される碗・鉢が数点出土している。

土師器 ほとんどが小破片であるため、時期判定の可能なものは少ない。器種としては、小皿・坏・塊・甕もしくは鍋が確認できる。

4.まとめ 古墳時代後期及び平安時代~鎌倉時代の掘立柱建物が確認されたので、付近一帯に同時期の集落址が広がっているものと考えられる。

一方、付近の字名（北垣内・前垣内）から相当規模の集落址が、明石川を望むこの台地上に営まれていたと推定される。

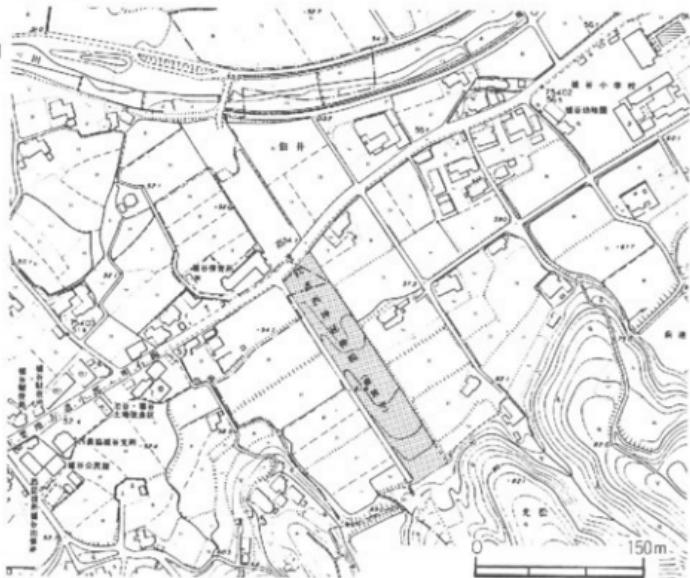
せいじんちゅうおうせん は せ
4. 西神中央線長谷遺跡

1. 位 置 檵谷町は明石川の支流檜谷川の両側に展開する集落より成り、長谷遺跡のある池谷地区はその中流域に位置する。

檜谷は地形的には、高塚山断層から南西にのびる大阪層群の低い丘陵を檜谷川が開析して形成された開析谷で、遺跡は檜谷川左岸の中位段丘上と一部沖積地上に立地している。遺跡の標高は、中位段丘上で58~61m、沖積地上で53mである。

fig. 32

調査地位置図



2. 周辺の歴 史的環境 檜谷は、明石川の本、支流域の中では、開発の手が加わったのが新しく、弥生時代中期以降である。先行する旧石器時代、縄文時代の遺跡は、いまだ知られていない。

弥生時代の遺跡は、檜谷川下流域を中心にして存在している。檜谷川左岸には、九州型石戈を出土した檜谷町松本の青谷遺跡（中期）や松本遺跡、同町谷口の如意寺裏山遺跡（中期）などがある。また右岸には、同町松本の若宮神社北遺跡（中期・後期）、同町音野の西神ニュータウン第62地点A遺跡（中期）などが知られている。中位段丘上に立地する西神ニュータウン第62地点A遺跡と若宮神社北遺跡を除き、他はすべて丘陵上に立地しているのが特徴である。

古墳時代前期、中期の遺跡は、今のところ確認されていない。これから推測すれば、櫛谷川流域の沖積地の開拓が進展するのは、古墳時代後期以降である。古墳時代の遺跡も櫛谷川下流域に集中している。左岸では、川崎重工裏山の九尾谷古墳があり、また右岸では、若宮神社裏山古墳群、塚本古墳群（6世紀中ごろ）、江戸時代の貞享2年（1685年）に家形石棺を出土した菅野古墳などの古墳と、6世紀の集落址西神第62地点A・B遺跡などが知られている。櫛谷川の中流域は下流域に比べ、遺跡の形成はやや遅れる。左岸では、池谷古墳群（6世紀後半）、銅鏡を出土したと伝えられる光松古墳、右岸では長谷古墳や6世紀末の集落址池谷遺跡が存在している。この中流域の古墳は、すべて埴輪をめぐらしていたと伝えられている。

櫛谷地域では式内社や古代莊園の分布が知られていない。それを裏付けるように、当地域での奈良時代、平安時代に属する遺跡は不明である。鎌倉時代に如意寺が創建されてから、再び櫛谷川流域での遺跡数も増加する。

鎌倉時代の集落址は、櫛谷川右岸では菅野の西神第62A、B地点遺跡や、福谷の池谷遺跡などがあり、左岸では、從来火葬墓址と考えられてきた土壙が発見された池谷の櫛谷中学校内遺跡、同池谷遺跡、同長谷遺跡などが存在している。

室町時代以降、文献にも櫛谷という地名があらわれ（「藤涼軒日録」1478年）櫛谷川流域が一地域としてまとめて考えられるようになった。室町時代後期には、寺谷に衣笠氏の居城、端谷城が築城される。端谷城址は現在も完全な形で保存されており、室町時代の山城としては貴重な存在である。

江戸時代の元和3年（1617年）に明石藩が新設され、櫛谷地域は明石藩領に編入される。享保年間（18世紀初め）作成と伝えられる「金波斜陽」には、松本、菅野、谷口、柄木、長谷、池谷、福谷、友清、寺谷の各村の石高、村内地誌が記されており、現在の櫛谷町の各集落の基礎が、すでにこのころには成立していたことを示している。

3. 調査経過 神戸市須磨区名谷と西神ニュータウンを結ぶ地下鉄延伸線と軌道敷の両側に敷設される道路、西神中央線は櫛谷町池谷地区を通過する計画が立てられている。池谷地区は、昭和54年度から圃場整備事業が着手され、これに伴う発掘調査を実施してきた。中央線予定地の東100mのところで鎌倉時代の土壙、溝、ピットなどが検出されている。

したがって、中央線建設予定地内にも遺跡の存在が予想されたため、昭和57年1月、路線内に11か所の試掘場を設定して調査した。その結果、鎌倉時代の土壙や遺物包含層が発見された。それをうけて昭和57年度に第1次調査を実施した。

第1次調査では、県道小部・明石線を境に北側をA地区、南側をB地区として、予定地の両側にトレンチを設定した。A地区には5m×180mのトレンチを2本、B地区には5m×50mのトレンチ2本を設定して調査した結果、平安時代末～鎌倉時代と考えられる炭の詰まった土壙5基、不整形土壙、溝などが検出された。

昭和58年度の第2次調査では、第1次調査の結果を踏まえ、B地区の未調査部分の調査を実施した。

4. 調査方法 中央線の路線幅30mのうち、昨年度に調査した部分を除外して、幅20m、長さ180mが今年度の調査対象範囲である。昨年度の調査地と一部重複するようトレンチを設定したため、幅25mとなった。調査対象面積は、4500m²である。南から10mごとにA～Sのグリッドに分け、東側を1区、西側を2区とし、それぞれA-1区、A-2区のような形で出土遺物をとりあげた。

中軸線の方位は、N27°Eである。調査は、土砂搬出の関係で、南の丘陵側から開始した。

5. 調査概要

基本層序 調査対象区は、もと水田として利用されていたため、基本層序は、耕作土、床上、遺物包含層、地山となっている。耕作土から地山までは、0.6～0.8mの厚さであるが、地形が傾斜している関係で水田の北側畦付近は、厚さが1mに及ぶこともある。地山は、調査区南端が洪積丘陵であり、それから北は比較的平坦な中位段丘面が続き、調査区南端より150m北で3mの比高で沖積層に変わる。今回検出された大半の遺構は、この中位段丘面上に形成されている。遺物包含層は、I淡黄褐色砂土、II暗灰色砂泥であるが、調査区で普遍的にみられるのは、暗灰色砂泥である。・

検出遺構 今回の第2次調査で検出された遺構は、掘立柱建物1棟、短辺に突出部のある炭の詰まった土壙7基、その他土壙27基、溝14条、井戸3基、ピット133である。

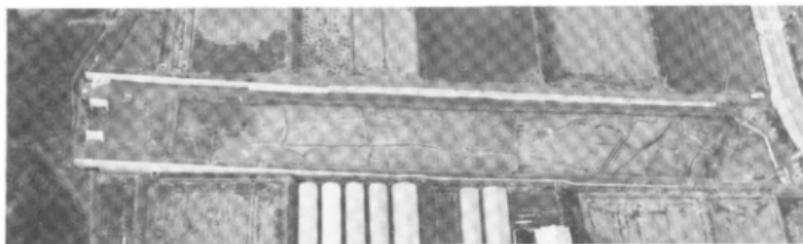


fig. 33 調査区全景

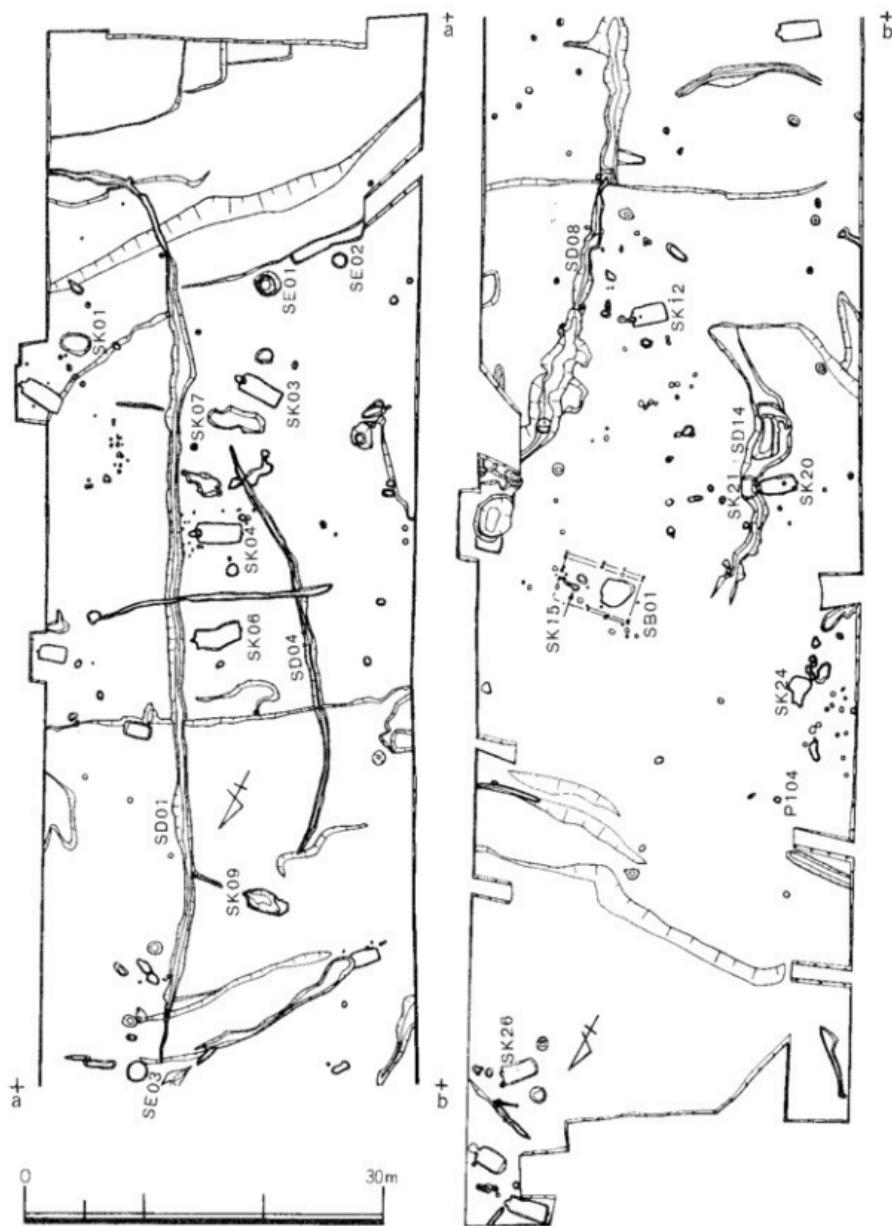


fig. 34 調査地全体図 (a, b で左右の図は接続)

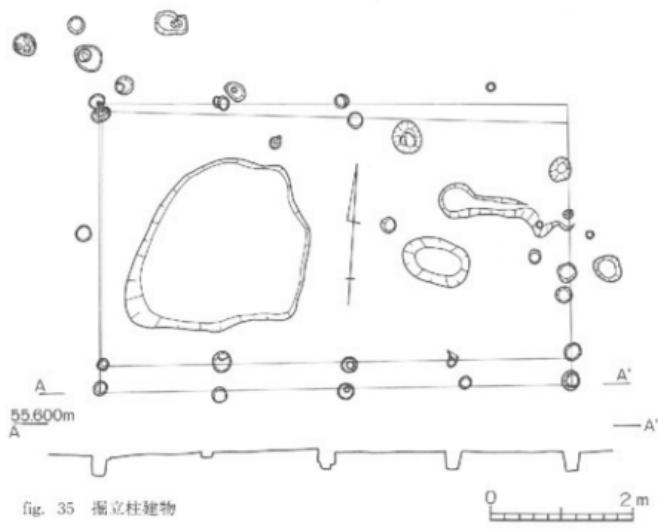


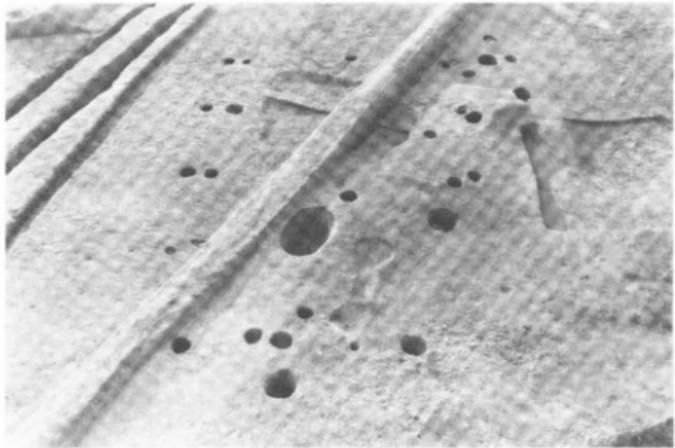
fig. 35 掘立柱建物

0 2m

A. 掘立柱建物 (SB01)

調査区の北寄りの中位段丘が沖積地へ傾斜する地点で検出された1間(3.6m)×4間(6.6m)の東西棟である。柱間寸法は、桁行 1.6 m 等間、梁行 3.6 m である。この建物は1度建て替えられている。この建物と切り合って礎石をもつ柱穴が3間分確認されている。さらに別の建物が存在していたと思われるが、規模は不明である。

fig. 36 SB01
(東から)



B. 短辺に突出部のある炭の詰まった土壙

長辺約4m、短辺約1.5mの長方形の土壙で、短辺の一辺、若しくは両辺に突出部をもち、中に炭を多量に含むのが特徴である。突出部の一方は焚口、他方は煙出しと考えられる。焚口にはピットをもつものもみられる。土壙の底や壁面は赤く焼けている。殆どものが主軸を東西にとる。

これらの土壙は、調査区の南寄り、中程、北寄りの3グループに分かれて存在し、合計7基検出されている。

土壙は、突出部の形状によって、以下の4タイプに分類できる。

- A I 短辺の両辺に突出部をもち、焚口ピットをもつもの（SK04）
- A II 短辺の両辺に突出部をもち、焚口ピットをもたないもの（SK06、SK20）
- B I 短辺の一辺に突出部をもち、焚口ピットをもつもの（SK03、SK12）
- B II 短辺の一辺に突出部をもち、焚口ピットをもたないもの（SK26）

なお、この他に、やや性格を異にする土壙が1基検出された（SK09）。形状は、橢円形を呈し、突出部をもつが、土壙底は深く落ち込み、中に水窪したような精良な粘土を貼っている。中から炭化材と砾が数点、須恵器塊が出土している。

C. その他の土壙

不整形土壙は短辺に突出部をもつ土壙の付近に存在する土壙で、規模は長辺4~5m、短辺1~2mのものから、径1.5mの円形のものなど様々である。中に炭層を含むという特徴があり、この炭層は短辺に突出部をもつ土壙からかき出したものと思われる。この関係はSK21において明瞭に看取できる。調査区の南で検出されたSK01は、径2.5m×1.5mの橢円形の土壙であるが、この土壙からは平安時代に属すと思われる遺物が出土している。

D. 溝

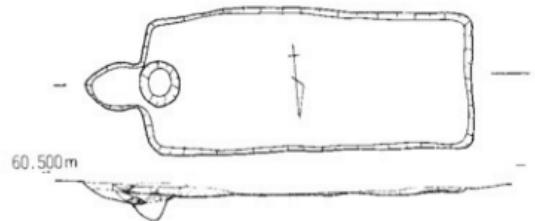
調査区を南から北へ流れる溝が基本的には古く、それを切って東から西へ流れる溝は、新しい時期のものである。

SD01は幅1m、深さ0.4mの溝で、長さ80m検出された。溝底からは、平安時代の須恵器塊が出土している。

SD04は幅0.6m、深さ0.2mの溝で、長さ約35m検出された。溝内からは、7世紀代の遺物が出土した。鎌倉時代には、この溝はすでに埋まっていたと思われる。

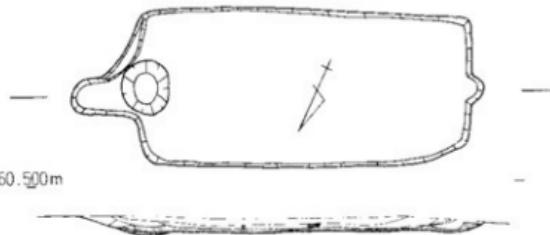
SD08は、SD01の途切れるところから始まる溝で幅1.5m、深さ0.6m、長さは41mである。溝底からは、須恵器の片口鉢、壺など12世紀後半代の遺物が出土した。

1. SK03



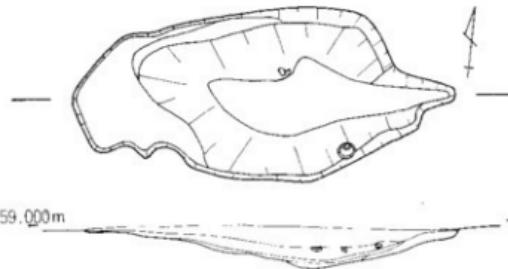
60.500m

2. SK04



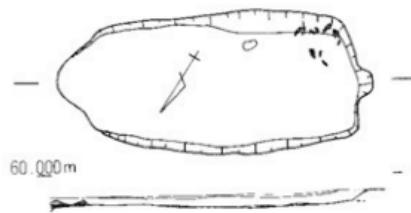
60.500m

3. SK09



59.000m

4. SK20



60.000m

0 2m

fig. 37 土壤実測図

fig. 38 S D01とS K03・04
(北から)

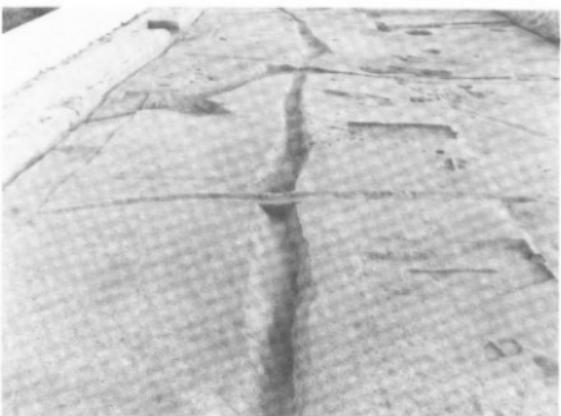


fig. 39 S K03, S K07
(北から)



fig. 40 S K20とS D14の
関係 (南から)



fig. 41 S K04検出状況
(北から)

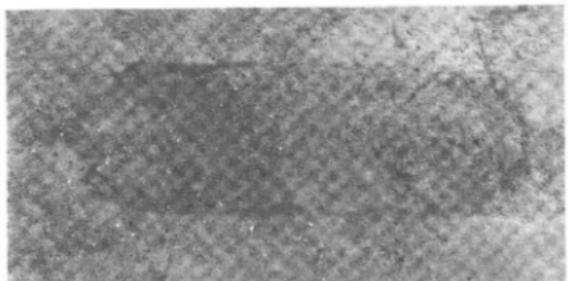


fig. 42 S K04炭化物出土
状況 (北から)

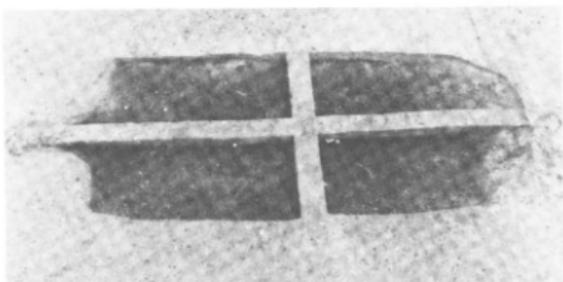


fig. 43 S K04完掘状況
(北から)

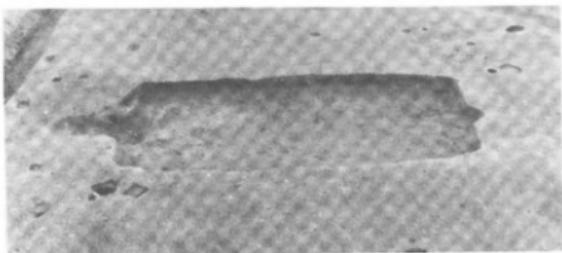
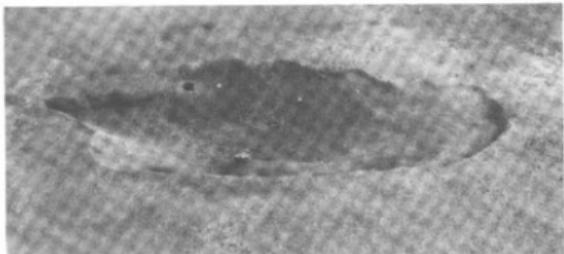


fig. 44 S K09遺物出土
状況 (北から)



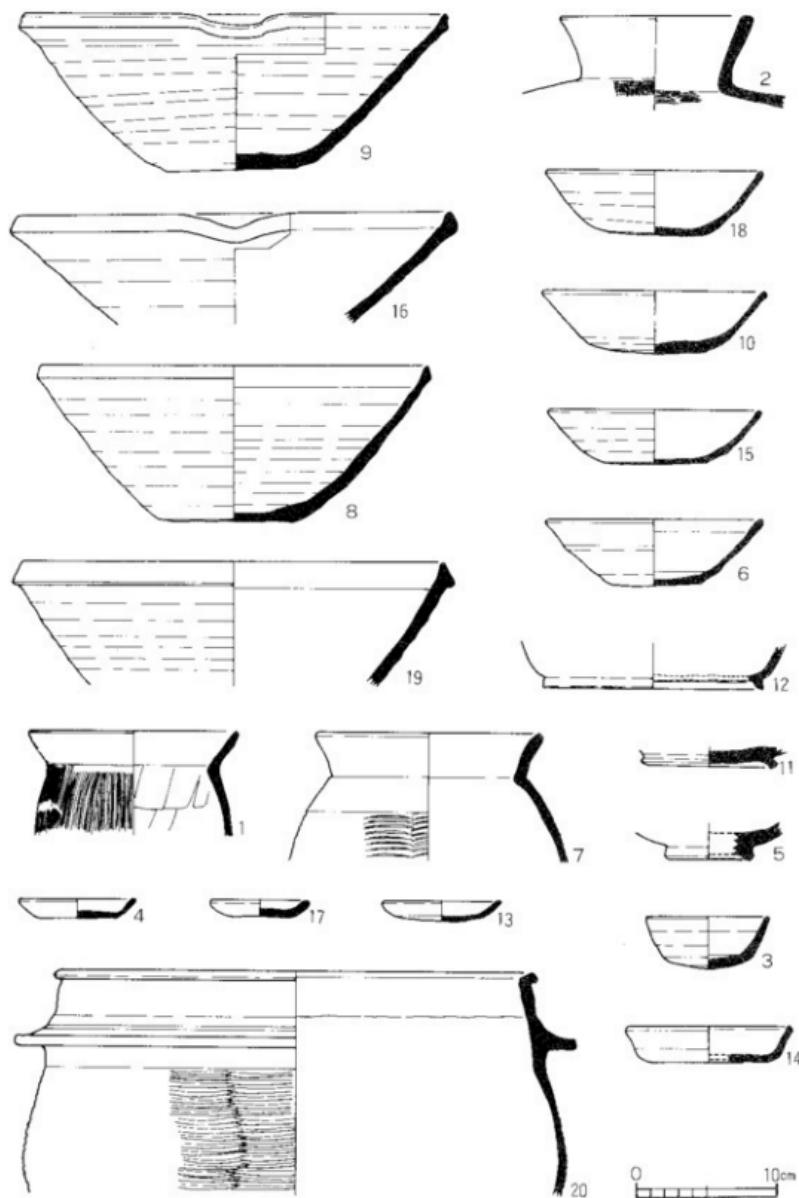


fig. 45 出土遺物実測図 (1~3, S D01 4~9, S D08 10. S K09 11.12. S K01 13~16. S K15
17.18. P104 19.20. S K24)

E. 井戸

調査区内から井戸は3基検出されている。径1.3m～2.2mの円形の素掘りの井戸である。深さは0.6m～4mと一定していない。中から漆器椀、瓦、陶器、石臼などが出土している。

6. 出土遺物 A. 包含層出土遺物

包含層からは弥生土器（中期）、石鎚、古墳時代須恵器片などが若干出土しているが、遺物の大半は12世紀後半から13世紀にかけてのものである。須恵器の片口鉢・甕・壇・小皿や土師器の羽釜・甕・小皿・壇、青磁片などが主な器種である。この他、古銭1、不明鉄製品1が出土している。

B. 造構出土遺物

S D01 溝底からは須恵器小壇・甕・土師器甕など平安時代に属する遺物が出土している。

S D08からは、須恵器の片口鉢・壇・土師器鍋・龍泉窯系青磁碗が出土している。12世紀後半に位置づけられる遺物である。

S K09からは、須恵器壺が出土している。12世紀後半の遺物である。

S K15からは、須恵器の片口鉢・壇・小皿・土師器小皿が出土している。

S K24からは、須恵器片口鉢・土師器甕・羽釜が出土している。

P104からは、須恵器壺・土師器小皿・三足鍋などが出土している。

7.まとめ A. 造構の形成過程

本遺跡からの出土遺物は若干の弥生土器や古墳時代須恵器を除けば大半が中世（12世紀後半～13世紀）のもので、遺跡の形成された時期がこの時期であることを示している。

S K01の楕円形土壙やS D01は、平安時代に属する遺物を含んでおり、本遺跡の造構群の中では、最古に位置づけられる。特にS D01は、一定幅で南北に直線的にのびる溝で、人为的に穿たれた溝と考えられる。この溝の上面には短



fig. 46 S D08遺物出土状況



fig. 47 P104遺物出土状況

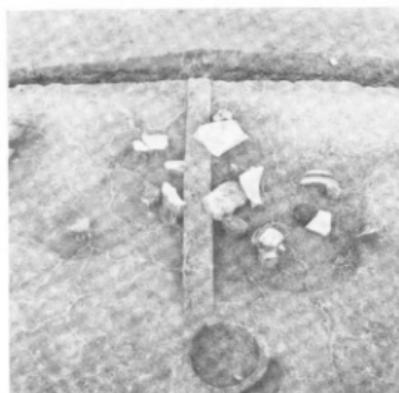


fig. 48 S K24遺物出土状況

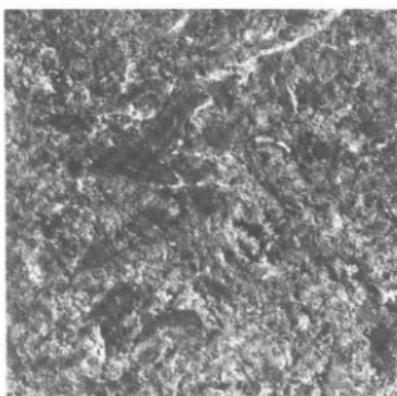


fig. 49 S K03炭化物出土状況

辺に突出部のある土壙からかきだされた炭が堆積しており、13世紀初めには、すでに溝としては機能しなくなっていたと考えられる。

S D08は、溝底から12世紀後半代の遺物が出土しており、S D01に続く時期の遺構と考えられるが、両者は接続していたと思われ同時存在の可能性がある。ただし、S D08はS D01が機能しなくなつてからも溝としての機能を保持していたと考えられる。

S D08と同時期の12世紀後半に、掘立柱建物や短辺に突出部のある土壙の大部分が形成されたと考えられる。ただし、S D01との共存関係を考えれば、短辺に突出部のある土壙のうちS K03、S K04、S K06などは、12世紀後半より時期的に遅る可能性もある。

B. 遺構の性格

本遺跡の中で最も注目すべきものは、短辺に突出部のある炭の詰まった土壙である。この土壙は、昭和54年に大門遺跡（西区伊川谷町小寺）で発見されたのを嚆矢とし、その後、池谷遺跡（西区櫛谷町池谷）、櫛谷中学校内遺跡（同）、長谷遺跡（同）、洲本市大森谷遺跡など、各地で発見され、報告があいついでいる。

遺跡名	炭の詰まった土壙数	発見年度
大門遺跡	8 基	昭和54年
池谷遺跡	2 基	54年
櫛谷中学校内遺跡	1 基	56年
長谷遺跡第1次	6 基	57年
大森谷遺跡	1 基	57年
長谷遺跡第2次	7 基	58年

この種の土壙は、大門遺跡で発見された際に、火葬骨を埋納した土壙や中世墳墓と考えられる集石遺構が近接して検出されたことから、当初、火葬墓址と考えられてきた。この見解は、昨年度の長谷遺跡の第1次調査においても、五輪塔の地輪が遺構面から出土しているということから踏襲されている。

従来、中世火葬墓といわれてきたものを検討すると、確實に火葬骨や副葬品を伴っている。座棺と考えられる竜野市福田片岡遺跡、神戸市北神第47地点遺跡、高槻市岡本山遺跡では径1~1.5mの墓壙中に火葬骨、副葬品のほか棺台と思われる石を有するものもみられる。一方寝棺と考えられる長岡京市长岡京遺跡の墓壙は長辺1.8m、短辺0.5mで、やはり中に火葬骨や副葬品を伴っている。これらの中世火葬墓と比較すると、本遺跡の短辺に突出部のある土壙は、長さが4m程度に格段に大きく、中に炭のみが詰まっているというのが特徴である。その規模や骨片や副葬品を伴わない点で、先にみた火葬墓とは様相が異なる。

中世の火葬の風習は、武士や莊官、僧侶など社会的に上層階級のものであり、一般庶民は土葬されていたのが通例である。中世火葬墓は、本遺跡の短辺に突出部のある炭の詰まつた土壙のような大きさをもたないし、骨片や副葬品を伴わないということもありえない。

本遺跡の土壙の形状は、5. 調査概要で述べたようにA I・A II・B I・B IIの4類型に分けられる。これらは、基本的には東西に軸線をとり、南、中央、北の3グループに分かれながら、各々一定の間隙で散在している。Bタイプのように、煙出しと思われる突出部をもたないものもあるが、焚口と思われる突出部は、すべての土壙にみられ、一定の方向（本遺跡の場合は東）から、火入れするという特徴がある。焼成部で焼かれた製品は3m程の長さをもち、しかも床面傾斜のないことから、強い火力を要しないものと考えられる。土壙内に詰まっていた炭が製品の副産物であるのか、燃料として用いられた木材なのか、現時点では不明であるが、「天王開物」に載せるような竹を半割ないし四分割して、アーチ状にさし渡したような構造物があった可能性もある。

それではこの土壙で何を生産していたかということであるが、丘陵に近い場所で、3m程の長さのものを焼く、又は蒸すという作業が行なわれていたと考えられる。その製品が何か現時点では、明らかではないが、植物が原料であったことは間違いないと思われる。土壙から出土した炭や灰の化学分析を行う予定であるので、正式には、これらの分析結果を待って、再度検討する予定である。

かんで
5. 神出古窯址群

1. はじめに 神出町一帯は印南段丘と呼ばれる高位段丘上の東北端に位置する。付近は、離岡山とそれに連なる隆起扇状地からなり、小河川による侵蝕によって、谷が東西に入り込む。

神出地区では昭和53年度より圓場整備事業が開始されており、これに伴い事前に分布調査、試掘調査を実施している。その結果、昭和56、57年度で総計23基の窯跡を確認している。

fig. 50 調査地位置図



2. 調査概要 本調査に先立って実施した試掘調査で灰原を確認した地点について、 $11\text{m} \times 22\text{m}$ の調査区を設定した。その結果、2基の窯体を検出したが、残存状況は極めて悪く、焼成室下半、燃焼室、および焚口部を検出したのみである。

1号窯 1号窯は調査区中央で検出された。残存長2.4m、最大幅1.16m、焚口幅0.76mで、最大残存高0.2mと非常に残存状況は悪い。しかも窯体床面は、燃焼室の一部のみが残存している状況であり、窯体補修の痕跡は認められない。焚口は窯体前庭部に設けられた排水溝の底部に取り付いており、前庭部作業面より低い点が特徴である。また、排水溝は前庭部から灰原方向に伸びているが、その他に窯体両側面にも設けられており、昭和56年度に発掘調査された釜ノ口支群2、3号窯と同じ様相を示している。

2号窯 2号窯は1号窯の東側、調査区東端で検出された。残存長2.88m、最大幅1.32m、焚口幅0.52mで、最大残存高0.2mと、1号窯同様残存状況は悪い。床面は2面検出されたが、第1床面は窯体の途中で段をもっているのに対し、第2床面では段を設げず補修されている。この段は釜ノ口支群2号窯でも検出されているが、同時に排水溝も設けられていることから、燃焼室と焼成室を画する

段と考えられる。前庭部は焚口と同一面で緩やかに傾斜している。

SX01 SX01は2基の窯体の間に設けられており、 $5.1 \times 3.9\text{m}$ の方形を呈した土壇で、中から多量の須恵器と瓦が出土した。SX01には3本の溝が取り付いているが、その性格は不明である。

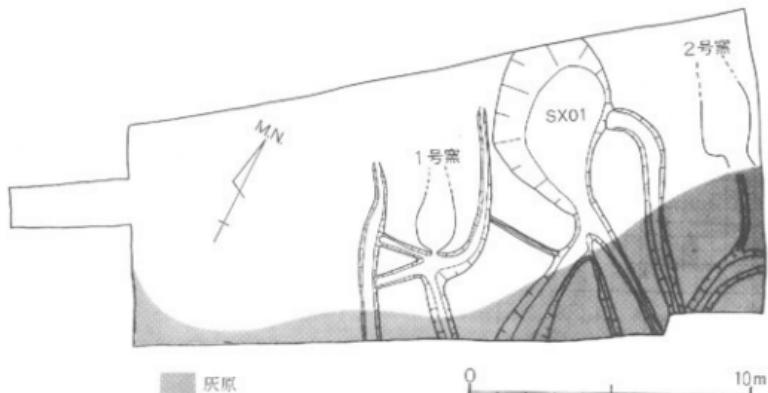


fig. 51 遺構全体図

出土遺物 出土遺物には片口鉢、塊、小皿、壺、甕および瓦がみられる。このうち、小皿、壺、甕は極めて少量で、特に甕は胴部破片が1片のみ出土しており、この2基の窯では生産されていないのではないかと考えられる。一方、片口鉢は圧倒的多数を占めている。また形態的には、口縁部の丸みが強く、上方又は下方に拡張している。口唇部は外反せず、器体下半は丸味を持っている。

塊は器高が高く底径の小さいタイプに比べ、器高が低く底径が大きい塊に系譜を持つと考えられるタイプが多くみられる。小皿は、整理が途中の現段階で図化した4点のみである。形態的には、腰部の直線的なもの、丸味をもつものと多彩である。

瓦 瓦の出土量は比較的少量で、軒先瓦は図示したものすべてである。瓦当文様も相当退化しており、瓦自体の大きさも縮小している。

操業年代 今回検出された2基は、灰原の状態、生産された中世須恵器の型式差から、あまり時間差を認めることができず、12世紀末葉から13世紀前半に操業されたと考えられる。

3.まとめ 今回検出された2基の窯は、神出古窯址群の最終型式の段階である。生産された中世須恵器で、片口鉢の占める比率が卓越している状況や、この時期の消費地遺跡から出土する片口鉢の多さから、神出古窯址群が商品としての前提のもとに片口鉢の専業生産に近い状況を読み取ることが可能である。

fig. 52 老ノ口1号窯、
2号窯全景
(南から)



fig. 53 老ノ口1号窯
(南から)



fig. 54 老ノ口2号窯
(南から)



fig. 55 老ノ口1号窓
実測図

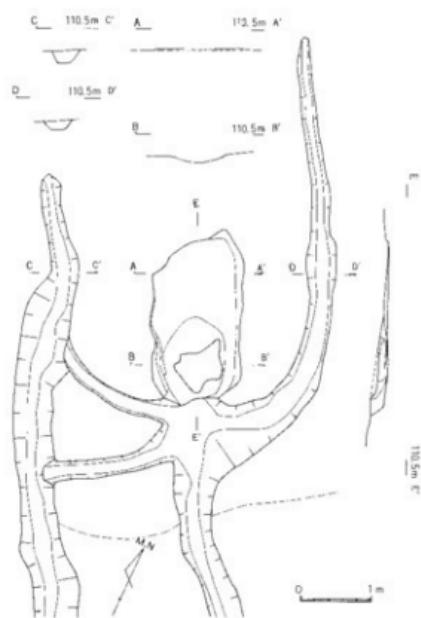
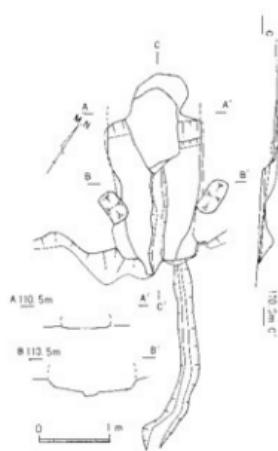


fig. 56 老ノ口2号窓
実測図



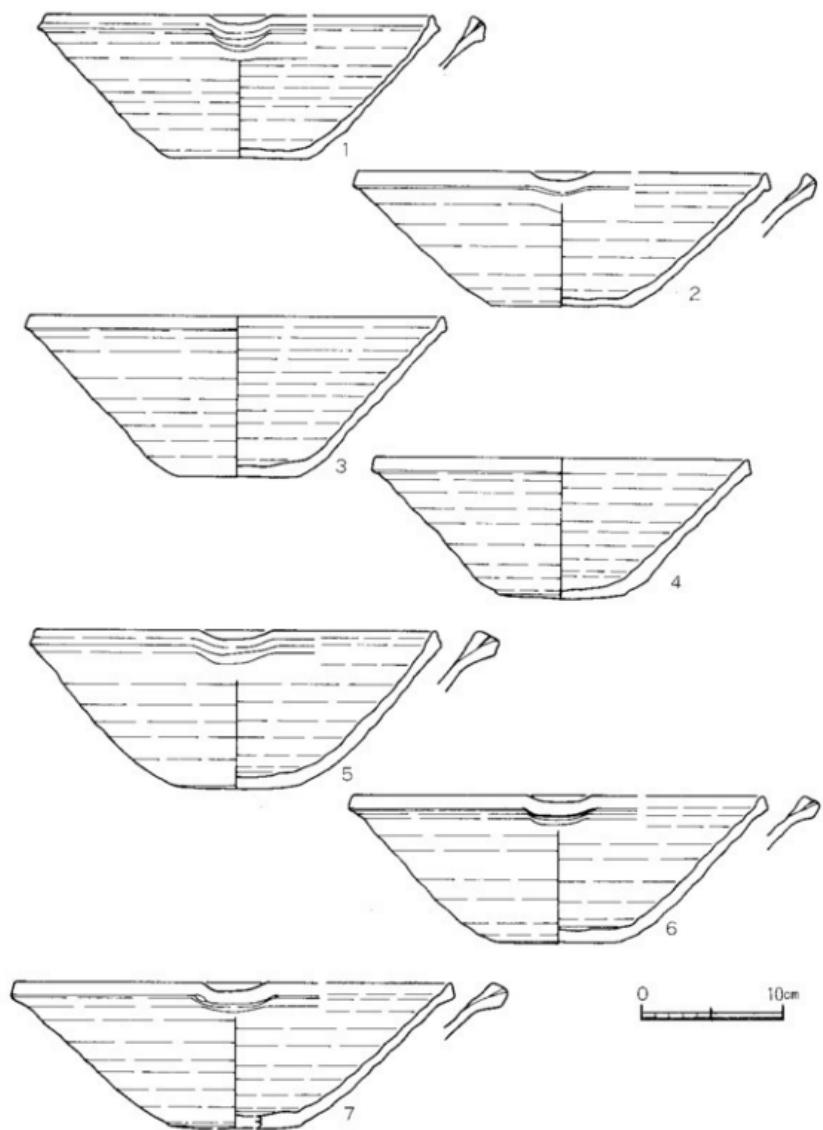


fig. 57 片口鉢実測図 (1, 2トレンチ 2~4, 1号灰原 5~7, SX01)

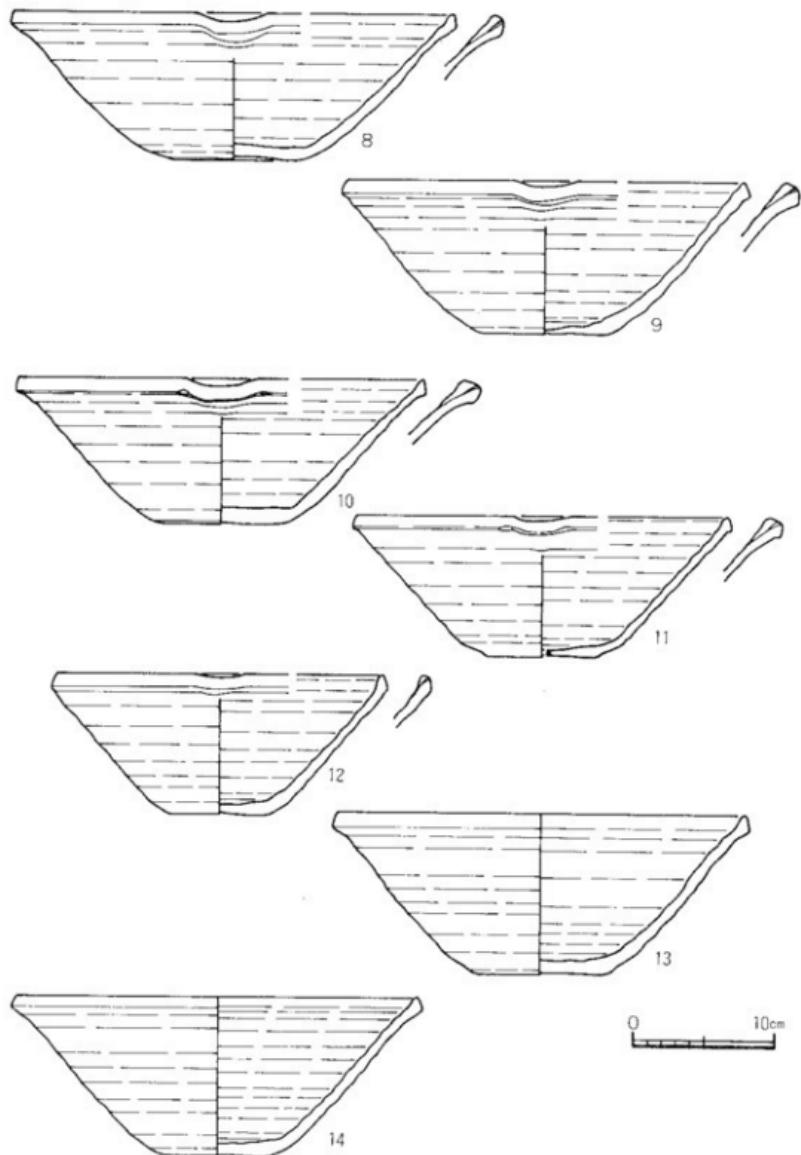


fig. 58 片口銘実測図（8～14. 2号灰原）

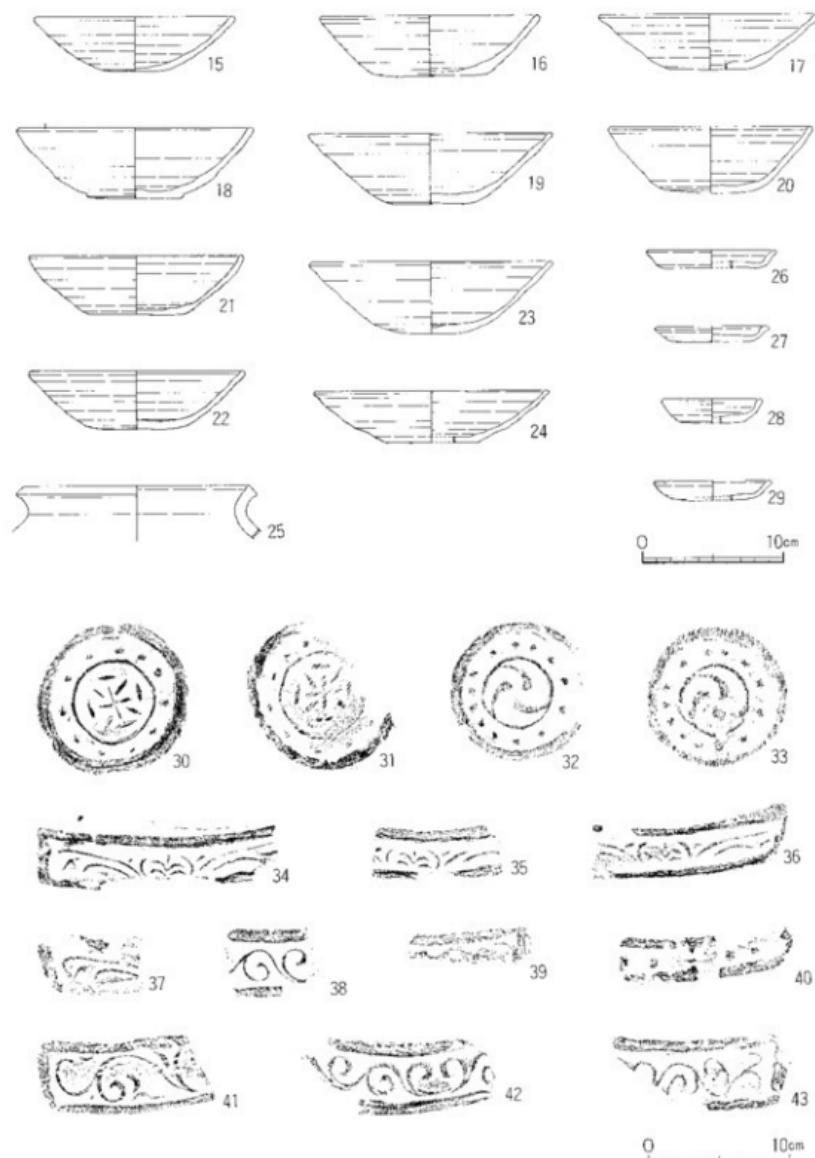


fig. 59 瓢器片、皿実測図及び拓影 (15~17, 29, S X01 18, 1号東溝 19, 23, 24, 27, 28, 2号灰原
20~22, 2号窯内 25, 1号灰原 26, 2号トレンチ)

いすみ 6. 居住遺跡

1. 調査経過 当遺跡は、第二神明道路築造時に発掘調査が実施され、弥生時代前期およびそれ以降の遺物を出土することで知られた。

今回の発掘調査は、鉄骨造の倉庫建築に伴うもので、基本的に建築物の基礎部分のみにトレンチを設定し、遺構が検出された部分のみ拡張することを前提に開始した。

2. 立地 明石川下流域東岸の標高15m前後の沖積地に立地する。付近一帯は、明石郡条里と呼称される方面地割が顕著にみられる。しかし、その成立時期についても明確でなく、当地域で検出される中世集落との関係についても不明である。

3. 調査概要 検出された遺構は、掘立柱建物5棟、柵列1、溝状遺構2、土壙2である。
S X 02以外は、すべて平安時代末期に属する。

S A 01 南北5間（10.0m）とそれに直角に西へ1間（1.35m）存在する。

S B 02 3間×2間（6.4×4.2m）の南北棟建物で総柱である。北西に1間×1間の張り出し部を有する。

S B 03、04 2間×1間以上の掘立柱建物で、東西棟であろう。

S B 05 3間×2間（6.2×4.0m）の南北棟建物で総柱である。南西に1間×1間の張り出し部を有し、南辺には縁束を持つ。

S B 06 2間×2間（4.1×4.6m）の総柱建物である。

S D 01 S X 03 S B 02に関連する遺構で、排水のためのものであろう。

S X 01 0.47×0.4mの精円形プランの土壙上部に丸瓦片、須恵器塊、礫がかかるせられたものである。

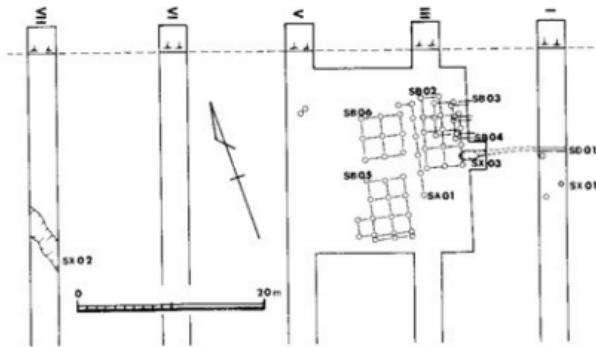


fig. 60 居住遺跡遺構図

S X02 幅1.8m、深さ0.2~0.5mの溝状の遺構で弥生土器片が出土している。出土遺物は、須恵器を中心に土師器、瓦器、輸入陶磁器、瓦などである。当地域における瓦器の出土は珍しく、また輸入陶磁器が出土遺物の1.28%を占めることなどは、この建物群の性格を考える上で重要なことであろう。なお、軒丸瓦は、神出古窯址群堂の前支群第4号窯出土のものに酷似する。

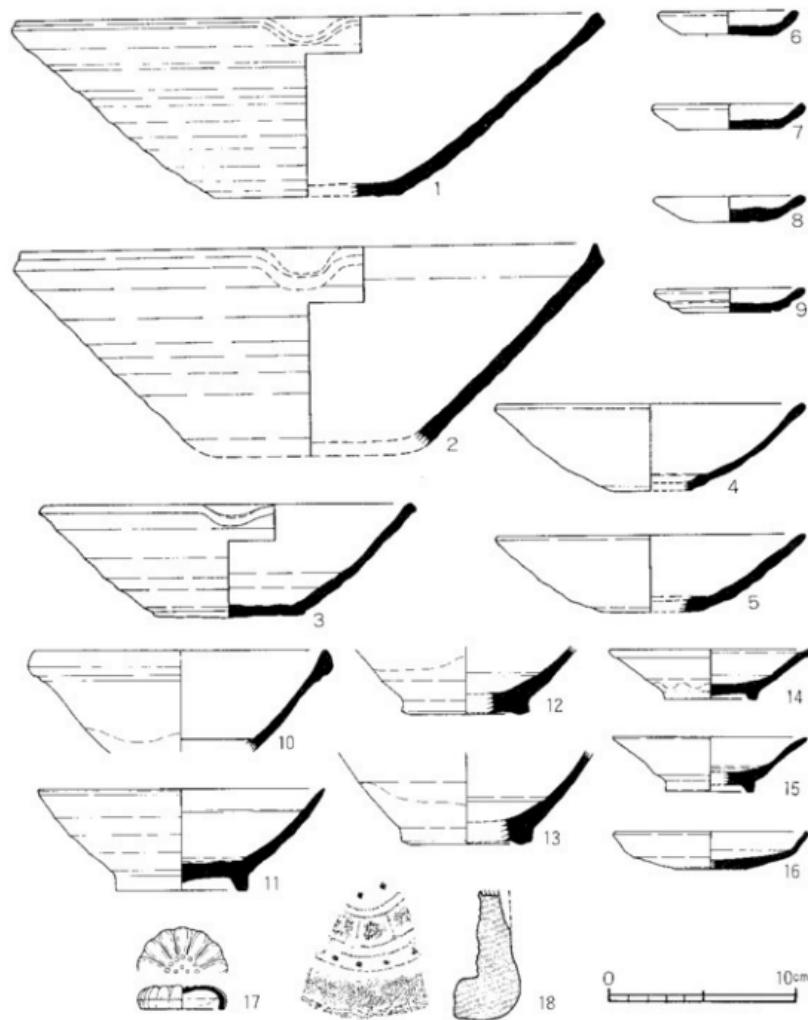


fig. 61 出土遺物実測図 (1~9.須恵器、土師器 10~17.白磁、青磁 18.瓦)

すこうさん
7. 頭高山遺跡

1. はじめに 頭高山遺跡は、神戸市西区伊川谷町小寺に所在する弥生時代中期の遺跡である。明石川の支流である伊川の中流域左岸に位置し、伊川によって形成された平野部に臨む標高117mを頂部とする洪積丘陵上に立地している。ここからは、南西に明石平野や瀬戸内海が望める。

頭高山遺跡は、かつて、磨製石剣の出土地としてその地名が記録されている（森本六爾『日本青銅器時代地名表』1929）が、今日ではその遺物や詳しい出土場所については不明である。昭和53年度に神戸市教育委員会が実施した研究学園都市建設予定内の遺跡確認調査により、弥生時代の遺跡の存在が明らかになった。その後の試掘調査で、頭高山の頂部とそこから派生する尾根のはば全体に弥生時代中期の広大な集落址が存在することが確認された。遺跡は標高90～115mの間に存在しており、北高にして約40～65mの尾根上および斜面に遺構を形成している。いわゆる高地性集落と呼ばれる遺跡である。

明石平野と明石川流域は、弥生時代になると、数多くの遺跡が出現する地域である。なかでも吉田遺跡は近畿地方で最も古い時期の遺跡のひとつに数えら

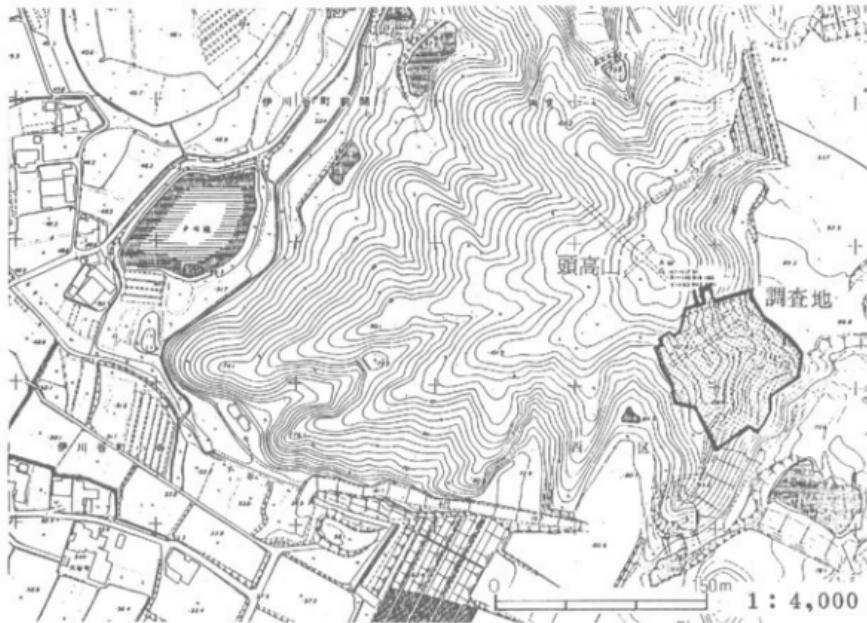


fig. 62 頭高山遺跡調査地位置図

れている。このことは、早くから明石平野に弥生文化が浸透し発展していたことを物語っている。明石川およびその支流の檍谷川、伊川の中流域には、頭高山遺跡のほか、西神第50地点遺跡や磨製石剣、石戈が出土した青谷遺跡など同時期の高地性集落遺跡が知られている。

頭高山遺跡の発掘調査は、昭和57年末から遺跡の南東部分にあたる頂部から南へ派生する尾根について、約7000mを対象に行った。

2. 調査の概要

検出遺構　調査地は、頭高山遺跡のなかで平野部側からは最も奥に位置する尾根にあたる。尾根上には幅10m程の平坦面がのびるが、東、南、西の各斜面の傾斜はきつく、30度の斜度を測る所も少なくない。調査の結果、尾根上平坦面と各斜面から竪穴式住居址16棟、段状遺構6か所、土器棺墓2基、土壤16か所、ピット12か所の遺構を検出した。これらの遺構は、すべて弥生時代中期のものである。

竪穴式住居址　竪穴式住居址は、尾根上にある1棟をのぞいてすべて斜面に営まれており、尾根上の平坦面には存在しない。傾斜面にあるため残存状態はあまり良くなく、住居址と断定し難いものである。住居址のほとんどは、平面形が半月状を呈している。のことから、住居址は等高線に沿って斜面上半部の地山を掘り込み、その上を斜面下に盛土し平坦面をつくり出して建築したものと推定している。住居址の残存部は地山を掘り込んだ上半部だけで、下半部は流失している。住居址は構造からみれば、完全な竪穴式住居でなく半竪穴半平地式の形を呈していたものと考えられる。

15号住居址　15号住居址は最も床面の残存状況が良好で、径7.5mのほぼ円形である。また、(SB15)　この住居址の下方斜面で盛土の一部と推定される状況が観察された。中央に焼土、炭化物の堆積した土壤があり、炉址と思われる。柱穴から上屋は、6本柱の構造と考えられる。この住居の斜面上方には、幅約0.3mの平坦面を削り出した段状の部分があり、住居址の構造との関連が考えられる。さらに住居址に続くかたちで南に段状に地山を切り込んで平坦面をつくり出した部分があり、住居に付帯する施設と考えられる。以上にあげたものは、検出された住居址のうち残存状態が比較的良好なものであるが、これら住居址の平面形をみると円形から長楕円もしくは小判形、隅円方形、隅圓長方形に近いものに復元される。のことから、住居を建築する場合、立地に大きく左右されたことがうかがわれ、上屋構造は必ずしも一定の形のものでなかったと思われる。

段状遺構　住居址とはほぼ同様の形状で、等高線に沿って斜面をL字状断面に掘り込んだ遺構が検出された。これは、つくり出された平坦面から柱穴が検出されないものや、長さ10m以上も掘り込んだものがあり、形態から住居址とは認め難いものであった。三田市奈カリ寺遺跡では、段状遺構とよばれる遺構が検出されて

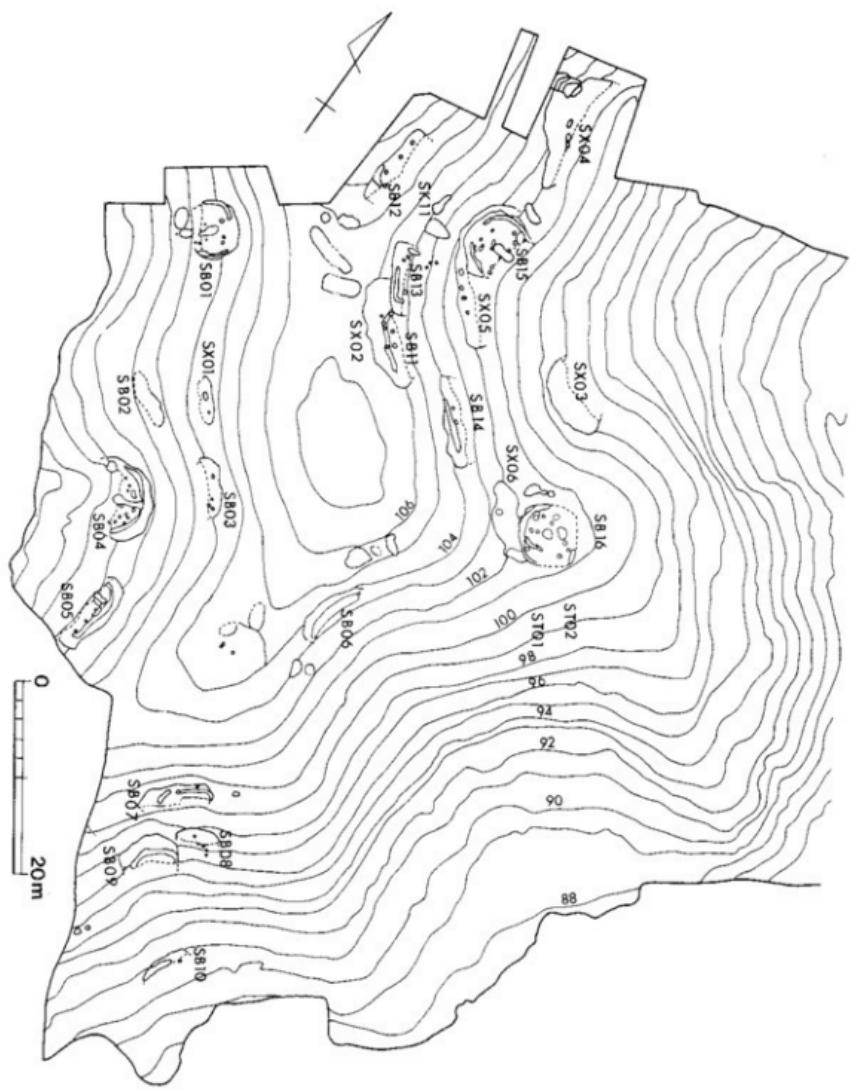


fig. 63 頂高山遺跡調査区全図

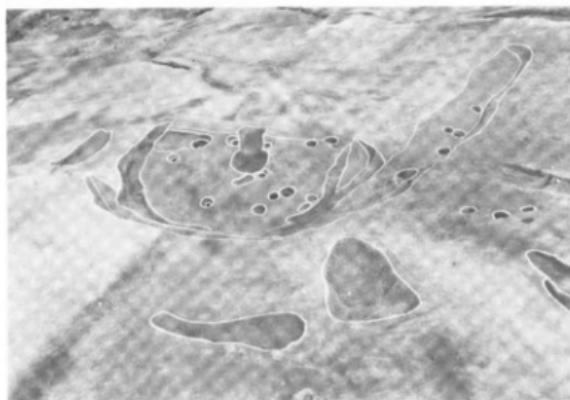
fig. 64 頂高山道路東斜面
全景（北から）



fig. 65 頂高山道路東斜面
全景（南から）



fig. 66 S B15、S X05
(西から)



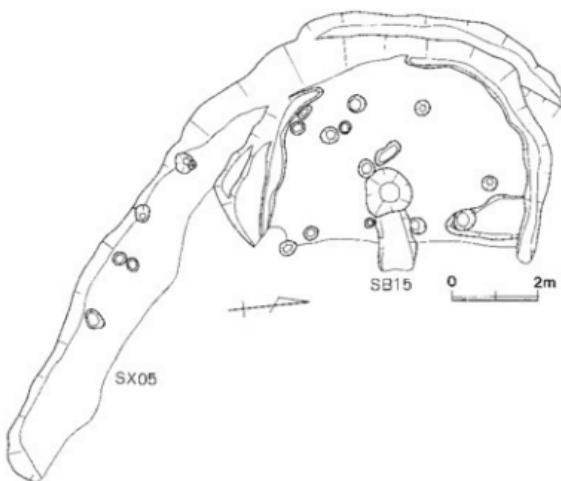


fig. 67 SB15、SX05平面図

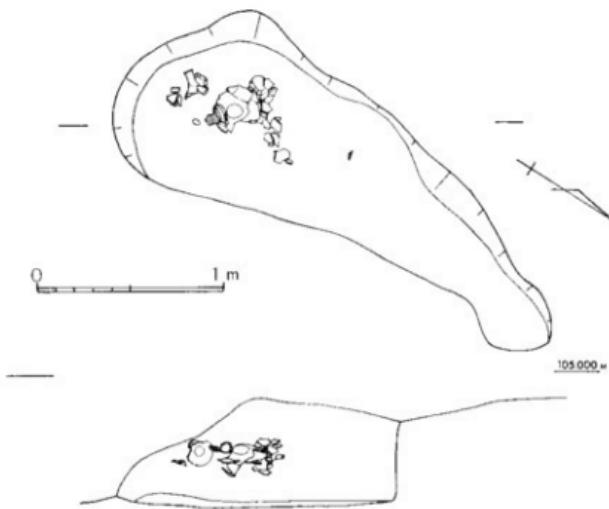


fig. 68 SK11遺物出土状況図

おり（兵庫県教育委員会報告）、規模の差異はあるものの、本遺跡で検出された地山切込み状の遺構と同様のものと思われる。この段状遺構の性格については、斜面に営まれる住居に付帯するものであろうが、具体的には推し測れない。

土器棺墓 土器棺墓が2基、尾根より少し下がる斜面で検出された。それぞれの土器棺(ST01,02)は隣接し直交する形で置かれていた。どちらも、長さ約1m、幅0.6mの不整円形の墓壙に壺を横にねかせた状態に埋めてあり、大きさからみて小児用と推定される。調査地区では、この土器棺墓のほか墓址は見つかっていない。



fig. 69 S T01, 02検出状況

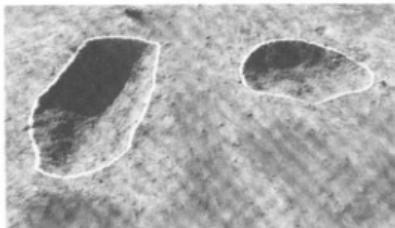
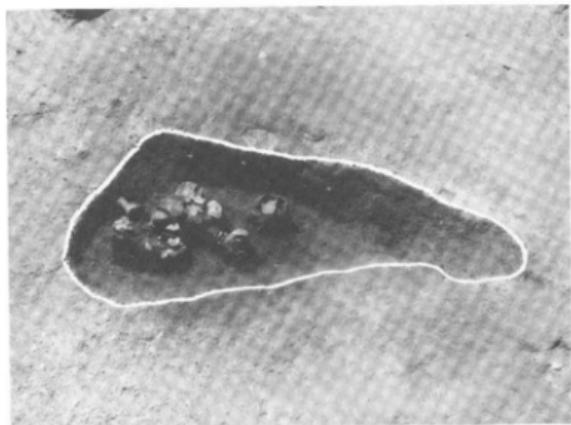


fig. 70 S T01, 02掘形

土壤 尾根上平坦面および稜線上からは、土壤が検出された。これらのほとんどに焼土や炭化物が見られ、土器片などの遺物は少量であった。土壤内壁の焼け具合いもさほどなく、高温かつ長期に使用したものとは考えられない。このことや、設けられた場所からみて狼煙に使用したとも想像できるが、積極的に推定できる証拠はない。

fig. 71 SK11遺物出土
状況



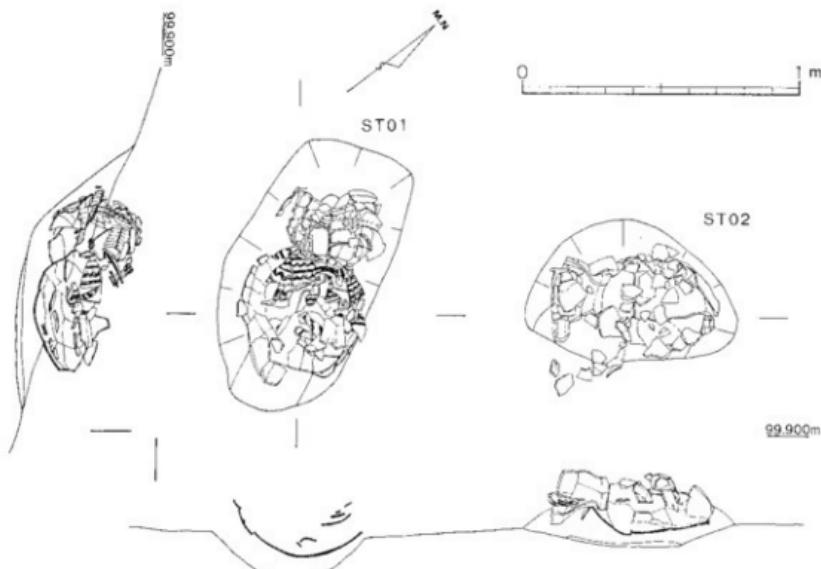


fig. 72 S T01、02上器出土状況実測図

3. 出土遺物 流土中より多くの弥生上器と石器類が出土している。上器のはほとんどは弥生時代中期後半のもので、壺、甕、高杯、器台などさまざまな器種がみられる。石器類には、打製石器として石鎌、石錐、そして石器製作の過程で生ずる剝片、碎片があり、磨製のものは、石劍、石鎌、石斧、砥石などがあった。打製石器はサヌカイト製で、15号住居址ではサヌカイトの剝片、碎片が多量に出土し、住居内で石鎌などの石器製作が行われたことを物語っている。磨製石劍は4個体分の破片が出土し、うち1点は茎部が欠損しているが、残存長15.5cm、幅3.2cmで基部付近に孔を2つ穿っている。本遺跡の周辺、明右川流域での磨製石劍の出土地は、青谷遺跡、池上口ノ池遺跡、新方遺跡、養田中の池遺跡が知られている。

4.まとめ 頂高山遺跡は弥生時代中期後半の集落址であることが、発掘調査によって明らかになった。中心となる遺構は17棟の住居址であり、これらはすべて傾斜面に造られていた。住居址の形状については、先にあげたように単一的ではなく、自然地形に大きく制約されていたとみられる。住居址は、弧状にくぼむ谷部の傾斜が緩やかな所を選んでつくられている。また、形状もその地形にあわせた

fig. 73 S X02、S B11
(東から)



fig. 74 S X06 (手前)
と S B16
(南から)



ものを選んだと思われる。しかし、その規模をみると、形状の差はあるが、床面積においてはいずれも大きな差ではなく、ほぼ同等であろうと推定され、一定の床面積を確保する工夫がなされていたと考えられる。傾斜面に営まれる住居の排水、防水の施設や日常生活に使われた通路や他の生活空間については、検出された遺構の検討を含め、今後の課題として残されている。

本遺跡の特徴は、平地ではなく、比高差の大きい丘陵上に営まれた集落址ということにある。このような高地性集落は、軍事的防衛の性格を持つ集落との考えがあり、ムラからクニへ移りかわる時代の緊張の現われととらえられる。明石川とその支流域での、弥生時代集落址の調査例は、近年増えつつあり、高地性集落の問題も含め、これら地域の弥生時代社会の動向を知る手掛りの一端を担う資料として、頭高山遺跡は貴重である。

いけがみきた
8. 池上北遺跡

1. はじめに 池上北遺跡は、伊川の中流域右岸の標高30m前後の低位段丘上に立地する。周辺には、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多く知られている。北側丘陵上には、鬼神山古墳群、伊川の対岸では、頭高山遺跡、池上口ノ池遺跡、西方には北別府遺跡、南別府遺跡がある。

池上北遺跡の発掘調査は、昭和54年度より実施しており、これまでに弥生時代の住居址をはじめ、弥生時代から古墳時代の遺構及び遺物を検出している。今回の調査は、池上北遺跡のなかでは南東部に位置する部分、約400m²を対象に行い、弥生時代後期の竪穴式住居址、壺棺墓、古墳時代の溝などを検出した。

fig. 75

調査地
位置図



2. 調査概要 今回の調査により、竪穴式住居址2棟、壺棺墓1基、溝状遺構4条、土壙1基、ピット2か所を検出した。遺構面は、東側に向かってやや高くなっている。現地表下0.6~0.9m、標高29m前後で検出される。また、遺構面の直上には、弥生~古墳時代の遺物を包含する土層が、約0.2m堆積している。

竪穴式住居址は、調査地内で2棟検出され、いずれも出土遺物から弥生時代後期のものである。

S B01 S B01は、直径約10mと推定される大型の円形住居址で、床面には、一段高いといわゆるベッド状遺構を設けている。床面の柱穴と考えられるピットからは、木質の残存する柱根が出土した。住居址内より出土した土器には、山陽地方の特徴をもつ壺形土器があり、搬入品と考えられる。

S B02 S B02は直径7.5mの円形住居址で、深さ0.4~0.5mである。床面中央には、炉址と考えられる炭、焼土の堆積した径1.6m、深さ0.45mの土壙を設けている。

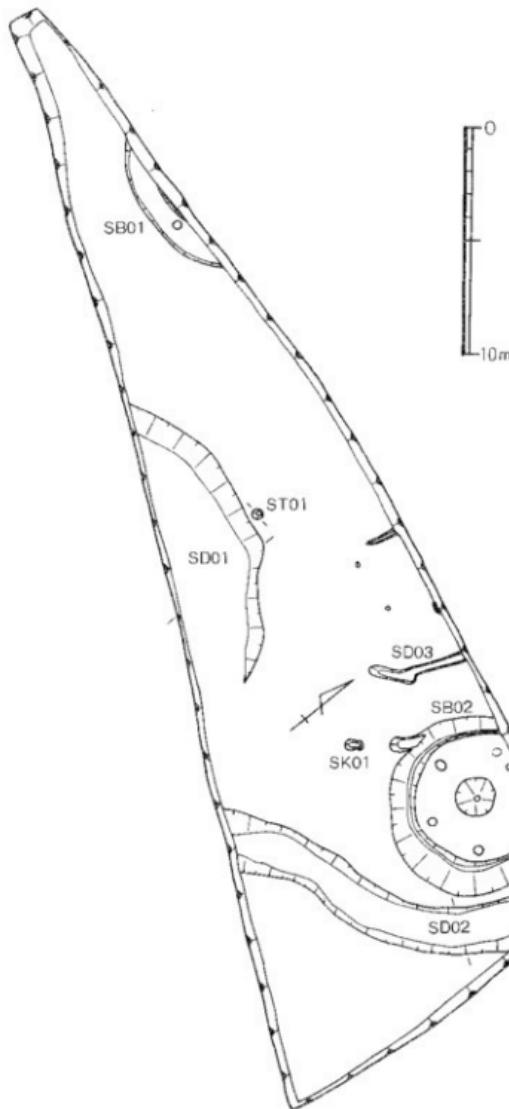


fig. 76 調査区平面図

fig. 77 調査区全景（西から）
手前は S B01



fig. 78 調査区全景（東から）
手前から S D02、
S B02



fig. 79 S D02遺物出土状況

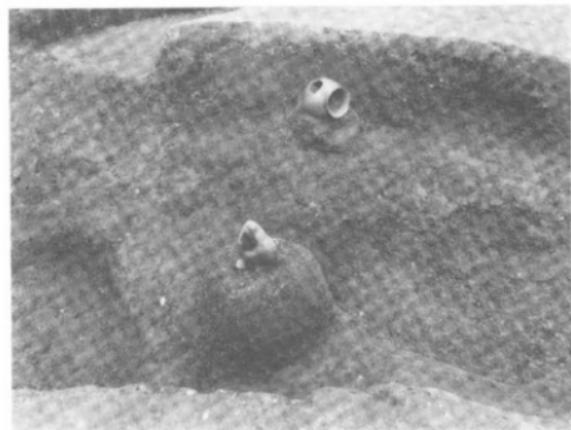


fig. 80 S B01
平面图

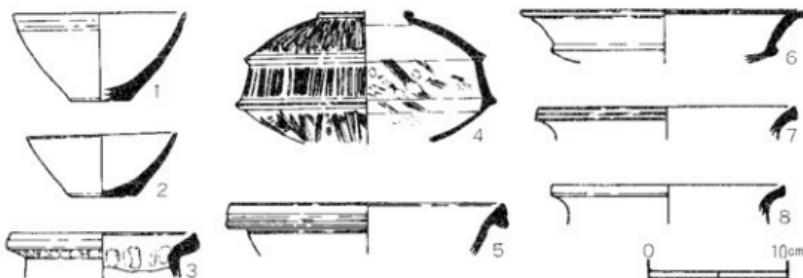
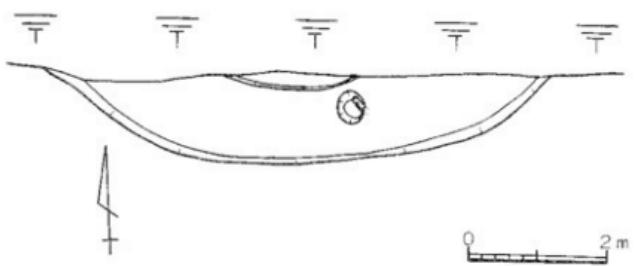
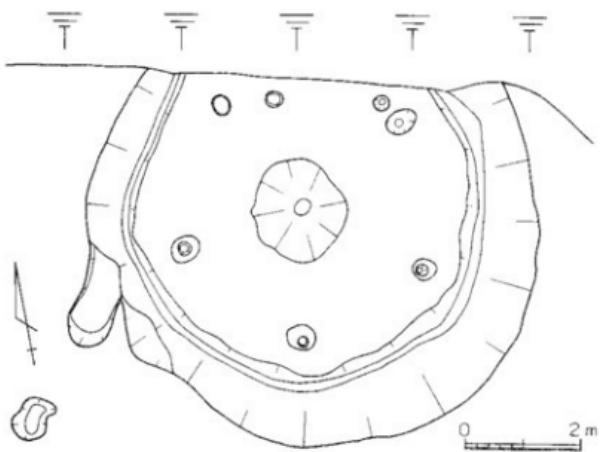


fig. 81 S B01出土遗物实测图

fig. 82 S B02
平面图



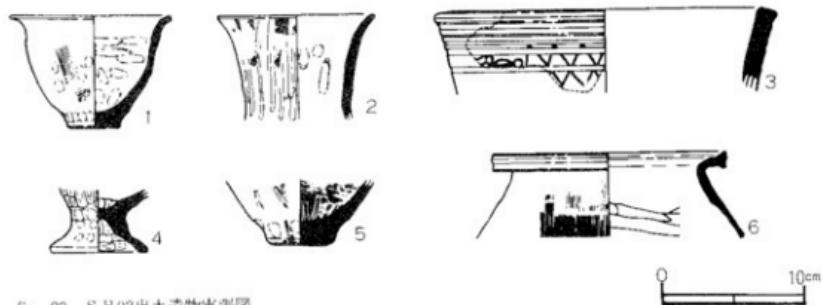


fig. 83 S B02出土遺物実測図

柱穴は、ほぼ正五角形に並ぶ形で5か所検出され、5本柱の構造であったと考えられる。

S D01 溝状構造は、4条検出された。S D01は、幅4m、深さ0.3mで北縁部が明瞭な落込みとなって検出されたが、南側は緩やかに立ち上がり、深い溝状になっている。埋土から弥生時代後期の土器片が出土している。

S D02 S D02は、幅約2m、深さ0.75mの溝で、埋土の堆積状況より河道と考えられる。埋土の最下層からは、弥生時代前期の壺形土器口縁部が出土し、上層部では、古墳時代前期の土師器の甕と完形の小型丸底壺が出土した。

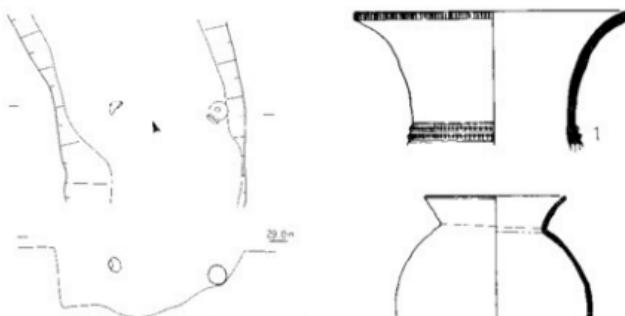


fig. 84 S D02 土師器出土状況図

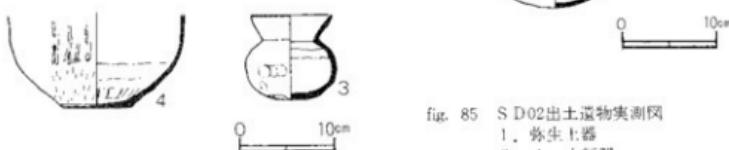


fig. 85 S D02出土遺物実測図
1. 弥生土器
2~4. 土師器

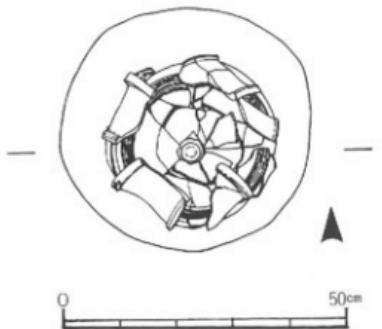


fig. 86 ST01平面図

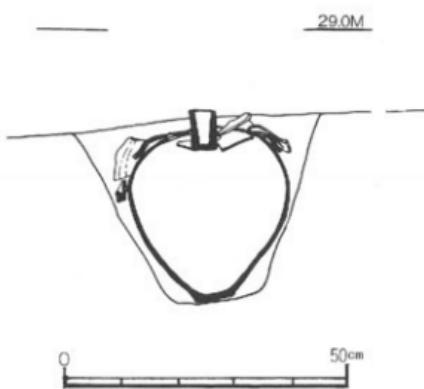


fig. 87 ST01断面図

ST01 調査地のほぼ中央部において弥生時代後期の壺棺墓が検出された。壺棺は径0.45m、深さ0.35m以上の掘形内に直立して埋置されており、壺の胴部に高環の坏部で蓋をしていた。また、打ち欠いた壺の口縁部及び高坏脚部は、棺の上面にならべるように置かれていた。この壺棺は、大きさから乳幼児用と推定される。

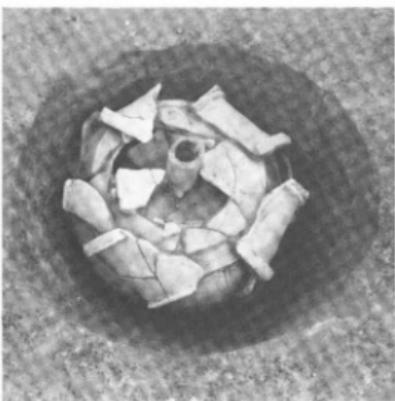


fig. 88 ST01検出状況

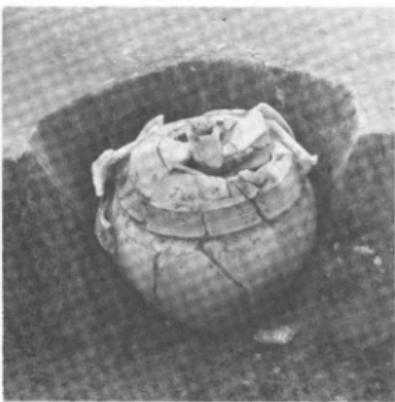


fig. 89 ST01埋置状況

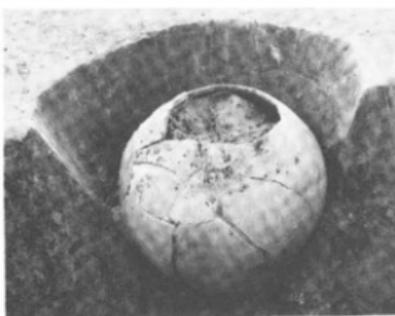


fig. 90 ST01蓋取り上げ後

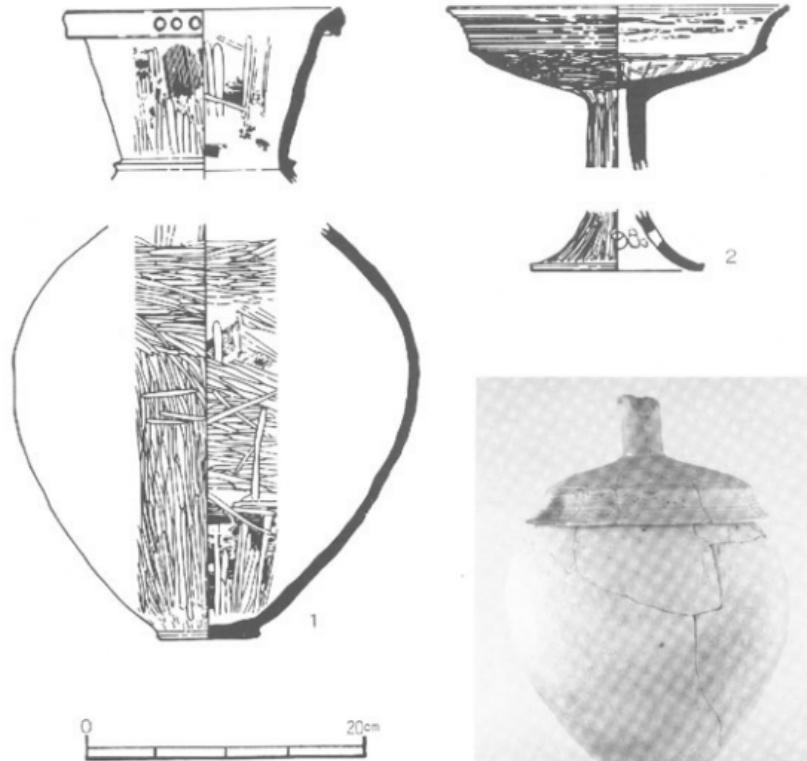


fig. 91 S T01出土遺物実測図 1. 壺 2. 高環



fig. 92 S T01壺棺復元状況

3. まとめ 昭和54年度から調査を重ね、池上北遺跡の一帯が弥生時代から古墳時代にかけての大集落址であることが明らかになってきた。今回の調査においても、弥生時代後期の住居址が検出され、この地区が集落の一端に位置することが明らかとなった。しかし調査面積が少なく、これまでの調査箇所が遺跡全体からすれば点的な調査であるため、集落の構造や性格まで確認できる資料は得られておらず、今後の問題として残されている。

かぐら 9. 神楽遺跡

1. はじめに 神楽遺跡は、昭和54年に神戸市高速鉄道（地下鉄）建設工事に先立って行った遺跡確認調査で発見された遺跡である。この地下鉄建設工事に伴う発掘調査では、弥生時代後期の溝1条、平安時代中期の溝1条、古墳時代後期と平安時代中期の土壙、ピットが多数発見された。また、平安時代の溝からは、須恵器、土師器、黒色土器のほか、練糰陶器、灰釉陶器などの施釉陶器が出土し、これら土器の中に数点「東福」と墨書きされたものがみつかっている。

今回の発掘調査は、神戸市立神楽保育所の改築工事に先立って行ったもので、前述の地下鉄建設工事に伴う調査地の北側隣地にあたる。

2. 位置 神楽遺跡は、新湊川（茹藪川）の下流西岸に位置している。このあたりは、茹藪川、妙法寺川によって形成された扇状地で、調査地は標高約4m（遺構面）の低地に立地している。

神楽遺跡周辺ははやくから市街地化され、遺跡の存在については、最近まで空白の地域であった。しかし、ここ数年地下鉄建設や再開発などの工事に伴い遺跡の発見が相次ぎ、市街地の地下にも遺跡が残されていることがわかつてきた。弥生時代の楠荒田町遺跡（中央区、兵庫区）や古墳時代の松野遺跡（長田区）が、その代表的な例である。

3. 調査概要 今回の調査で発見された遺構は、弥生時代の溝1条、古墳時代後期の竪穴式住居址5棟、溝2条、土壙9か所、ピット多数、平安時代の溝1条、ピット多数である。



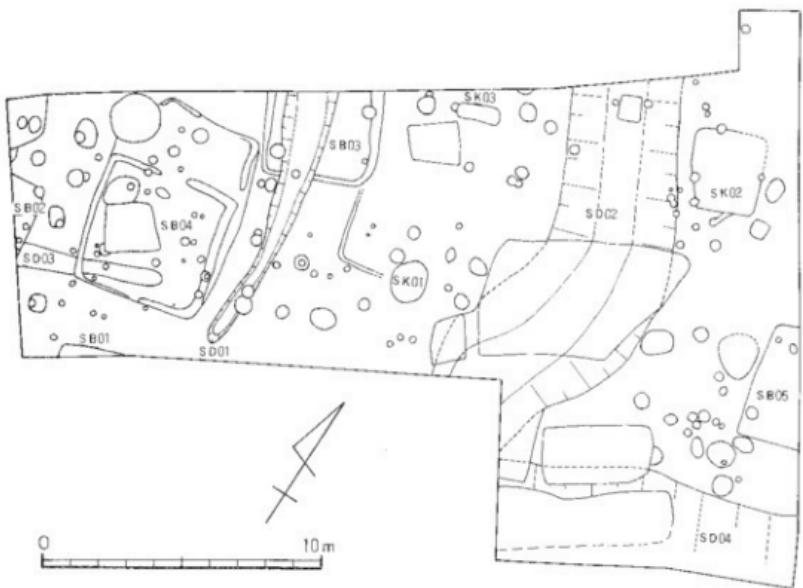


fig. 94 遺構全体図

溝2 溝2は、幅4m、深さ0.9mで、埋土の堆積状況から自然流路と考えられる。

(SD02) この溝内より、弥生時代中期後半から後期にかけての土器が出土した。

1号、2号住居址 1号住居址と2号住居址は、その規模は不明であるが、方形のものと思われ、

(SB01,02) 2号住居址の壁面にそっては、柱穴と思われるビットが検出された。

3号住居址 3号住居址は、一辺4.2mの方形と推定され、周壁溝をもっている。溝1やビ

(SB03) ットによって切られている。

4号住居址 4号住居址は、4.8m×7mの長方形を呈している。周壁溝は南側で方形に周

(SB04) り、もとは方形の住居址を北側に拡張したものと考えられる。

5号住居址 5号住居址は、一辺4mの方形と推定される。周壁溝は検出されず、本来設

(SB05) けられていなかったと考えられる。

これら1号～5号の竪穴式住居址は、いずれも古墳時代後期（5世紀末～6世紀初頭）に属する。

土壙1 土壙1は、径1.3mのほぼ円形で、深さ0.6mのすり鉢状を呈している。埋土よ

(SK01) り、須恵器、土師器のほか、製塙土器、獸齒が出土した。

土壙2 土壙2は、幅約2.5m、長さ3mの長方形の土壙で、北側邊の中央付近に炭と

fig. 95 調査地全景
(西から)

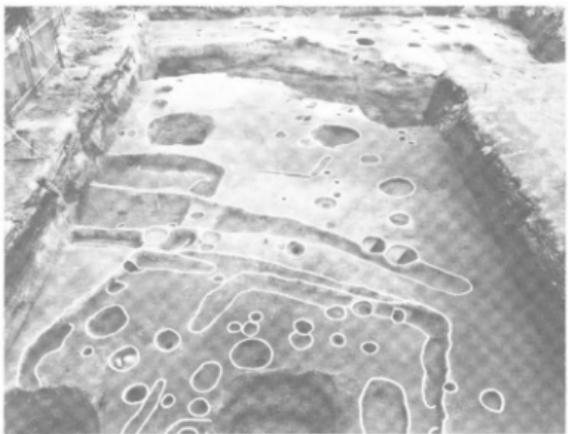


fig. 96 調査地全景
(南から)

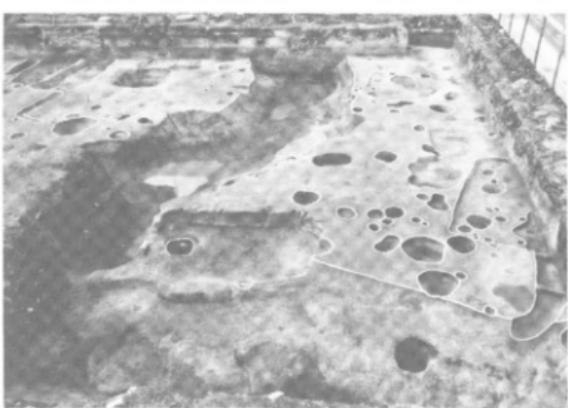
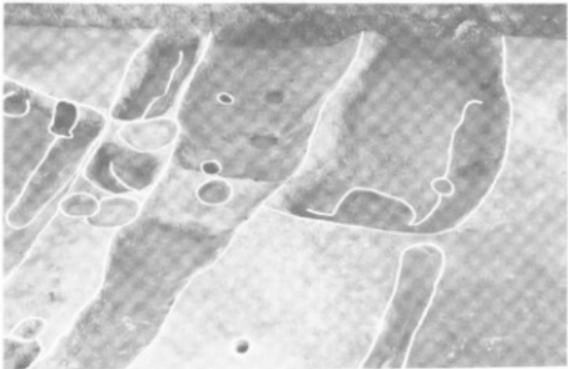


fig. 97 S B 03
(南から)



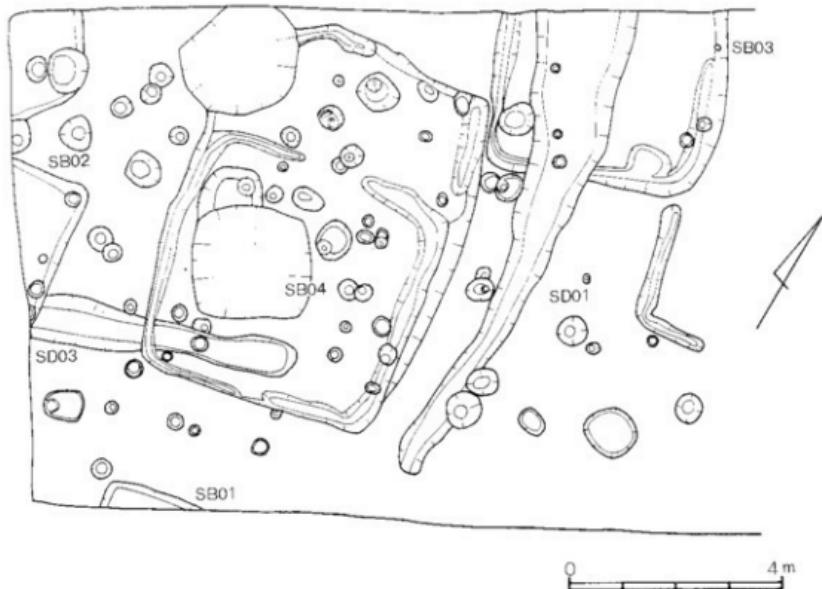


fig. 98 調査地西半平面図

(SK02) 焼土が検出された。土壇内より須恵器の甕、环
蓋、土師器表などの土器のほか、歯骨に10数条
の線刻をしたものが出土している。

上塙1、2とも古墳時代後期（5世紀末～6
世紀初頭）に属する。

溝4 溝4は、幅4m以上、深さ0.8mで調査地の
南端で検出された。溝内から出土した遺物は、
須恵器、土師器、黒色土器、綠釉陶器で古墳時
代後期から平安時代のものである。

このほか、住居址状の落込み1か所、土壇、
ピットが多数検出されたが、性格については不
明である。ピットのうち柱穴と思われるもの
数か所みられる。これらのピットの時期は、出
土遺物のはほとんどが細片のため不詳であるが、
古墳時代後期（5世紀末～7世紀）に属するも

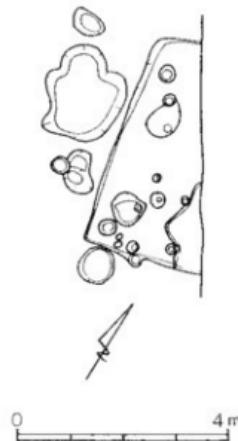
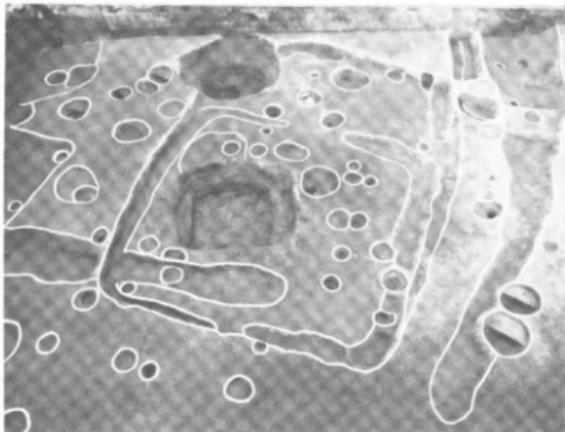


fig. 99 S B05平面図

fig. 100 S B 04
(南から)



のと、平安時代（10世紀～11世紀）に属するものが存在する。

4. まとめ 神楽遺跡の調査は、前回（昭和56年度地下鉄建設に伴う）の調査と合わせても、わずか700m程度にすぎないが、この地域に弥生時代から平安時代に至る原始、古代の人々が生活を営んでいたことが明らかになってきた。

今回、竪穴式住居址がまとまって検出されたことにより、古墳時代後期の集落の存在が確認された。神楽遺跡か

ら西方約1kmにある松野遺跡は、同時代の豪族の屋敷跡と推定される遺構が見つかっており、この神楽遺跡の集落との結びつきが考えられる。この付近一帯が当時の「村」を形成していたと推察される。

また、弥生時代の溝は自然流路と考えられるが、出土する遺物の量が多いことから、当時この付近に集落が存在していたことは確実と考えられる。

前回調査の際、平安時代の溝より施釉陶器や墨書き土器などの特殊な遺物が出土したことから、調査当初、この時代の建物址等の発見に期待がかけられていたが、溝、ビット以外明確な遺構の検出はみられなかった。遺跡については、出土遺物から、寺院や官衙などの存在が十分考えられるが、今後の周辺の調査を待って検討してみたい。



fig. 101 S K02土器出土状況

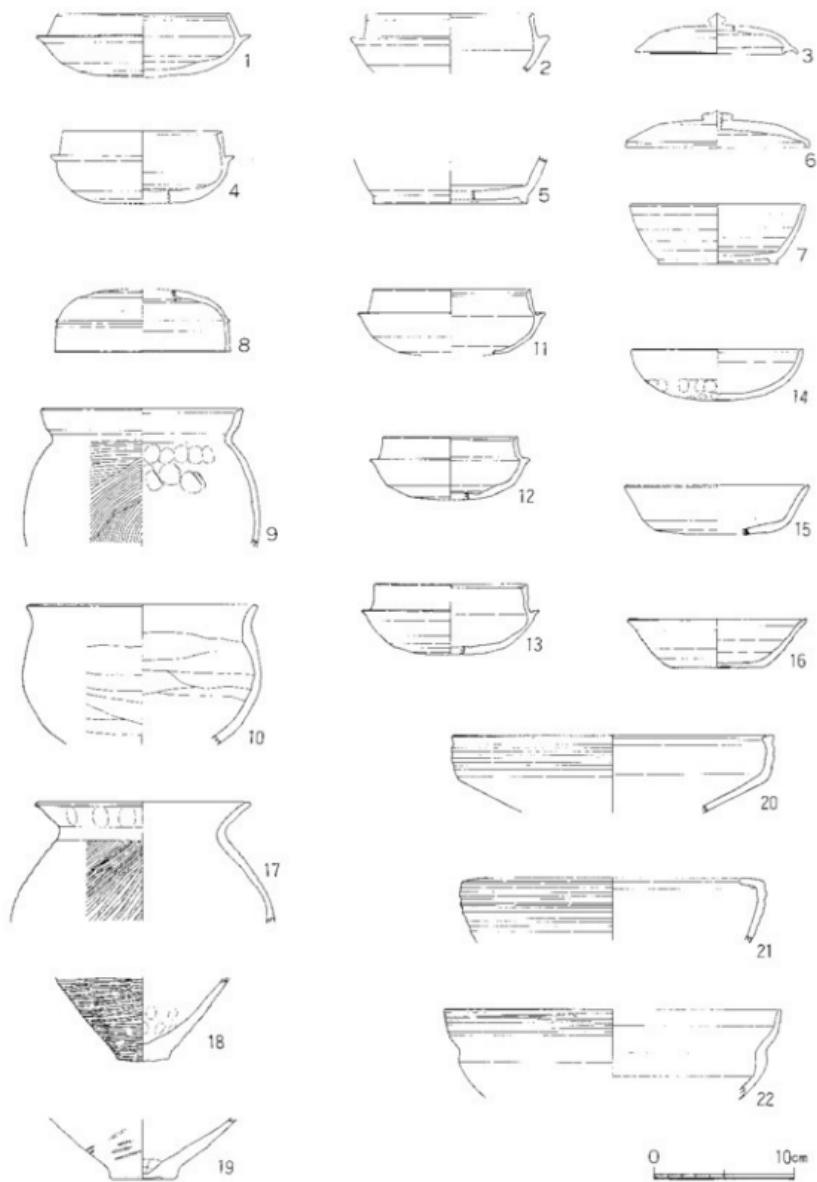


fig. 102 出土遺物実測図 1～8, 11～13, 須恵器 9～10, 14～16, 土師器 17～22, 泥生土器 (1～7, 包含層 8～10, S B04 11～13, S B05 14, ピット 13 15, ピット 49 16, S D04 17～22, S D02)

みなとがれ
10. 湿川遺跡

1. 位置及び立地 湿川遺跡は、旧湊川等小河川によって形成された沖積地上に存在しており、微高地には宇治川南遺跡・六番町遺跡・神楽町遺跡等の縄文時代から鎌倉時代にかけての遺跡が分布している。当該地においても、この種の遺跡の存在する可能性が大きかったため、試掘調査を実施したところ3面の生活面が存在することを確認した。

2. 調査概要

第1面 第1面は、若干の凹凸が存在したが、遺構は存在しなかった。第1面に伴う遺物包含層からは、近世遺物が若干出土した。

第2面 第2面は、暗褐色砂質土が遺構面であり、比較的脆弱で不安定な面ではあったが、遺構が存在している。

検出された遺構は、土壙2、溝1、性格不明の土壙1であった。

土 壤 SKO1 直径0.4m、深さ0.3mの円形土壙である。

SKO2 長辺0.9m、短辺0.7m、深さ0.2mの平面が長方形をした土壙である。

溝状遺構 SDO1 最大幅0.8m、深さ0.15mで、調査区外に延びている。約1.5mを確認した。

性格不明の土壙 SXO1 振乱によって破壊されていたため、南端部は不明であるが、全長4.9m、最大幅1.9m、深さ0.4mを測る不定形土壙である。

第3面 第3面は、湊川によって運ばれた砂礫層であった。調査区の東端及び西端は自然河道と考えられ、暗褐色細砂層が堆積しており、もぐり込んだ砂礫層の上面にのっている。



fig. 103 調査地遠景



fig. 104 第2面 SXO1

3. 出土遺物 出土遺物は、弥生時代から近世にかけての幅広い時期の遺物が豊富に出土している。しかも、各時期の遺物は層位的に出土せず、各面の時期を決定することは困難であった。

例えばSXO1出土遺物には、弥生土器をはじめ、古墳時代土師器・須恵器

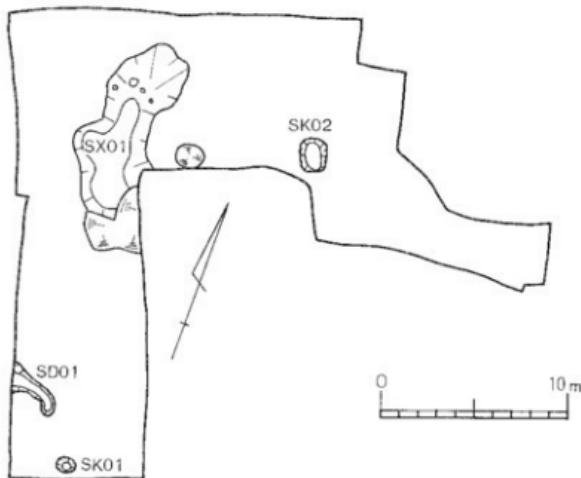


fig. 105 第2面実測図

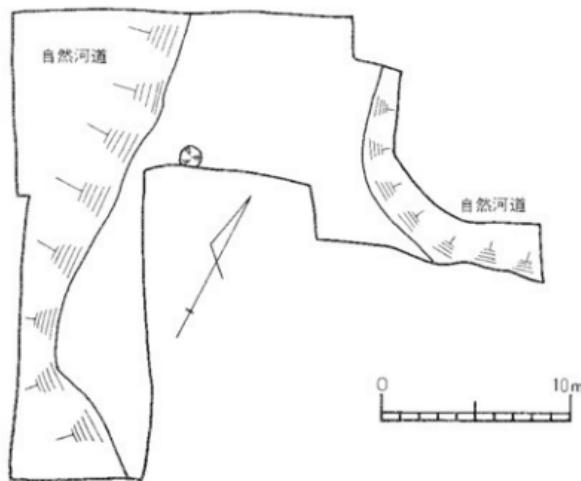


fig. 106 第3面実測図

(台付壺・蓋壺・甕など)、奈良時代土師器(皿・壺・甕・高環など)・須恵器(壺など)、平安時代土師器(壺・皿・甕・瓶など)・黒色土器B類(壺)、中世の土師器(小皿・甕など)・中世須恵器(壺・小皿・片口鉢・甕)・瓦器(塊)など多量に出土している。

この他の遺構・遺物包含層からはこれらの遺物の他、中国産磁器・中世陶器(丹波焼など)・石鍋・錢貨(元豊通宝など4枚)・タコ壺・獸骨・歯片・土錐・鉄斧などの鉄製品が出上している。

4.まとめ 発掘調査の結果、多量の遺物が出土したが、これらの遺物は極く近い地点から流入した二次堆積と考えられる。当該地周辺は、数本の小河川によって形成された沖積地であるが、微高地を利用してかなり古くから人間が居住していたと思われる。その生活跡が、当該地の近接地に存在する可能性は高い。

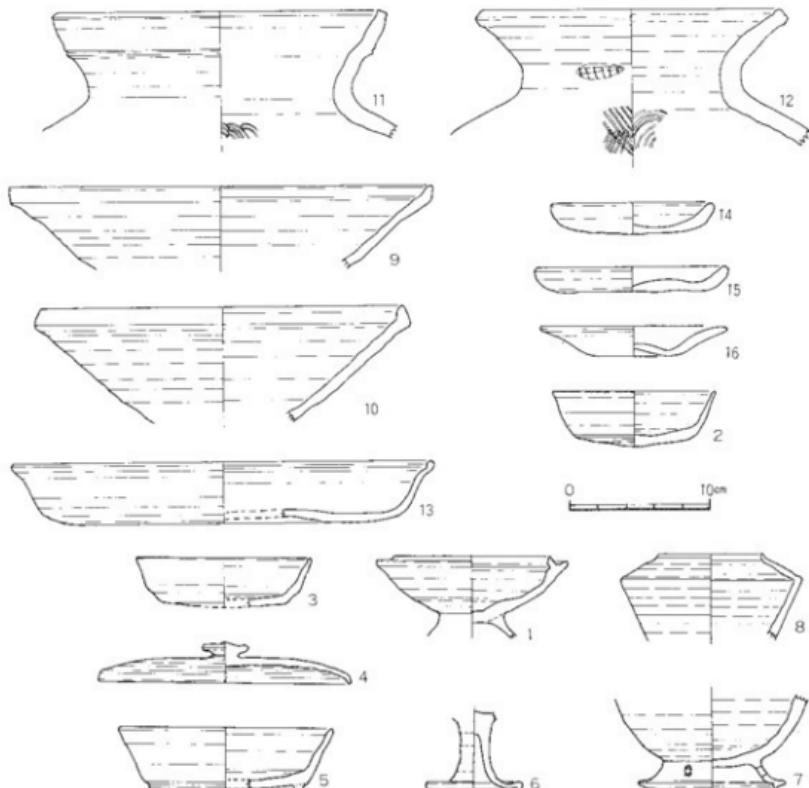


fig. 107 出土遺物実測図 (13~16は土師器、他は須恵器)

11. 宇治川南遺跡

1. はじめに 宇治川南遺跡が所在する中央区楠町一帯は、市内において最も早く市街化された地域の一つであり、從来、遺跡の存在が十分に確認されていなかった。しかし、市街地の再開発や高速鉄道（地下鉄）の建設等に伴う文化財調査の結果、すでに市街化された地域にも近接する楠・荒田町遺跡をはじめ多くの遺跡が現存していることが確認された。

今回、楠町1丁目で市営楠住宅5号棟の建設が予定されたため、住宅建設予定地内の試掘調査を実施した。その結果、当遺跡は敷地内全域に縄文時代から室町時代の3～5面の遺構面が存在する複合遺跡であることが判明した。

fig. 108 位置図



2. 調査方法 調査は、5号棟建設予定地と工事に伴う影響範囲で遺跡の破損が考えられる地区に限って行った。

3. 調査結果 今回の調査は昨年度、調査を実施した第1トレンチを挟んで西方の第3トレンチ（約720m²）と東方の第2トレンチ、第4トレンチ（約1,200m²）を調査した。

第2トレンチ

遺構は上、下2面より検出され、上層では木棺墓、下層では平地式住居址を検出した。

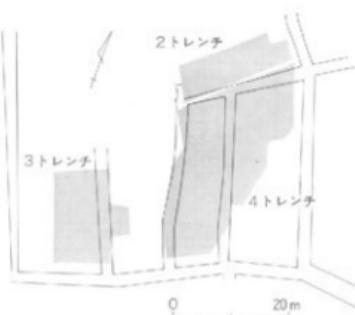


fig. 109 トレンチ設定図

木棺墓

木棺墓は第1トレンチで検出したものと比較して大型のもので、伸展葬した人が入ることが可能なものである。

住居址

平地式の形態をとるものである。幅0.3m、深さ0.3m程度の溝状の掘形を穿ち、その中に厚さ0.06mの板を立てて壁を構築している。壁の内外にそれぞれ1条の溝を有し、耐水性を確保するとともに相対する2辺に0.5m内外の突出部を設けている。

遺物

当調査区において出土した遺物は非常に少量である。これらは時期的に古墳時代前期（庄内式～布留式）に属するもので、表がが多い。

fig. 110 平地式
住居址
(南から)

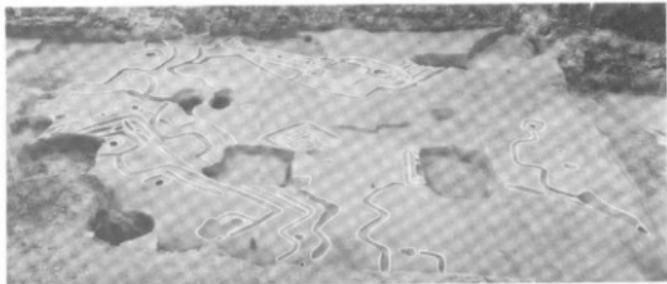


fig. 111 木棺墓
(南から)

**第3トレンチ**

当調査区においては、西側から東側に向かって急激な層位の変化が確認され、低位段丘崖と考えられる。段丘上面では、表土直下に人頭大の花崗岩を含む礫層が検出された。遺構の存在は確認されなかった。

段丘下では西方から東方に向かって緩やかな傾斜をもって粘土と砂層が互層をなして堆積する状況が看取された。

茶褐色砂泥層から青灰色泥砂層には主として、平安時代の遺物が出土し、稀に古墳時代、奈良時代の遺物も含んでいる。青灰色砂泥層より下層、灰色粗砂層までは縄文時代後半、弥生時代前期の土器が多く出土した。

また、トレンチ中央付近北側では茶褐色泥砂層下に黄褐色粘土層を検出した。この黄褐色粘土層の上面において東西方向から南北方向に曲がるL字状の溝を検出した。溝断面はU字状をなし、幅0.5m、深さ0.4mを測る。溝埋土

中より土師器甕・壺・高坏がほぼ完形で出土した。古墳時代前期後半のものである。また、平安時代後期と考えられる柱穴、溝などが検出された。

その他、青灰色砂泥層下の旧河道中からは、数個の完形品を含む多量の弥生時代の土器が出土した。

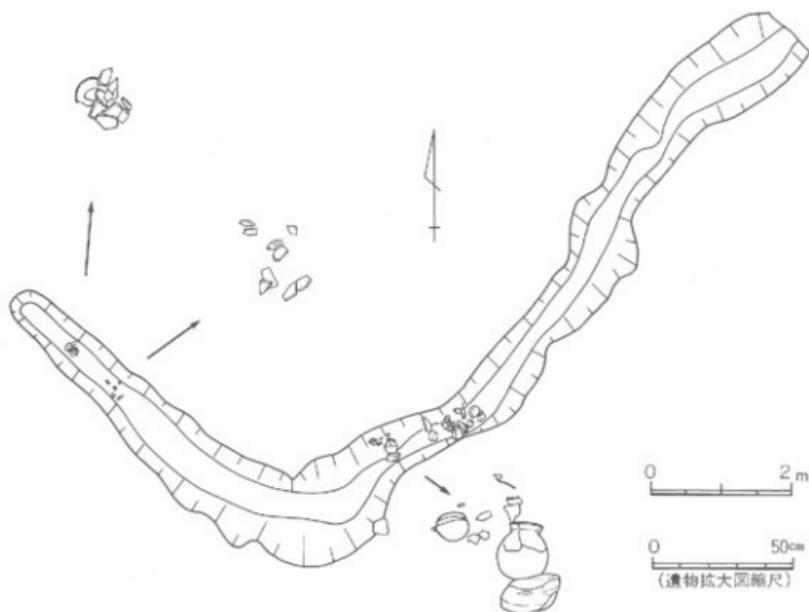


fig. 112 古墳時代溝内土器出土状況実測図

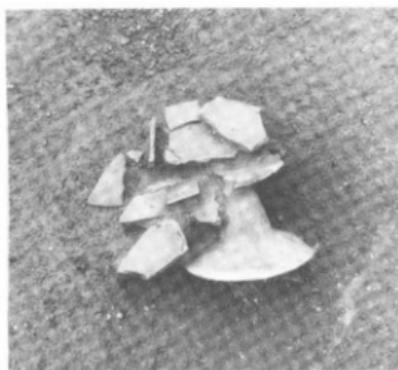


fig. 113 溝内土師器出土状況

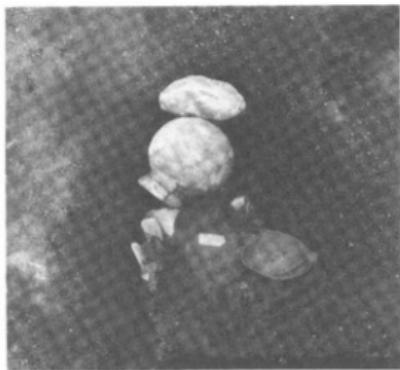




fig. 114 旧河道内弥生土器出土状況

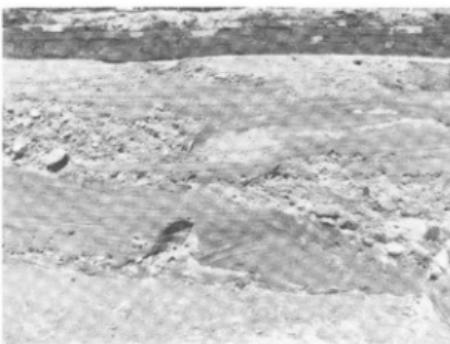


fig. 115 3トレンチ南壁断面

第4トレンチ

現地表下に砂層、礫層が互層をなして堆積していた。礫層は、拳大から人頭大の大きさの礫からなり、砂層は中砂、粗砂からなる。遺物は各層中より少量出土し、時期と層位は対応しない。出土した遺物は縄文時代早期から鎌倉時代に至るものである。

この内、特に出土量の多いものは縄文時代晚期、弥生時代前期、平安時代後期から鎌倉時代のものである。

縄文時代晚期の土器は前半の滋賀里Ⅰ～Ⅲ式のものと、後半のいわゆる突帯文土器群とに分類される。前者は主として第4トレンチ南西部から、後者は主として第3トレンチ北西部から検出されている。また突帯文土器と弥生時代前期の土器の出土状態、分布状態は同じである。このことは注意されるべき点の一つである。

前者には九州産と考えられる黒曜石と東北地方の大洞式土器が伴出している。

また、突帯文土器については滋賀里Ⅳ式、船橋式、長原式の土器が出土している。また、これらと時期的に共伴すると考えられる当地の土器群が存在するようである。

弥生時代前期の土器は前半（段のあるもの）のものは少なく、後半（多条ヘラ描沈線貼付突帯のあるもの）のものが多い。

この他、縄文時代・弥生時代の多数の石器が出土している。打製石器の内、多いのは石鏽・削器、楔形石器などで、石錐などは少ない。磨製石器は石斧・石庵丁などであるが、その量は極めて少ない。

特殊なものとしては石棒と土偶があり、ともに縄文時代晚期後半のものである。

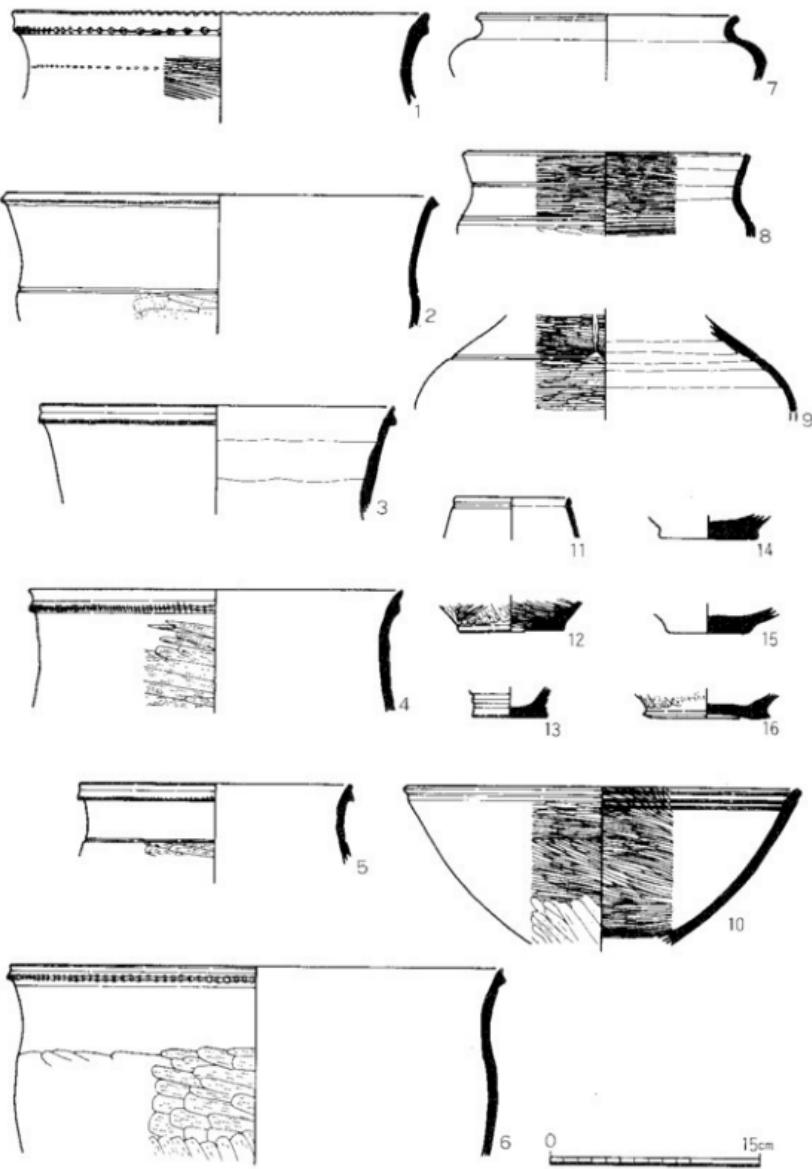


fig. 116 繩文土器実測図

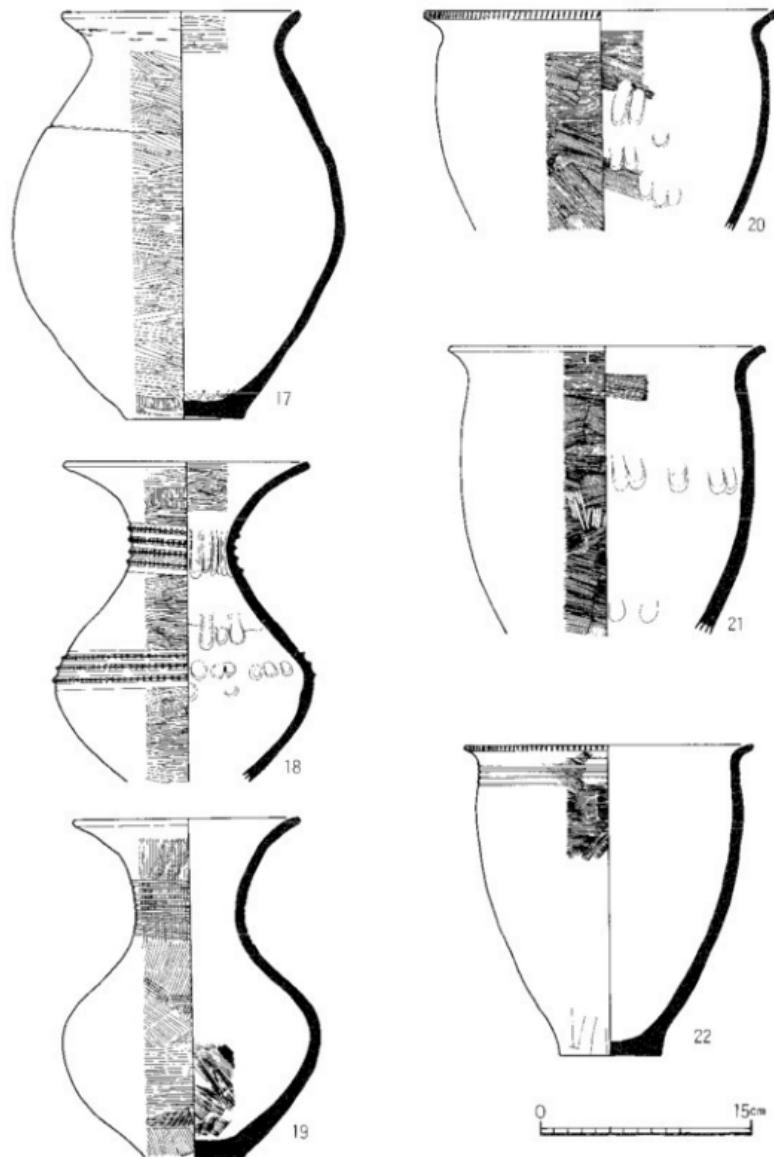


fig. 117 弥生上器実測図

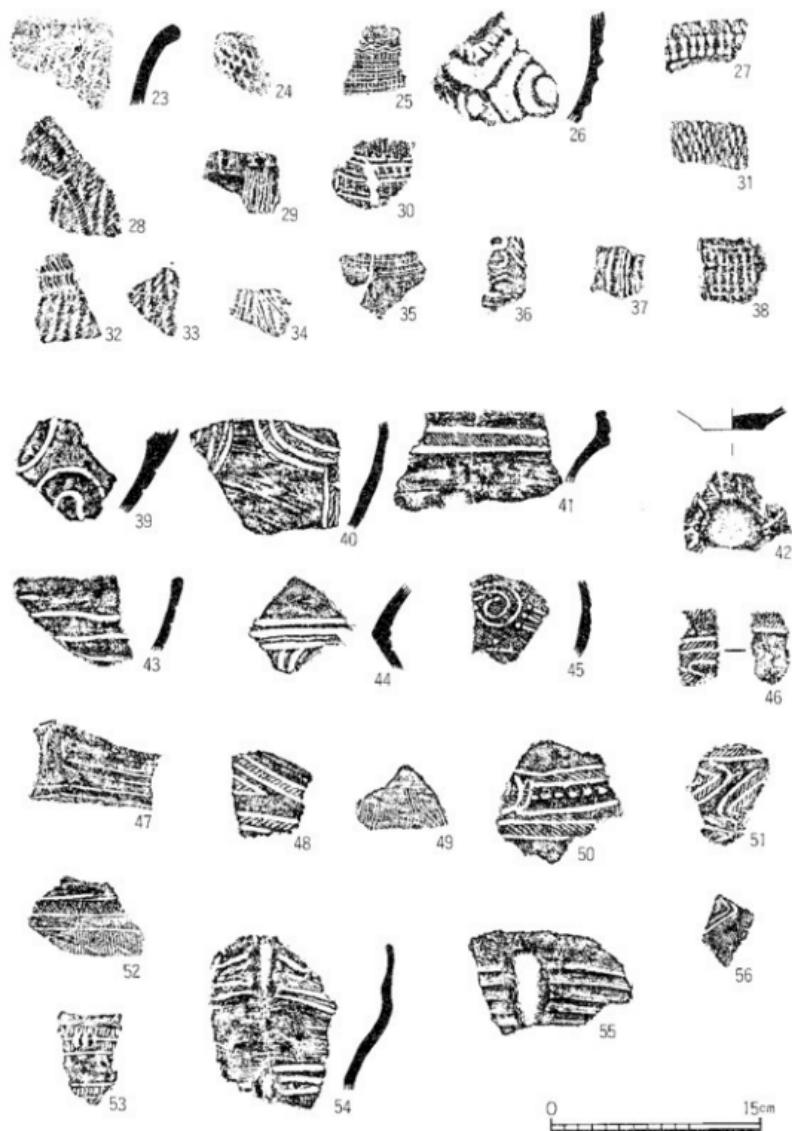


fig. 118 良文土器拓影 (23、24、早期、25~38、中期、39~56、後期)

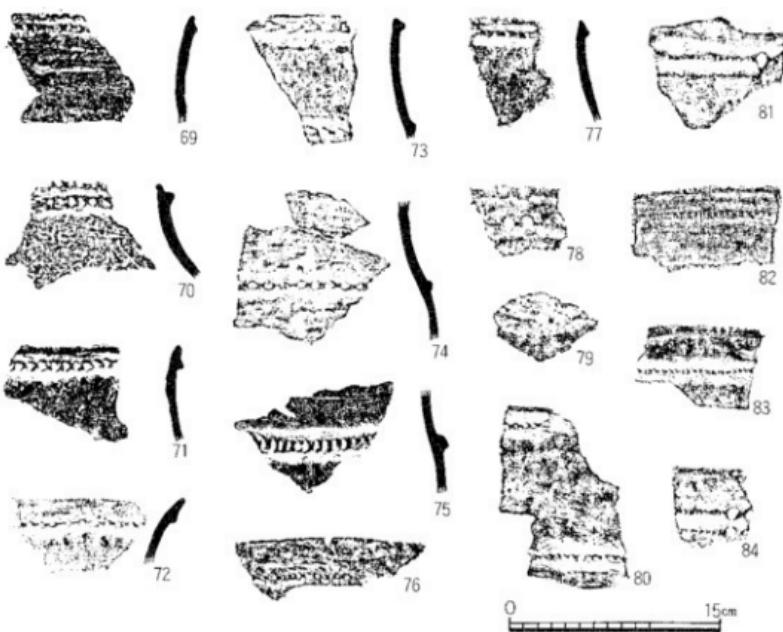
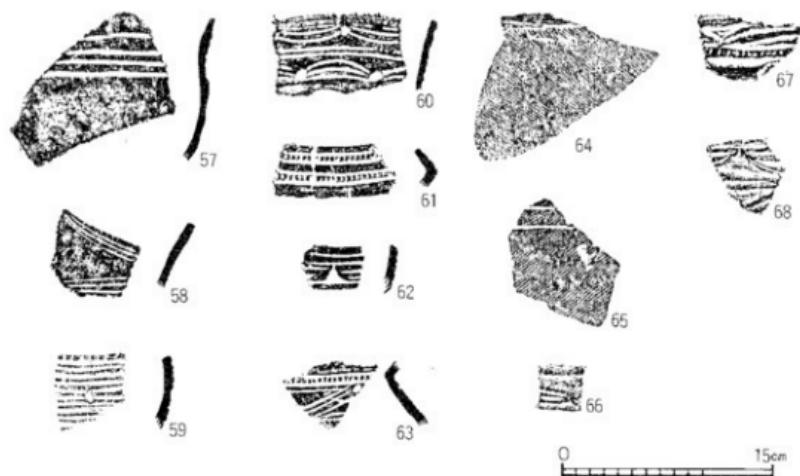


fig. 119 純文土器拓影 (57~65, 67、68、晚期前半、66, 69~84、晚期後半)

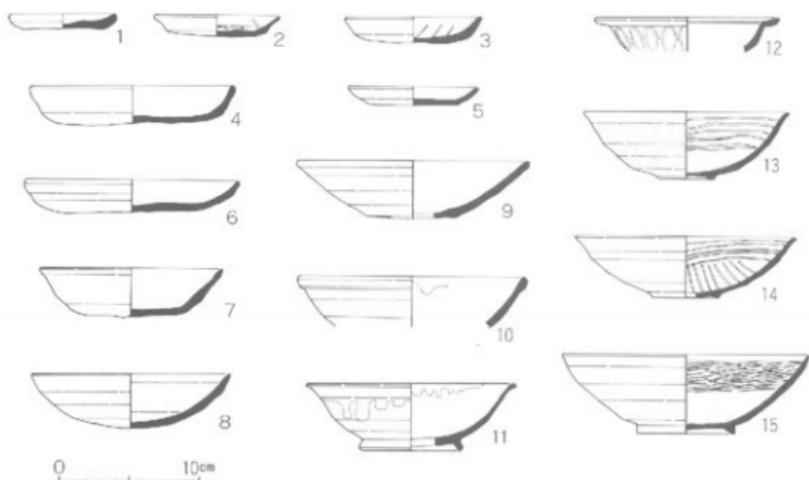


fig. 120 出土遺物実測図 (1, 4 ~ 8, 土師器 2, 3, 13, 14, 瓦器 9, 須恵器 10, 白磁 11, 灰釉陶器 12, 青磁 15, 黒色土器)

fig. 121 近世石組溝
(南から)



fig. 122 近代瓦積み井戸



平安時代後期から鎌倉時代の遺物は第3トレンチ北西部、暗灰色泥土層より出土した。出土品の種類は、10世紀末の黒色土器・灰釉陶器、12世紀後半～13世紀前半の瓦器・土師器・須恵器などである。

4. まとめ

今回の調査によって、当遺跡が縄文時代から鎌倉時代まで永く連続して存在したことが明らかになった。これは当遺跡の周辺環境が他地域に比して良い条件にあったことの傍証となろう。

また、近畿地方では縄文時代の遺跡の発見例は少なく、稀少価値は高い。早期から晩期まで継続した土器型式が発見されたことも当遺跡の重要性を示している。今回の調査において発見された縄文土器の中には、後期初頭の壺ノ内I・II式（関東地方土器型式編年）、晩期の大洞式（東北地方土器型式編年）土器が見られる他、大分県腰高產と考えられる黒曜石が晩期の土器に伴って出土している。これらの資料は当時の交流関係と文化の伝播を知るうえで重要な資料である。

この他、晩期末の突帯文土器の中には数種の型式差を見い出すことが可能であり、今後、編年や地域性の再考をするための基礎資料となるものである。

この他に縄文時代の遺物のうち、特に重要なものとしては石棒と土偶がある。

弥生時代の遺物の大半は前期に属するものである。これらの遺物は先の縄文晩期の突帯文土器群と出土範囲や出土層位が重複しており、縄文時代から弥生時代社会の変化を考える上で重要なものである。また、これらの内には近畿地方で類例の少ない前期前半の遺物も少量出土している。

弥生時代中期・後期の遺物は少なく、遺構も発見されていない。

古墳時代では前期の庄内式・布留式などの土器が出土しているものの、須恵器出現（5世紀中葉）以後のものはほとんどみられない。

奈良時代から平安時代前期の遺物も散見されるものの、その量は少ない。

平安時代後期には、福原遷都が行なわれた。当遺跡で発見された柱穴や溝などから出土した遺物も、この時期に併行するもので、宇治川南遺跡周辺が福原京の一部と考えられる。



fig. 123 3トレンチ近世溝

12. 郡家遺跡(城の前地区)

1. 位置及び 節家遺跡は、神戸市東灘区御影町を中心に存在していると考えられる遺跡で、

立地 天神川によって形成された扇状地上に立地している。今回の調査対象地点は、東灘区御影町御影字城の前地区である。

2. 郡家遺跡 郡家遺跡内においては、過去3地区の発掘調査を実施してきた。

内の調査 (1)大蔵地区 (昭和54年度調査実施)

- ①中世の時期のものと考えられる暗渠
 - ②奈良時代から平安時代の時期の掘立柱建物
 - ③弥生時代中期から後期にかけての遺構
- などが発見された。

(2)御影中町4丁目 (昭和56年度調査実施)

- ①鎌倉時代の水田址、柱穴、溝
 - ②奈良時代から平安時代の柱穴群
 - ③古墳時代後期（6世紀後半）の柱穴群と祭祀遺構
 - ④古墳時代後期（5世紀後半）の土壙
- などが発見された。

(3)天神川改修に伴う城の前・篠ヶ坪地区 (昭和57、58年度調査実施)

- ①鎌倉時代の上塙
 - ②古墳時代後期の遺構
 - ③弥生時代後期末葉の方形周溝状遺構
- などが発見された。

以上のように過去数回の調査によって郡家遺跡は、弥生時代から鎌倉時代までの遺構、遺物が発見される複合遺跡であることがわかる。

また「郡家」という地名が残っていることや、奈良時代から平安時代の建物址の中に、柱掘形が一辺1mを超すものが存在していることなどから、旧発原郡の郡衙が存在したのではないかと考えられている遺跡である。

3. 調査概要 今回の調査対象面積は約780m²であるが、約2割が攪乱を受けている。

(1)鎌倉時代中期（12世紀後半～13世紀前半）

掘立柱建物 攪乱と調査区間に位置するため、明確な規模は不明であるが、東西方向2間（S B 01） 分を確認した。

井戸 形態は一辺1mの方形で、深さ1.3mを測る。底部は径約0.3mの円形を呈し、

（S E 01） 径0.15～0.3mの円礫を積み上げている。



fig. 124 郡家遺跡内調査地位置図 (1. 城の前地点 2. 地蔵元地点 3. 57年度調査天神川
4. 大藏地点 5, 7. 58年度調査天神川 6. 中町地点)

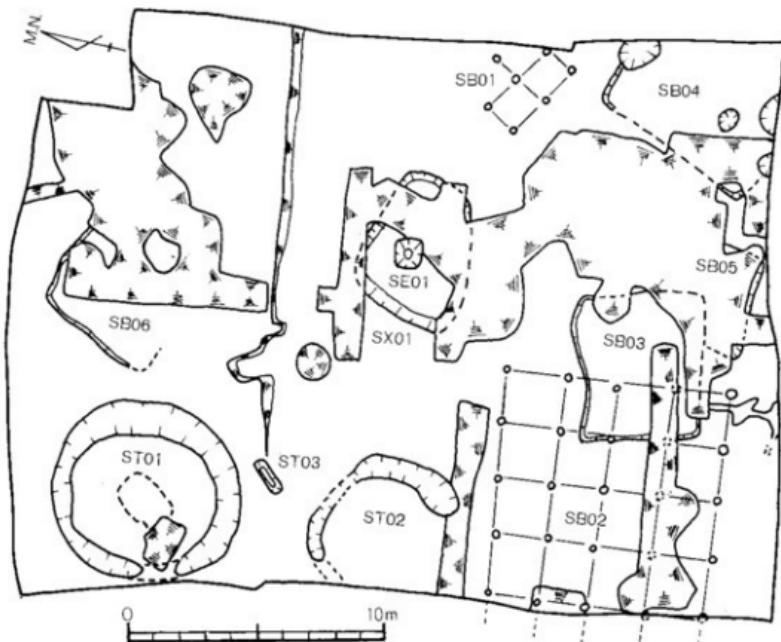


fig. 125 還構全体図

(2)平安時代後期（11世紀前半）

据立柱建物 調査区域内で確認された規模は、4間(8.8m)×4間(8.5m)で、総柱の建物
(SB 02) である。しかし、まだ西方に延びる可能性が強い。柱穴の掘形は径0.4~0.5m、
 柱穴は径約0.2mである。

(3)古墳時代後期（6世紀前半）

竪穴式住居址 **SB 03** 調査区中央南部部分で検出した。東西方向5.6m、南北方向4.7mの方
(SB 03~06) 形住居址で4本柱である。そのほぼ中央から滑石製紡錘車が出土している。

SB 04 調査区南東端で検出されたが、東及び南方向は調査対象地区外に存
 在し、他の遺構との切り合いが激しいため、規模は不明であるが、方形住居址
 と考えられる。

住居址内からは滑石の原石が出土しているが、未製品や小剝片などが発見さ
 れなかったため、玉類の工房址である可能性は極めて低い。

fig. 126 S B 03平面図

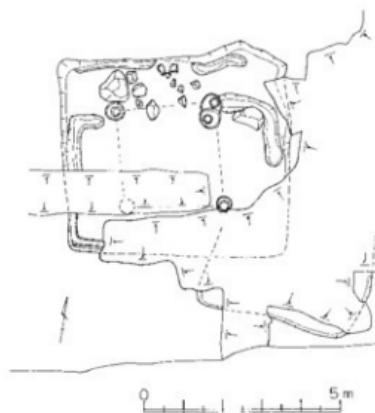
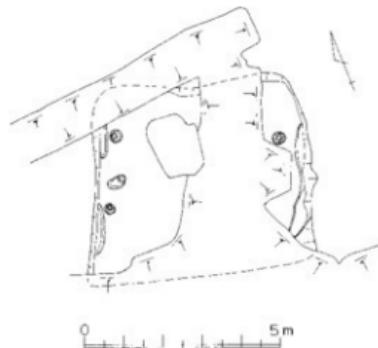


fig. 127 S B 04平面図



fig. 128 S X 01平面図



S B 05 S B 03に切られた住居址であるが、攪乱のため、東西方向が4.0mであること以外不明である。

S B 06 調査区中央北側で検出されたが、攪乱のため、正確な規模は不明である。また周壁溝は検出されなかつた。

(4)弥生時代後期

円形周溝墓 **S T 01** 外径南北7.1m、東西6.7m、(S T 01, 02) 幅0.6~0.7mで、不連続な円形周溝を有している。周溝は最深部で0.4mを測る。埋葬主体部は削平のため確認されなかつたが、円形周溝墓であろう。

S T 02 外径6.5m、幅0.4~0.9mで、S T 01同様不連続な円形周溝を有している。主体部は削平され、存在しなかつた。

S T 03 S T 01とS T 02の間で検出された。掘形全長2.2m、幅は東側0.5m、西側0.7mで中央に木棺を直葬しており、木棺は全長1.4m、幅0.4mを測る。検出状況から、S T 01, 02より新しいと考えている。

土壤状遺構 **(S X 01)** 調査区中央で検出された。東西5.5m、南北3mの台形を呈している。内部からは炭化木をはじめ多量の弥生土器が出土している。土器溜めの土壤か否か断定しがたい。

4. 出土遺物 出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、滑石原石、滑石製紡錘車、須恵系中世陶器、瓦器が出土している。

弥生土器 弥生時代遺構から、壺、鉢、甕、高杯等が出土しており、弥生土器第V様式でもやや新しい段階のものと考えられる。

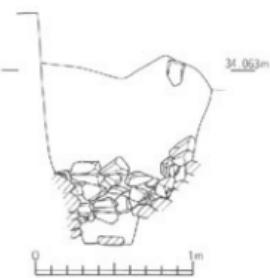


fig. 129 S E 01実測図



fig. 130 S E 01

fig. 131 調査地全景
(南から)



fig. 132 S B 01

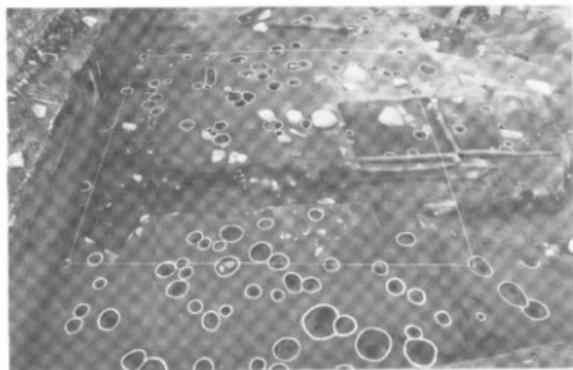


fig. 133 S T 01、02
(東から)



fig. 134 S T 03

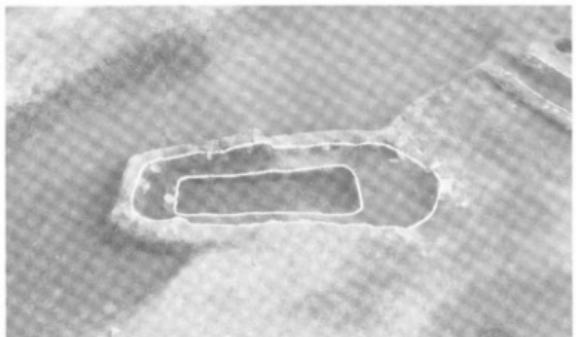
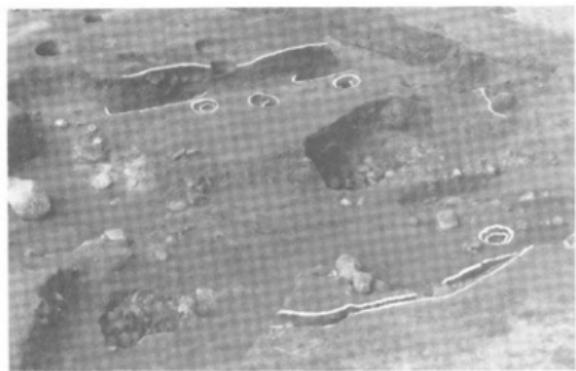


fig. 135 S B 03



fig. 136 S X01



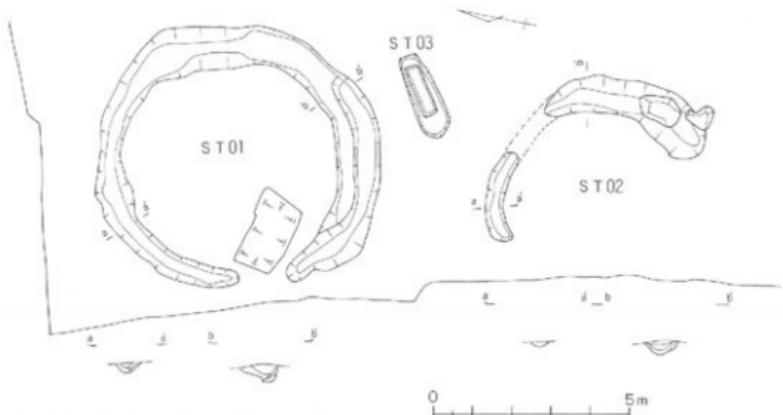


fig. 137 ST01, ST02, ST03平面図

土師器 土師器は、古墳時代後期のものと、平安時代後期のものがある。古墳時代のものは、鉢、甕、高壺等が、平安時代のものは、鉢、甕、小皿等が出土している。

須恵器 須恵器の殆んどは6世紀前半代のもので、蓋壺、高壺、壺等が出土している。

滑石原石 滑石原石は一辺が3cm程の立方体で、深緑色を呈している。

滑石製紡錘車 滑石製紡錘車は、高さ1.6cm、上部径2.1cm、下部径4.1cmで、側円周には剥離痕が、底部には粗雑な模様が入っている。

須恵系中世陶器 中世の包含層は殆んど存在しなかつたため、出土量は極めて少量であるが、壺・片口鉢などがある。

瓦器 井戸(SE01)やSB04を切る中世遺構から若干出土している。器種は、壺、小皿のみである。



fig. 138 ST01遺物出土状況



fig. 139 S X01遺物出土状況

5. まとめ 今回の発掘調査によって「菟原郡衙」を裏付けるような時期の遺構は検出されなかったが、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代後期、鎌倉時代と比較的良好な遺構が多く発見されたことは、この地域の歴史を明らかにする一助となった。特に円形周溝墓は、兵庫県下では但馬・米里遺跡の存在が有名であるが、神戸市内ではもちろん初めての発見であり、その意義は深い。

郡家遺跡内では、昭和57年度に調査した天神川遺跡でも弥生時代後期の方形周溝状遺構が発見されており、さらに、今年度調査した天神川遺跡でも同時期の木棺墓が2基発見されている。これらをみると、弥生時代後期の段階で、城の前地区周辺のかなり広い範囲が墓地であった可能性も高く、今後の調査によっては、その点がより具体的に明らかにされるものと思われる。

また、今回の調査で古墳時代後期の住居址が4棟発見されたが、六甲山南麓の扇状地上では、これまで古墳時代の集落址は知られていなかったのでその点でも注目すべきことといえよう。

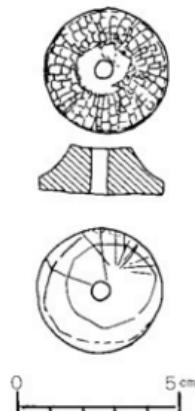


fig. 140 滑石製紡錘車実測図

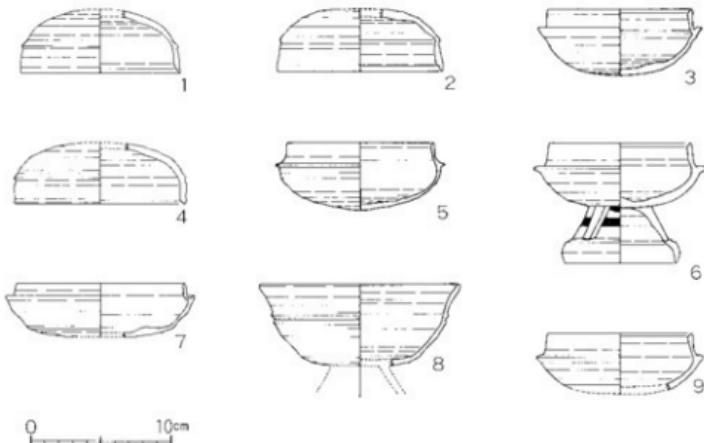


fig. 141 須恵器実測図 (1~6, SB03出土; 7, SB05出土; 8, 9, SB04出土)

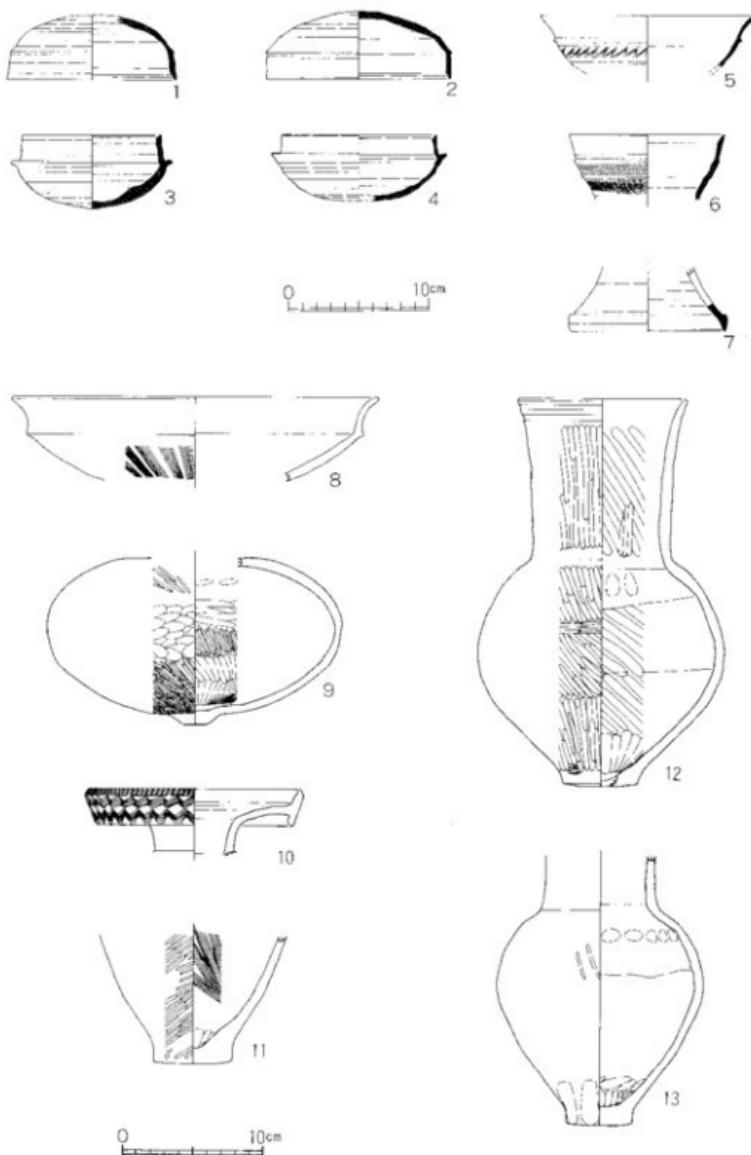


fig. 142 出土遺物実測図 (1~4, 6, S B04出土須恵器 5, 7, S B03出土須恵器 8, 11~13, S X01出土弥生土器 9, 10, S T01出土弥生土器)

13. 郡家遺跡(地蔵元地区)

1.はじめに 今回の調査は、東灘区御影町地蔵元、城の前地区の都市計画道路山手幹線予定区域内における事前調査である。

第1次調査は、東灘区御影町地蔵元の南北18m、東西36mの510m²について実施した。第2次調査は、東灘区御影町城の前の南北15m、東西44mの600m²について実施した。

fig. 143
調査地
位置図



2. 調査概要 第1次調査

調査地北壁断面で確認した層序は、地表下0.3mまでが表上で、地表下0.5mまでが、旧耕土・床土である。その下層には、弥生土器・古墳時代の土器を含む黄褐色粘質土層、弥生土器・古墳時代の須恵器を含む淡茶色砂質土、弥生土器を主として包含する暗褐色粘性砂質土となり、地山は茶灰色砂層である。検出した遺構は、調査地東側で溝1条、ピット3か所である。調査地西側では土壙2基、河川状遺構8か所、ピット2か所である。

検出遺構

- 土壙1** 調査地南西部で検出した楕円形の土壙である。長径2.7m、短径2.2m、深さ0.2mを測る。埋土より、鎌倉時代の瓦器塊、三足鍋、土師器皿が出土した。
- 土壙2** 土壙1の南西1mに位置する楕円形の土壙である。長径1.3m、短径0.8m、深さ0.2mを測る。埋土中より、少量の瓦器片、土師器片、須恵器片が出土した。
- 溝 1** 調査地東側で検出した南北方向に流れる溝である。幅0.6m、深さ0.1mで断面U字状を呈する。
- ピット1~3** 調査地北東部で検出した円形のピットである。いずれも直径約0.2m、深さ0.1

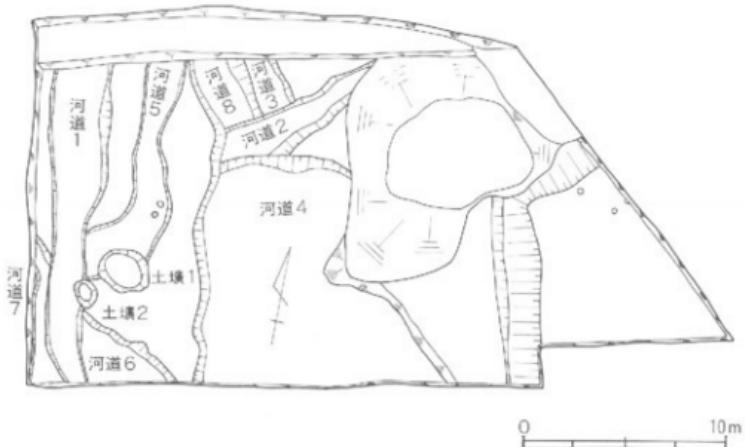


fig. 144 第1次調査遺構平面図

m~0.2mを測る。

ピット4 調査地西側で検出した楕円形のピットである。長径0.8m、短径0.55m、深さ0.15mを測る。

ピット5 ピット4の南側0.5mに位置する楕円形のピットである。長径0.45m、短径0.3m、深さ0.1mを測る。

河道1 調査地西側で検出した南北方向に流れる自然流路である。幅2m~3m、深さ0.15m~0.2mを測る。埋土より瓦器塊、土師質小皿、土師質羽釜が出土した。

河道2 調査地中央北寄りに検出した北東から南西方向に流れる自然流路である。幅1.5m~2.5m、深さ0.2m~0.3mを測る。河道4によって南側が区切られている。

河道3 調査地中央北端で検出した北西から南東方向に流れる自然流路である。南側を河道2、西側を河道8によって切られている。幅は、現存長で2m、深さ0.1mを測る。

河道4 調査地中央を東西方向に流れる自然流路である。北側の肩のみ検出している。幅は、現存長で11m、深さ0.1m~0.4mを測る。埋土より、土師器片が出土している。

河道5 調査地西側で検出した南北方向に流れる自然流路である。南側では、南西に屈曲しており、屈曲部付近は土壤1によって切られている。また南側を河道1



fig. 145 土壌1出土状況